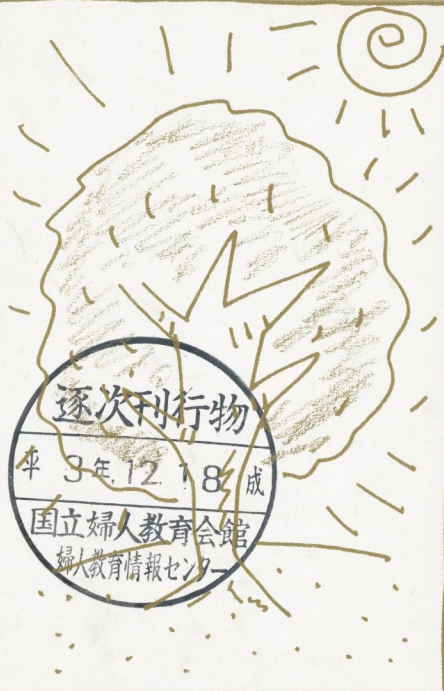
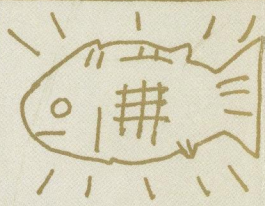
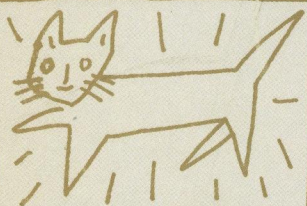


自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を
育み 創り出す

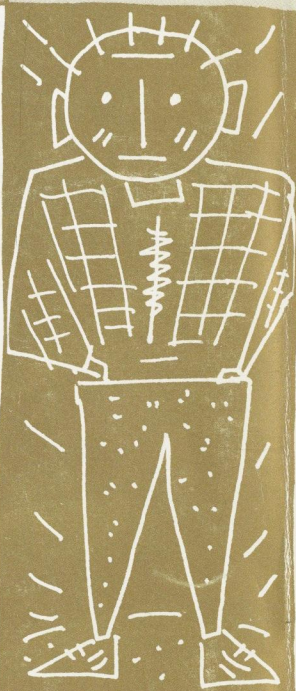
新しい家庭科

We

ウイ



逐次刊行物
平成3年12月18日成
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター



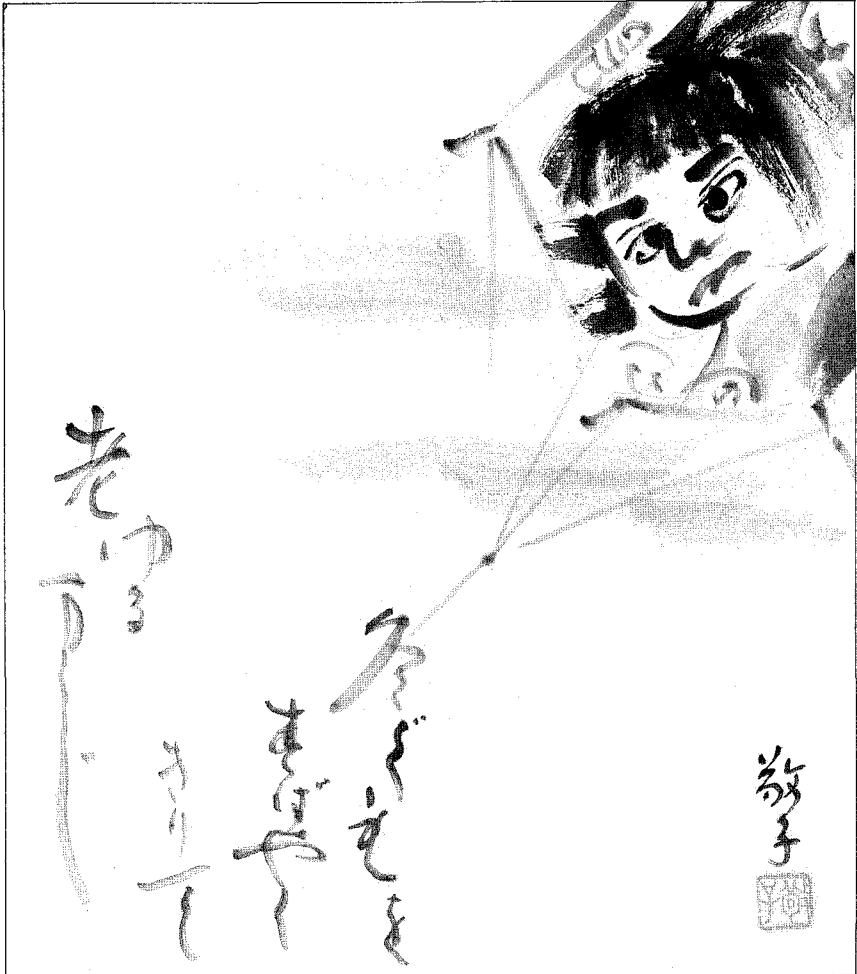
1
1992

特集

揺らぐ家庭

季節のうた

仙田敬子



凧

冬雲を
すばやく截りて
老ゆるまじ

インタビュー

板本洋子さん

―若い人にとって、結婚とは

「異常な」出来事?―

(インタビュー・半田たつ子)

2

●父子家庭、雑感

春日キスヨ

10

●テレビドラマで描きたい家庭

河村雄太郎

15

●「仕事も家庭も」考

大橋由香子

19

思い出の国をさまよいながら

上原道子

24

私の子離れ

大沼恭子

26

「母」であること

佐藤友枝子

28

「父」なるもの

西崎 徹

30

子を育てるということ

重川治樹

32

自立とは、個を生きることと

見つけたら 石川由紀

34

「学習の主人公たち」

高校生が考える家族・家庭

兵庫県立明石高等学校の生徒たち

37

新しい家庭科を創るために

●小学校

統・「ヒトと生殖」を授業で

鈴木まき子

40

●中学校

「家庭生活」をどうとらえて

授業を組み立てるか

寺西裕子

46

●高等学校

「家族」の授業から

―新しい家族観の芽ばえ― 分校淑子

51

荒野のバラ

働きの中に 内なる輝きをこそ

田中裕一

58

家族と家庭科

小学校教科書の新しい特徴

酒井はるみ

62

男性学への契機／鷹男の宅急便

男はつらいか

諸橋泰樹

64

精円の夢 夢の精円

武田秀夫

66

あかきたな 失敗は成功のもと 福田 緑・加藤由美子

68

現代衣生活考

ヒラヒラの呪縛(下着その2)

むらき数子

70

オホーツクの潮風荒く:

暴力以外に特効薬はないよ

江口凡太郎

73

波「女と男の地平を拓く」

―都民会議レポート―

半田たつ子

74

○ひと 蔵本佳子さん 36

・今月の読書から 23 ・イキイキぐるうぶ 57

・Weになんでも言おう なんでも聞こう 78

・わたくしからあなたに 81 ・編集室からあなたに 82

・泉 83 ・十字路 84 ・アンテナ 86 ・編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田敬子
特集イラスト／降矢奈々

板本 洋子さん

—若い人にとって

結婚とは「異常な」出来事?—

イ
ン
タ
ビ
ュ
ー

・インタビュー— 半田たつ子

樋口恵子さんが校長、斎藤茂男さんが副校長という「花婿学校」が、板本洋子さんの骨折りでオープンしたのは'89年。大きな関心呼び、話題を集めた。2年続けて開いて、'91年は一休み。いま'92年の開校に向けて準備中とのこと。外国のジャーナリストから質問攻めにあったが、驚異的な高度経済成長の蔭に、企業に身心を捧げつづいた男たちがいて、そうした男に、女は魅力を感じない。「花婿学校」は、この図式の中に存在するものと理解した時、みな納得したということだ。

'91年夏のフォーラム「女の解放・男の解放」分科会にお招きし、板本さんのお話は鋭くおもしろかったと大好評だった。その分科会に参加できなかった私。神宮外苑の紅葉が雨にしとど濡れる日、板本さんを一人占めしてお話をうかがった。



■プロフィール

茨城県日立市生まれ。日本女子体育短期大学卒業後、総理府統計局に勤務。その後、日本青年団協議会に入り、事務局員として青年団活動に従事したあと、財団法人日本青年館に移籍。

'80年結婚相談所設立と同時に専任となり、'84年以來所長として、結婚、青年、女性問題を中心に活躍中。

著書に『現代結婚事情』（家の光協会）『花婿学校——いい男になるための10章』（共著・三省堂）他。

何故「結婚相談所」？

——日本青年館に結婚相談所ができたのはいつごろですか？
板本さんは、出発時からお仕事していらしたのですかね。

板本 一九八〇年の十一月オープンでしたから、開設して十一年になります。財団法人・日本青年館は、全国の青年団の一人一円募金によって一九二一年に開設しています。五〇年を越して老朽化しましたので、再び青年団の募金を募りながら、多方面からの支援をいただき、新館に改築しました。この機会に新たな青年教育の一翼を担う活動の一つとして、「結婚相談所」をスタートさせたのです。

従来から青年団組織としての社会教育的活動の中で、恋愛や結婚に関わる話合いなどは持たれていたのですけれど、営業として結婚相談所を開き、私にやれといわれた時、男と女を引き合わせる仲人業というのは、気がすまなかつたのです。でも内部事情もあって専任となり、84年から所長を勤めています。十年間、ぶつかった問題や疑問をテーマに、紹介業務から結婚を考える機関として展開を計ってきました。

いいカップルと思うのに、結婚に至らない。それはどういうところに原因があるのだろうか、と考える。そのうちに農村の結婚難対策や、村の国際結婚の問題が、次から次へと出てきました。個人ではどうしようもない、背景にある社会的な問題が見えてきました。私たちに知恵があったわけではな

くて、訪れる方たちの悩みや希望に、社会の断面を見せつけられ、知恵をつけさせられて、レクリエーションやパーティなど出合いの機会を設けながらも、シンポジウムをしたり、農村の集団見合いをやりながら農村問題を考えたりして、十一年たったということですよ。レールのない仕事でしたから、すべて現実にはぶつかるところから、知恵をつけられて来たということでしょう。

結婚相談所の十年

——この十年というのは、日本が大きく変わった時ですか、社会の断面を見つめながらの営みでは、さぞ変貌を実感されたことでしょうかね。

板本 そうですね。高度成長経済がもたらした歪みが至る所に吹き出てきた時ですね。最初は公害のように目に見える物理的弊害が人間社会をおそい、やがて目に見えない部分、人間の心や精神が病んできました。何だか分からない不安……いや、情報化社会だから見えすぎているのかもしれませんが……。いろんな情報が与えられるままで、自分が生きる姿勢が描けない。はじめ私、青年だけを責めていました。「しっかりしなきゃいけない。あなた、自分のことでしょ」って。でも、個人を責められないと五年ぐらいたった頃から気がついたんです。みんな自由に生きていくようで、もっとも自由じゃない。その頃から、ここに来る青年たちに「結婚相談所があ

るってことへんだと思わない？」って言うようになったんです。

私は余り論理的でないもので、何時も現実からしか言えないし、現実だっているんな見方があるわけで、私は一方からしか見ていないこともあると思うのですが、模索してきました。

——そこが板本さんの強みではないでしょうか。沢山の若い人たちと接する中で摺んでこられたものは、頭だけの理屈でない、地に足がついた思索ですから、力があると思います。

板本 それでも今、若い人たちが見えづらくなってきましたね。今の若い人はしゃべらないんですよ。一緒にお酒飲んだりしてるんですが、彼等は言うべき言葉を持っていない、という感じが強いんです。彼等の本音を引き出すのに、すごく時間がかかってね、疲れます。

——そうでしょうね。分かります。

この十年間訪ねて来られる人は、男性と女性とどっちが多いのでしょうか。また十年間で変化がありますか？

板本 男女別にしますと、最初はほとんど男性でした。

三、四年ぐらい前から女性が増えてきました。何故なのかよく分からないんですが、多分私たちがいろんなメッセージを送り出したこと、シンポジウムや花婿学校もそうですが、それに女性たちが共感してくれたということだと思います。花

婿学校には非難する女性もいましたが、一方で事実としてあったのは「いい男がない」。私たちと共に歩いてくれるような男性がない」ということですね。そして花婿学校が何をやっていくかを、彼女たちはよく読んでいまして、そこに来る男性なら前向きに考えているんじゃないか、ということでも女性の来訪者がふえました。そこで花婿学校も、途中から男女共学にしようということになったんです。

「結婚したくない女性」がふえたと言うけれど、私は女性は「結婚したい」と思っているのと見ているんですね。ただ、その価値観が合う男性に遭遇できないでいることが、原因だと思っています。

もう一つ、相談に来る人の六、七割が親であるということ、十年間変わらないですね。最近は少し親が増えました。

——まあ、そうなんですか！ 親が子に内緒で来た場合、当然息子や娘に分かるのですが、その時の彼等の反応はどうなのでしょう？ いらぬいお世話焼いて！ と言うのか、ありがとうって感じなのか……。

板本 子供に内緒で来る親は多いのですが、その場合は入会できません。お見合いがデータベースで決まって通知が行くのに、本人が承諾していないためにお見合いをキャンセルされたことになりました。本人が納得しないままに、親に連れられて来るということもありました。その場合、親の前

で言っていることと、親のいないところで言うことが全然違うというのが、女性の場合に多いんです。親が心配しているのととりあえず入会したが、私はまだ結婚する気がないといいます。男性はほとんど親に言われるままって感じですよ。あの意味で娘より息子のほうが親孝行なのかもしれないませんが、結婚したいのか、したくないのか、よく分からないけど、まあヨロシクって感じですね。(笑い)

訪れる青年―男女の違い

—今のお話をうかがっても、女性のほうが結婚観・家庭観がはっきりしていて、男性のほうが自分の考えを持っている。あいまいだということでしょうか。

板本 男性は、情報として男女共生的な見方を持っている人はいませんが、体の中では分かっている。具体的なことを一つずつ聞いていくと、何も確かでないんです。意識と現実が一緒になっていないので、昔の男のありようが先行し、新しい考えは後から来たものですから、コトバとしては言っても、実践が伴わず具体性がないんです。

これからの男の解放をめざして、花婿学校を三か月開いたのですが、その時、「明日、僕に変わって言われても、それはできない。でも、明日から認識を改めることはできる」と言った人がいるんです。その時、花婿学校の講師が「認識だけじゃあ困るのよね。やってくれなきゃ」って言われたけ

れど、私は、たとえ認識だけでも拍手を贈りたいって言ったんです。女性だって、男性に依存して生きることしか考えてない人もいますから。

—十一月二十日に東京都で「91女性問題を考える都民会議」のイベントがあって、その企画委員をしてきたのですが、夜はお勧め帰りの人や学生さんなど、若い人をターゲットにした集りなんです。委員には学生さんもいるので、「若い人はどんなことをやりたいの」と尋ねました。すると「一般論として語っている時と、具体的に相手が出てきた時では、恋愛・結婚にかかわる異性観と自分のありようが違ってくるのではないか、そこを掘り下げたい」と言うんです。尽くすのが女の愛だと思ってみたり、その上に乗っかって「ついてこいよ」って言うのが男のカッコよさじゃないかと思ってしまう。恋愛によって変わるのが必然なのか、変わらないまま結婚にゴールインできるものなのか、そのへんが分からなくてモヤモヤしている、ということでした。

板本 そうでしょうね。うちの相談所に来て結婚相手を探そうという人は、どちらかと言えば、伝統的な考えの人が多いいんです。男女共に「私はこう生きたい」という思想がありますよね。本当は、その思想性が結びつけばいいのでしょうけど、男女の間は、思想だけではなくエロスとか、フィリングとかもありますね。エロスだって思想性に裏付けられ

ていれば一番いいのでしようけど、一般にはそうならないな
くて、エロスやフィーリングが先行しちゃうんですね。

思想性から言えばピッタリの人がいても、もう一方の人の
方にセクシュアリティとしてひかれるものがあると、後者を
選びますね。すると彼女は自分に要求されている女を演じ、
矯正されていきます。こうして自分では望んでいなかったは
ずの人生を歩み続けて、ある時「離婚」という出口にたたず
む、ということにもなります。しかも思想性で一致する女性
を求めている男性は少数派ですから、どうしてもフィーリン
グ派に出会っちゃうんです。それは男性にもあてはまること
で「女性の自立」なんて言うけれど、それを志す女性は少数
派で、世の中で言っていることと現実がちがうんじゃないか
って思っています。私は柔軟に軌道修正できることが必要じ
ゃないか、問題はお互いが居心地のいい関係を作ることじゃ
ないかって言っているんです。

月水金と私が御飯作るから、あなたは火木土と機械的に分
担しようと考えたり、農村でも有機農業している人と結婚し
たいと言う女性がいますが、話していると、どうも結婚とい
うより有機農業をすればいいんじゃないか、って言いたくな
ったりすることもあるんです(笑い)。へんに思想性が固ま
ってしまうのも問題ですね。

マスメディアの表現と現実

——十年間に世の中は変わっていますが、若い人たちの変化
と、マスメディアなどに飛びかう言葉と、ズレがあると感じ
られることはありませんか？

板本 マスメディアが言っていることと青年の現実と、そ
う開きはないと思いますが、同じではないですね。マスコミ
はセンセーショナルに言わなきゃならないから、声を出した
ものだけしか取り上げられない。女の現状は「三高」だと取
り沙汰された時、テレビカメラとともに私も新宿でインタビ
ューに立会ったことがあります。ディレクターは「三高」
の裏付けをしたから、若い女性に「収入は？」って聞きま
す。でも「一千万以上がいいわ」って言ったのは、五十人中
三人ぐらいです。しかも、その三人はノリで言わせられてい
るって感じなんです。ところが情報として出ると「女は高収
入を願っている」となるんです。

結婚相談所で集約すると、学歴は高いほうがいい。女性も
高くなっているから。職業は農業・漁業・個人企業ではなく
て、安定しているほうがいい。そうなると上場企業、トレン
ディといわれる職業になるんです。そして女が美人がいいっ
ていわれるような感じで、背は低いより高いほうがいい、と
いうことになります。データベースでいうと、確かに「三高」
に限りなく近くなるんですよ。でも男だって「四K」を希望
しています。「かわいい、家庭的な、賢い、軽い(体重)」女

が求められていますね。

「いずれも、それはデータであって、そうした条件が結婚の絶対条件には決してなっていないません。条件で結婚が決まるなら入会者の半分は、すぐ決まってしまうです。」

今の若い人たちは、人間の生き方や心の思いで人間を計るのではなくて、数字で支配されている。経済社会は数字しか表面に出さない。もっと青年の思いもちゃんと掬いあげなければいけないのに、マスコミ関係者はセンセーショナルに特徴だけをポンと出す。それを信じていじける青年がいる。情報社会の怖さを感じます。その意味で現実と遊離していると思うことはあります。心の底に沈むものを吐露しない社会、自分の言葉を持たないので、つい、どこかで聞いたような言葉をしやべってしまう現代人ということでしょうか。

若い男女のコミュニケーション

——うちの下の娘も結婚したいと思っているし、その条件はごく当たり前のこと、仕事を持って生きていくことを認めてほしい、仕事を持つからには、家庭のことも共に担ってほしい、ということではない。そんなことを、私とはよく話しているのに、友達との電話でのおしゃべりは、調子が違う。全く今ふうなんです。仲よくしている男の友達と、どうしてきっちり話さないのかなあ、って思うんですね。

板本　そうですね、単純な情報交換はするのに、何故大事

なことをちゃんと話し合わないかというところ、訓練されていないということもあるんでしょうが、多分それはすごく疲れることなんじゃないかと思うんです。男性は、仕事ですごく疲れている時、その話題を持出されると、いきなりポーンとフエミニズムの世界に連れていかれたように感じて、受けるのは疲れるし、受けなきゃ嫌われるし、そうだね、そうだねって全部イエスマンになっちゃう。女性はコイツ分かってんのってね。それを見ぬいちゃって、本当に実践するのか、口先だけじゃないんだらうかって、疑っている。

若い人とずうっと話していると、いろんなもの持ってるし、魅力的なんです。でも、それは私がカウンセラーという立場で、また私が結婚の対象でないから話せるということもあります。対象になるような異性と、納得いくまで話し合うと攻撃的と受けとられて、嫌われたり、逃げられたりするんじゃないか。それが怖い、という気持ちは、若い男女に強いと思いますね。

今の若い男女の結婚観

板本　若い人にとって、結婚とは「異常な」出来事になっているんじゃないでしょうか。つまり進学とも就職とも違う（笑い）ハードルを跳ばなきゃならないんですから……。

——おもしろい見方ですね。

板本　私は若い人に、あんまり結婚すること考えなくて恋

愛することよって言うんです。恋をして失敗し実らないこともあるけれど、一生這いあがれないことなんてないんだから。でも今の若い人たちは合理的ですから、そんなことを話し合って、時間もお金も使って、もし結ばれなかったら、徒労におわっちゃうと思うんです。それが生きることなのよって言うんですけれど、現実にはふられたショックとか、「およめさん」の来手がないっていうことは、そんな簡単なものではないと言われます。

——娘は、今若い男女が開かれた場で出会うことがホントにない、と言いますね。男性は職場にからめとられていて、休日もスポーツや趣味のサークルどころではない。仕事の上のつきあいとか、ごろ寝か、ボケーっとしてるか……。若い人同士、仕事が終わった後、居酒屋でダベる位が関の山、そういう場で将来を共にしようなんて真剣に話せないでしょうと言われて、寂しいなあと思いました。

日本の社会の中には、出会う場がほんとに少ないのですが青年団活動は、そういう場になっていたのでしょうね。

板本 かつては、ね。でも今、農村でも都会でも、本当に出合いの場がない。青年団も忙しい社会の中では存在が難しくなっています。そんな中で恐ろしいと思うのは、学校教育です。無駄なことは教えて、多分、競争社会で誰よりも早くあんパンを食べることしか教えていない。後向きに走る子

や、横向きに走る子は抹殺してきているということが、人を見る、人と付合うという力を育てて来なかったんじゃないか。食べ物がいいですから、身体はどんどん育って大きくなるけれど、心は反比例して、どんどん貧しくなっているんじゃないか。三十まで生きて来た男性に、仕事と違うところで人間形成する場があったかどうか疑問です。女の方が経済の担い手としての期待が男性より少なく、無駄なことをしている分、少しは人間形成の場があったのじゃないかと思えます。青年団は金にならないことを学ぶ唯一の場だったのかもしれません。

青年の幼いけれどひたむきな活動が、今はもうない、というところが、人を恋するというようなところに見事に弊害となっているように思いますね。それに加えて家族や男と女の関係が変わりつつある、ということですね。だから今までの規範をイメージして、次の世代を作ろうとしても作りきれない。モデルがないんです。こわれちゃっていますから。だから次にどんな理想を結婚や家族に求めるのか、親はただただ不安がるだけ。子どもは昔の規範に求められながら、それは女にとって窮屈だ。男は女が「違う」って言っているから違うようだ。そんな混沌とした時代が続くんじゃないかって思います。

——結婚とは当事者の問題だから、その時を過ぎた人が老婆

心か老爺心か知らないけれど、やきもきしてもしょうがないわけでしょう？ だから模索しながら、右往左往しながら、彼等彼女らはやがて何かを生むのでしょうか。

板本 私はちょっと先を予測できないですけど、多分生まれ変わるだろうし、生まれ変わらなすにはいいだろうと思えますね。都会を見ていると分からないんですけど、農村を見ていますから、日本の社会のある意味で切捨てられた縮図を感じるんです。今のありようは多分こわれるだろう。そして全く別なものが出てくるだろうって。それは何かはよく分からないんですけど。

私、一昨日まで山形の高島町に行っていました。ちょうど五年前、私が青年団活動の仕事に関わっていた時、高島町の女性たち、当時十八歳から二十三歳だった人たちが「母と私」というガリ版刷りの文集を作ったんです。彼女たちは女性史を勉強するんですが、実態を検証するために、お母さんの今までの人生を書き綴るんですよ。一回で書けなくて何度も書き直して、まとめ上げるんです。苦勞し続けた母の姿から彼女たちの結論は「私たちは、抑圧されていた母とは違う時代を生きたい」ということだったんです。その彼女たちは、今三十代後半の母親になっていて、どんな暮らしをし、何を考えているのだろう。そう思って訪ねたんです。

その彼女たちの多くは、生活は便利になったが、女として

の窮屈さは改善されていない。農業も一層悪い状態になっていて、今母として子どもに言いたいことは「好きなようにしていいよ」ということだ。農業に何の希望も見出せない。後を継げなど言えない。都会に出て行こうが、村に残ろうが、「好きにしたいよ」と自由に選べるようにしてやるのが親の愛情だと言うのです。唯一希望を感じたのは、有機農業をしている女性でした。彼女は、農業に自信を持っていたのが印象的でした。親に言われて今の農村を継いだ最後の世代が彼女たちです。子どもたちは、これから何を選んで生きていくのか。日本の社会は、一層大きく変化すると思います。

——山形の高島町といえば星寛治さんの村ですね。

板本 そうです。辛い労働に終始した母の時代とは違う生き方を志して、今自分の子どもには、好きにさせたいと願う、ということは大変な変貌ですよ。それは個人ではどうしようもない大きな時の流れ。色々なものがこわれて、さあそこから何が生まれようとしているのだろう？ と考えてしまいました。

——これはまた新しい大変な問題ですね。答えは出せないけれど、板本さんが、つねに現実を見つめ、生きて暮らしている人たちとコミュニケーションしながら、御自身の思想とお仕事を築いてこられたことが一層よく分かりました。長い間ありがとうございました。

揺らぐ家庭

父子家庭、雑感

春日キスヨ



一、はじめに

広島市で「父子の集い」という、父子家庭の会合が、一八四年以来続いている。この会合に結成以来参加し続けてきて、見えてきたことが数多くある。その多くは拙著『父子家庭を生きる―男と親の間』（勁草書房）としてまとめたのであるが、力説しても足りないのが父子家庭の「経済問題」である。

父子世帯は全国で十七万世帯あまり。離別世帯が六割ちょっと。死別より生別が多いのは母子世帯と同じである。ところで、年間収入を母子世帯とくらべると、データは少し古いですが、母子の平均年収二〇〇万円、父子の平均年収二九九万円（一九八五年厚生省調査）と約一〇〇万円ほど父子の方が多い。この一〇〇万ほどの差額に着目して「父子世帯は母子世

帯より経済的には楽」という常識が流布している。しかし、父子の「経済問題」を単なる収入金額だけでみてはならないというのが「父子の集い」との関わりの中でみえてきた事実である。

二、経済システムの中の父子家庭

現代の日本は男性優位の性別分業社会である。それは、夫婦という家族を最大限搾取できるよう効率よくつくられていく。男女の性別役割分担のもとで、男性は「過労死」に至るまで「企業戦死」として酷使される。女性は、妻として、母として、家庭管理・育児役割を担い、かつ低廉な「パート」労働者として、二重役割負担を強いられる。この経済システムでは男性にも、家庭生活を維持する役割があることなどはほとんど考慮されていない。したがって、夫婦がそろっていて

有効に機能するようつくられたこのシステムの下で、単親となったとたん、男性から家庭生活を奪い尽くし、女性から経済的自活の途を奪っているはずみが増幅して単親家庭の生活苦として現象してくる。

ところで、夫婦家族が配偶者と離別して単親家庭となる、その時、母子家庭の場合には、弱者として低位置におかれてきた女性であるゆえに、母子福祉制度が貧弱ながら整えられ、三万あまりの児童扶養手当、母子寮、母子住宅など、いくばくかの施策がある。さらに子どもが幼くて、親を必要とする間は、パート勤務、児童扶養手当をあわせて少ない収入をやりくりし、家計をきりつめる家事能力も多くの女性たちは身につけている。

しかし、もともと強者とみなされてきた男性が二、三歳の幼児をひきとって親・きょうだいの援助もなく、親として生き続けようとするとき、それを支援する父子福祉制度などはほとんどない。誰も彼らを弱者とみなさないし、しかるべき援助が必要な人たちだという認識も共有されていない。

ある時、福祉関係の要職の人の車に同乗することがあった。そこで、日常接触している父子家庭男性の窮状について代弁した。すると、「父子は男性でしょう。それも働きざかりの。弱者というのは障害者や、老人や母子をいうんであって、男性は弱者とは言いません。だから、福祉の対象には病

気か事故にあわない限りなれません」と、一笑に付されてしまった。福祉の現場の人でさえこうである時、企業社会の中ではなおさらである。「女房に逃げられた男」と嘲笑されることはあっても、便宜をはかってもらえることなどまずない。中年の単身男性に厳しい目を向ける職場の雰囲気の中で、父子家庭である事実を同僚に隠している男性も数多い。

ところで、男性の職場には、子どもの生活時間に合わせたパート勤務をしようにも、そんな勤務形態のとれる職場は数少ない。さらに欧米より四、五〇〇時間も年間労働時間が多いといわれる日本の企業では、残業勤務がざらである。保育所・学童保育の終わる頃に勤務を終えて帰れる男性の職場など例外的な状況である。残業だけでなく、出張や、夜勤、三代勤務など不規則勤務で成り立っているのが男性の仕事の状態である。妻がいる間は、なんの疑問を持つこともなく適応していた勤務体制も、妻がいなくなり、自分で親であることを引き受けたとたん、一片の家庭生活も個人に保障しない過酷なシステムであることが、実生活の中でみえてくる。

「集い」の中で出た男性の勤務と子育ての話題のうち、メンパーが「まだまだ自分たちも頑張りが必要」と脱帽した話がある。小学三年生と一年生をもつ、ある大手企業につとめるその男性は、半年間パーレーンへの出向を命じられたという。彼が父子家庭であることを知る多くの人は、彼が出向

をやめるか、子どもを養護施設に入れて出向するか、どちらかを選ぶにちがいないと予想したそうである。ところが、彼は子どもをいったん手放すと独身生活の安逸さに走り、子どもと共に暮らす気がくじけそうだという理由で、子どもを施設には入れなかった。しかも、妻と別れるまでは「やり手」として通ってきた自負を損いたくないという気持が、出向を断ることもさせなかった。子どもと仕事の板ばさみの解決策として、なんと彼は、六カ月間ビジネスホテルと長期契約して子どもを委託したのだそうである。昼食は学校給食で、朝夕の食事・洗濯・寝場所ホテルに委ねて、なんとか、無事その任務をやりこなしたというのである。

同僚の話として「集い」のメンバーの一人がこの話題を出したとき、メンバー間には感心する者、異論、反論、疑問、ひとしきり話はずんだ。そして、壮絶ともいえるその話についての感想として大方の共感をよんだのは次のようなものだった。「それでもしなければ、仕事をしながら父子家庭を続けることはできないように、男の仕事はなつとるのよ。でも、そうしながらでも子どもを手放さない生き方をしたその人はりっぱよ。子どもを手放した人生は、楽かもしれんが、一生悔いが残ると思うよ。その人は、悔いを残したくなかつたんだろう」。

子どもの人権という点からは、問題が残るとして、父子分

離を避けようとすれば、そこまで思いつめさせていくのが、男性のとりこまれた経済システムであることの一例である。事実、父子家庭になって、子どもが小さいため、育児を優先し、転職し、その結果、なれない仕事に挫折し、さらに転職を重ね、下降移動せざるをえず、経済的基盤が崩壊していったようなケースもある。したがって、多くの父子家庭男性は、子どもの寂しさと引きかえに職業の継続と経済的安定を獲得せざるをえない状況に追いこまれている。母子家庭より多い父子家庭の高収入とは、そうした男性が生きる経済システムのもとで、子どもと共に親として過ごす時間を企業によって強奪され、それと引きかえに与えられた収入なのである。こうした文脈でみる時、父子の経済問題は小さいなどとは決していえないのが現状である。

三、父子の家計

ところで、高収入が得られたからといって、安定した家計が営まれているともいえないのが、父子家庭の家計の実情である。第一、彼らの多くは、妻と別れるまで、家事ならびに家庭管理などしなかった人たちである。さらに、義務教育でも家庭科教育を受けていず、ご飯のたきかたひとつ学んでこなかった人が多い。「集い」が始まった最初の頃、メンバー同士が、そうめんのゆで方について、大真面目に「水から入れるか」「沸とうして入れるか」と話しているのをきいて、

その無知さ加減にびっくりしたことがある。したがって、父子家庭になつて当初のなれない間に彼らがする料理の種類をきいていると、冬はすき焼き・なべ物、夏はめん類・野菜いためなど、簡単に出来るものが多い。さらに、残りものを上手に利用して、次の日のメニューに使うなどといった工夫が下手なので、何かと無駄が多くなつていく。大根一本を無駄なく使いきる母子とそれの出来ない父子とでは、無視出来ないほどの経済的支出の差となつて家計を圧迫していく。

またこの調理能力の低さに、仕事で帰宅時間が遅くなることが重なる時、不慣れた家事は、なお一属憶劫なものとなる。その結果外食・出前等に頼ることが多くなり、その分、出費がかさんでいく。さらに、母子家庭であれば、休日に手づくりのおやつなどをつくつて、子どもの留守居に備えることなども出来ようが、父子家庭では、そんなことが出来る人などほとんどいない。その分を父子家庭では、多めの小遣いで補うことが多くなり、俗にいう「金で子守りをさせる」という暮らしにともすれば陥りがちな部分を持つてしまう。

さらに、衣服の出費も通常の家庭よりはるかにかさみがちである。彼らの多くは衣服の手入れについての基礎知識ももっていないことが多い。ミシンなどもない家庭の方が多い。だから衣服のちよつとしたほころびさえ繕えず、まだ着れるものを捨て、新しいものが購入されることも多い。

こうしたあれやこれやの家事能力の貧しさによる無駄の多い出費を加えていくと、母子世帯より高収入かもしれないが、支出の面でも、母子とは較べものにならないほど多いのが父子家庭の家計である。母子の経済問題も深刻な問題であるが、父子家庭の経済問題も、二重の意味で問題であるという社会的認識は、もっと共有される必要がある。そうすれば、母子のみに児童福祉の名目で支給されている児童扶養手当も、困窮している父子家庭にも支給され、経済的に楽になる父子家庭もあるにちがいない。

四、『男らしさ』の不自由さ

経済問題を含めて、父子家庭の暮らしは、大変な困難をかかえている。仕事一辺倒だった彼らが、料理や家事以外でも困るのは、子どもとのコミュニケーションである。妻に育児をまかせ、妻が援助をとおいだしにのみ『正論』『建前』の説教をして、おやじの役割を果たせばよかつた彼らは、父子家庭になつてはじめて『正論』では育児が出来ないことに気づかされる。しかし、男性として身につけてしまった『建前』癖は、父子になつたからといって、一朝一夕にはなおらない。子どもの心の動きをよみ、それに即応した感情を言語化してゆく力は、日常の細やかなつみ重ねの中でしか培われない。したがって多くの場合、父子家庭になつた直後は、どの父親も子どもたちとの間に、多かれ少なかれとまどいや異

和感を持つ。そしてこんな時、大抵の場合、彼らの多くは「やっぱり、男親では、子どもは育てられない」と落胆する。

そして、こうして落ちこんだ時、援助を求める力をそいでいくのが「男の面子」という価値観である。強い性、自立する性とされてきた男性は、「人に頼らず自力で成しとげていく生き方こそが雄々しい生き方だ」という価値観を深く植えつけられている。だから、子どもをかかえて、援助が必要な時も、援助をあおぐことは自尊心が許さない。愚痴をいうことさえ「女々しい」ことだと非難される社会では、愚痴を吐くことも出来ない。だから、一人で悶々と思い悩むことが多い。こんな時愚痴が言え簡単な助言があれば、少々の悩みなどすぐ晴れるのであるが、子育ての情報が職場や友人など男同士のつきあいの中で得られることなどまずない。男同士のつきあいの中で交わされるのは競争社会の潤滑油としての野球・ゴルフ・車などの話題である。男性が子育てについて語るのには教育評論的に一般論として語られるぐらいのものである。

さらに、学級参観、子ども会、家庭訪問すら、仕事の都合で時間がつくれぬ父親は多い。担任教師に相談しようにも面識がないと相談しにくく、結局、一人で解決するしかないと思いついて生きてきた父子家庭男性は多い。そんな孤立無援の中にあつて、「援助を求めることは男の恥」と考える「男

らしさ」の価値観によって、なお一層追いつめられている父子家庭は数多い。

父子の「集い」に参加する前に、父子家庭・母子家庭についての調査レポートをいくつか読んでいた。そのレポートの多くは、「単親家庭になって困ったこと」という問いに対して、「家計」「家事」「育児」「住居」などと共に「困ったことではない」という選択肢を用意していた。それへの回答で、目をひいたのは、母子は、どの項目も選択率が高いのに、父子は「困ったことではない」が異常に高いことだった。統計数字を見るだけの研究をしていたその当時は、女性差別社会だから、男性は経済的にも楽で、だから「困ったことではない」父子家庭が多いのだろうと、単純にその数字を解釈していた。しかし、「集い」の中で見えてきたのは、父子家庭の経済問題の深刻さであり、家庭生活への構えを身につけてこなかった父子家庭の日常生活の大変さであり、それを「困ったこと」として弱音を吐けない「男らしさ」の価値に縛られた孤立無援の生活であった。

相補的性別分業社会で、その補い手である女性を失った時、女性より優位な位置におかれている男性であるために生活の落差は大きく、日常生活のみならず精神的にも苦境に立たされるのが父子家庭男性である。

(かすが きすよ・岩国短期大学)

揺らぐ家庭

テレビドラマで描きたい家庭

河村雄太郎



のっけから番組の宣伝めいて恐縮だが、新春に向けて二つのドラマを準備している。ひとつは一月三日放送の単発オムニバスで、原作は柴門ふみの短編集『家族の食卓』。私はそのなかの「トランプの家」を演出する。大竹しのぶと中井貴一が夫婦役の、ちょっとシリアスなホームドラマだ。もうひとつは一月十五日スタートの連続ドラマで、タイトルは未定だが、中村雅俊が主演する。こっちはコメディータッチの中年再婚物語である。

「トランプの家」はこんな話だ。ロス在住の大竹の姉夫婦が自動車事故で死に、十五歳の娘がひとり遣される。東京の大竹と中井夫婦には小学二年と幼稚園の子がいるが、中井の提案で一家はその娘を引き取ることになる。娘は素直で明る

く、すんなり日本の生活に溶け込んだ。が、実はこの娘は十五年前、つまり大竹が中学生の時に産んだ子だった。渡米する姉夫婦の籍に、大竹の母が密かに入れたのだ。まもなく、一家の前に娘の父である男が現れて……

とまあ、こう書けば何やら波瀾万丈の物語が予想される。中井は激怒して娘をいじめ、娘は耐えられず家出、絶望した大竹は娘の父、つまり昔の男とフリンする——これは言わば、家庭が崩壊する路線である。しかし、われらが平成四年のニューファミリーはそうならない。設定はあざといが、いわゆるドラマチックな展開はしないのだ。

実は、このドラマでは、娘の出生の秘密を大竹が自分の口から夫に告げるのである。隠していたのがバレるのではない。黙っていれば安泰なのに、なぜか彼女は打ち明けてしま

う。だからこそ主題が成立するのだが、それはともかく、結果は当然ながら一家に亀裂が生じる。けれども、彼らは破綻に向かわず、むしろ以前にも増して固く結びつく。そのプロセスは見てのお楽しみにすると、ドラマの最終的な狙いはどこにあるのか？

アメリカから来た娘は中井にとって、まさに異物だった。いっぽう、実の子にもかわらず、大竹にとっても異物だった。中井と結婚し、子供も二人生まれて幸せに暮らすうちに、彼女は十五年前のことを忘れた。ときどき、重い塊が胸にこみあげては来たが、気づかないフリをつづけるうちに本当に忘れてしまったのだ。本人を目の当たりにしても、死んだ姉の子としか思えなかった。そういえば、中井との間にできた二人も、はじめのうちは自分の子という実感が湧かなかった。一緒に暮らし、育てていくなかで、わが子になったのである。つまり、大竹は母親だから娘を受け入れたのではない。娘を受け入れることによって、名実ともに〈母〉になろうとしたのだ。中井のほうも、娘の明るさの裏にある屈折を知って〈父〉になろうと決めた。言うなれば、この家族は異質なものと触れ合うことで、自らを高めた。他者を受容すること、強くなったのだ。

《家族》はつい最近まで、外庄から人を守り、再生産を行う砦であった。今、それは社会の多様化と情報化によって、大

きく揺れている。もはや、安息の地ですらないかもしれない。しかし、だからと言って「血は水よりも濃い」と主張し、他を排して自らを閉ざすなら、《家族》は成長を止めてしまに違いない。

大竹は中井に告白したあと、娘にも母と名乗り出るだろうか？ いわゆる「母もの」のほとんどが、告げたくてもできない心の葛藤を情緒たっぷりに描いてきた。あるいは、対面の場を大きく盛り上げることで、客の涙を誘ってきた。が、このドラマはそれをしない。その必要がない。《家族》が成立するかどうかは、〈血〉の問題ではなく、個々の成員のコミュニケーションのありようと思うからである。

この主題は、中村雅俊主演の連続ドラマでも展開される。二十代で妻と死に別れた中村は、以来独身を通してきたが、四十歳を迎えて再婚を考えるようになった。相手は離婚経験のある人材派遣会社社長、篠ひろ子。小学四年の息子がいる。ところが、篠にはその子の上に、高校三年と一年の兄弟もいるとわかった。二人とも難しい年頃である。母の再婚を歓迎するわけがない。中村は躊躇したが、初志を貫こうと決めた。しかし、肝心の篠が色よい返事をくれない。子どもたちのことが問題ではなかった。彼女にとっては何を今更、である。仕事は面白い。経済的にも満足している。中村とは

恋人同士で充分ではないか。

そんな二人の間に、元氣印のフリーター、田中美佐子が介入する。女っぷりは篠のほうが上だ。けれども、田中には若さがある。一緒にいて楽しい。軽いが芯はちゃんとしている。何より、コブ付きでないのがいい。田中にはある日、中村に愛を告白する。中村の気持ちは揺らいで……

実を言えば、この企画のはじまりは、今春放送して好評を得た連続ドラマ『結婚の理想と現実』のパートⅡであった。

『結婚の理想と現実』は、夫婦のパートナーシップはどうあるべきかを、二組の対照的なカップルを通して描いたホームドラマである。中村雅俊と田中美佐子は何処にでもいそうなマイホーム夫婦を、石田純一とかとうかずこはいわゆるDINKSを演じた。

私たちは、どちらか一方に肩入れすることのないよう心掛けた。ところが、回を重ねるうちに、クールで先鋭的な石田・かとうのコンビより、本人たちの好演もあって、中村・田中の家庭的なほほえましさに人気が集中した。特に田中は、このあと他局でも似たような主婦役をやり、某女性誌では「お嫁さんになりたい女優NO.1」にランクされた。中村・田中コンビでパートⅡを企画していた私たちは、ここに来て田中の主婦役が色あせて思えた。テレビドラマは常に旬でありたい。パートⅡ案は放棄された。

俳優の事情で企画が変わるのかと訝しく思うかもしれない。実のところ、私たちのほうにも動機はあった。今度はDINKSをキチンと描きたいというのがそれである。

『結婚の理想と現実』の〈理想〉は私たちの位置付けではDINKSのものであった。石田・かとうのカップルは、結婚しても異性同士でありたいと望み、子はカスガイという発想を退けた。家庭と仕事を果敢に両立させようとした。ズバリ、男と女の自立という〈理想〉の実現をめざしたのである。にもかかわらず、ぐうたら亭主と専業主婦という〈現実〉的な中村・田中のカップルのほうが、本来あるべき結婚の〈理想〉として支持されたのである。それがまさに視聴者の「現実」だった。DINKSは表向き羨しがられるが、本音では結婚の邪道扱いされるのだろうか？ 私たちも無意識のうち

に、DINKSに冷たかったのか？
ドラマの第一回で、かとうかずこは仕事をつづけるために堂々と墮胎し、石田は妻に対するのと同じテンションで、部下の女子社員を愛した。石田・かとうの確信的行動が、無風状態の中村・田中を刺激し、問題提起となるように仕掛けたのである。そんな設定が、DINKSはどこか寒々しいという印象を与えたのかもしれない。私は現実のDINKSの女性に「子持ち専業主婦の夫のほうが、圧倒的に浮気してるわよ。DINKSの絆はお互いの愛情だけだから、後がない

んだもの」と指摘され、返事に窮した。

DINKSの良さを描こうというのが、新作の命題である。人物設定は文字通りのDINKSでなくとも、意識がそうであればいい。今のところ、次のようなイメージがある。

中村と篠は十一回連続の三回目ぐらいで夫婦になる。挙式は一種の見せ場だからそれなりに描く。けれども、篠のこだわりで、入籍はしない。これは事実婚か、別姓結婚か？ いずれにしろ、夫婦別姓にまつわる色々なトラブルが発生する。

中村は一応了解したものの、世の大部分の男がそうであるように、内心は納得できない。彼は思う。世間体はともかく、子どもたちとの関係はこれでいいのか？ 俺はいつまでも〈父〉になれないのでは？ と。田中の介入も、これと裏腹だ。彼女は思う。正式に結婚してないなら、私との関係は後指をさされない。それどころか、私にもまだチャンスがある、と。

「トランプの家」はまもなく、収録に入る。連ドラのほうは、脚本家やプロデューサーとの詰めをまだしていない。読者は実際の放送では、全く違う展開を見るかもしれない。

コメディの毒は、真実をかいま見せる。ともあれ「トランプの家」の〈血〉と同じく、〈戸籍〉も《家族》を成立させないことを描きたい。

(かわむら ゆうたろう／フジテレビ・ディレクター)

ぜひ、あなたの座右に！

親も、教師も、学生も

ウイ書房の近刊 予価一五〇〇円

小沢牧子著

『心理学は子どもの味方か？』

——教育の解放へ——

「……その仕事を十年ほど重ねた頃、月刊雑誌『新しい家庭科—We』に、「教育のなかの心理学」と題する連載を執筆する機会を与えられた。大学生たちと考えあうというスタイルを心がけながら、そこで綴ってきたたくさんの小文に手を加え、これまでに書いてきた他の文章を合わせて、一冊にしたものが本書である。」

教育のなかに組みこまれていく心理学の素顔は見えにくい。私たちの生活に深く入りこんできていく心理学のうらおもてを見さだめ、それを生活者の視座からどうとらえるのか。その論議に役立てていただければありがたいと思う。とくに、学校現場の教師たち、教師をめざす学生たち、そして何よりも子どもと共に生きていくことの困難がたちこめる時代の中で、迷い悩んでいる親たちに、私の心理学への問いを共有していただければうれしい。……」

(「はじめに」より)

揺らぐ家庭

「仕事も家庭も」考

大橋由香子



私は三年前に第一子を出産、そして九カ月前に第二子を出産した。子どもが生まれてから働き方をいろいろ変えて、今はかなり賃労働の分量を減らしているものの、仕事を続けている。子どもの父親（夫）とも同居しているので、大人二人、子ども二人の四人暮らし。はたから見ると、私は「仕事も家庭も」という部類に入るのかもしれない。

でも実を言うと、この「仕事も家庭も」ということば、私にはあまり好きになれないのである。

もちろん「男は仕事、女は家庭」の性別役割分業がいい、と言っているのではない。今の世の中をまだまだしっかり支配しているこの性別役割分業に対するアンチ・テーゼとして「女も男も、仕事も家庭も」というスローガンが出てくる理由はわかるし、このスローガンを実際にやる人が増えつつある

ことは大歓迎。そうやって少しずつ性別役割分業がくずれ、風通しのよい世の中になっていけばいいな、と思っている。そして冒頭に書いたとおり、私自身「仕事も家庭も」選んでいるとも言える。にもかかわらず「仕事も家庭も」という言い方には、いまひとつ魅力を感じない。なぜなのだろう。

理由その1 たいへんそう

「仕事も家庭も」からまず思い浮かぶのは、「たいへんそう」「しんどそう」というイメージ。これは、外で賃労働しながら、なおかつ家事・育児労働もしている共働きお母さん（ワーキング・マザー）は「いかにたいへんか」ということを、マスクミヤ周囲の女たちから聞かされ続けてきたおかげでできあがったイメージだと思う。

子どもがいなかった同棲時代、子どもがいる生活もいかなかった、なんて思う瞬間もあった。でも、経済的自立は大切だし仕事を続けるのは当然、専業主婦なんていやだな、と私は考えていたので、子どもができて共働きということになる。そこで思い浮かぶのが、子持ちの共働き生活のたいへんさ。朝夕の保育園の送り迎え、延長保育や二重保育、病気の時は預ってくれない……等々、新聞で読んだ「共働き」の困難な状況が思い出されて暗い気分になってしまう。根がグータラで慢性的二日酔いの私になんか、とてもできそうにないなあ、やっぱり子どもはやめておこう———と思ひ直すことが今回もあった。

今、我が身にふりかかってみて、産休や育児時間の労働条件、子育てをする人間への職場の人々の理解、保育所などの行政サービス……どれをとってみてもまだまだ不備だらけだということはいくわかった。そんな中で日々悪戦苦闘しているわけだから、「仕事も家庭も」の共働きお母さんの口から出ることばが「たいへんよ」になってしまふのは当然である。

でも、愚知だったはずの「たいへんよ」が、仕事と育児の両立という困難な道を歩み抜いた者の気負いと誇りに縁どられると、子どものいる生活なんて想像もできない若い娘にはまるで恫喝のように聞こえてしまうのだ。「仕事も家庭も」という言い方は、「仕事もきっちりやっています。でも家のこ

とだっておろそかにはしてません」という類まれなるスーパーウーマンを想像させる。だから「どうせ私は無理ですよ」とひがみたくもなるのだ。

理由その2 男はどうした？

「子持ち共働き」はたいへんだ、と言っても、共働きお母さんのたいへんさに比べて、どうしたわけか共働きお父さんのたいへんさはあまり耳にしない。女と違って男は忍耐強いから不平不満を言わない、のでもちろんない。要するに、子どもがいる共働き生活をしていても、男は依然として仕事のみ。賃労働と家事・育児労働の「両立」をしようとしないうら、たいへんでもなんでもないのだ。

今、私の子どもが通っている保育園（上の子は公立、下の子は私立の無認可）でも、送り迎えは圧倒的に女親がしている。それでも朝はまだ男親の姿がチラホラあるが、夕方となるとほとんどが女親（親は間に合わないで祖父母やベビーシッターさんが迎えにくる人ももちろんいる）。迎えの時間に間に合うように転職したというお母さんもけっこういる。それに対して男はどうだろう。子どもができたから残業ができなくなるとか、保育園の迎えの時間に合わせて転職したという話はめったに聞かないし、そういうケースがあるとテレビや新聞が取り上げるくらい珍しい出来事だ。

理由は簡単。男のほうが賃金が高いから。私の場合などその典型である。相手の男に転職を迫れるくらいに私の収入・労働条件がしっかりしていればよかつたな、と悔やしく思うこともしばしば。育児休業法がもう少し早く成立していれば、母乳があまりいらなくなる最後の三カ月くらいは夫が休業できたのに、と、これは夫も私も二人で悔やしがっている（九二年四月で夫の職場にも男もとれる育児休業制度ができたのだが、いかんせん、その時は子どもは一歳二カ月になってしまひ適用にならないのだ。残念!!）。

もちろん問題は保育園の送り迎えにとどまらない。帰宅してから夕食をつくり食べさせてお風呂に入れて寝かしつける——と文字で書くと簡単でいいなあ——この一連の「労働」が終わって子どもがスヤスヤねむった頃、やっと夫が帰ってくるという実質的母子家庭が、共働きでも多い。

「仕事も家庭も」と言う時は、担い手のほうの「女も男も」を徹底しないと、女だけが賃労働と家事・育児労働の二重負担を強いられることになる。そして残念なことに、現実に行っている既婚女性の職場進出は、この「女のみ」の「仕事も家庭も」になっているのではないだろうか。

過労死するほどの男の働きすぎも問題だけど、「仕事も家庭も」背負ってしまう共働きお母さんの働きすぎも問題だと思ふ。もっと男に押しつけて、女が楽をしなくちゃ。

理由その3 なんて欲張りな?!

「あれもこれも」というのは欲張りに聞こえる。特に「男は仕事、女は家庭」の規範が強く、「この道ひとすじ」という美学があるこの国では、「仕事も家庭も」は欲張りなだけでなく美しくもない。第一子を保育園に預けて職場に行く生活を始めた頃、いつも私の脳裏に浮かんだのは「二兎を追う者は一兎をも得ず」ということわざだった。

私はけっこう母乳をあげたい願望が強く、会社側も無給の産休に引き続き無給の育児休職を認めたので、半年間はまるまる休み、その後はじめは週三日勤務、子どもが一歳になった頃から毎日勤務（ただし労働時間は社員より減らしその分賃金も大幅ダウン）した。最初の頃は、会社に行くとおっぱいが張ってトイレでしぼって捨てなきゃいけないこともあった（などと書くといかにも悲惨だが、本人はそれほどでもなかった。ただドアの外でトイレの順番を待っている人がいる時は困った。「搾乳中につき時間がかかります」と札を下げようかと思つたほどだ）。

さて、仕事は労働時間が短くなったから今までのペースとは全く違う。自分ではそんなに仕事中毒ではないつもりだったけど、思いどおりに仕事がこなせないというのはいろいろの意味で辛いものだ。やっぱり「仕事も子どもも」両方やる

のは無理なのかなあ、と仕事も育児も中途半端にしかできないというジレンマにずいぶん悩まされた。

でも、おっぱいの時期が終わり、子どもも二つめの保育園生活に慣れてくる頃、私も新しい生活に慣れていった。考えてみると私はキーキを選ぶ時にも「あれも、これも」と悩むたちである。お子様ランチみたいいろいろなものを少しずつ食べられるのが好き。私にとつての「仕事も子どもも」は、裏返せばそれぞれをあんまり重要視（神聖視）してはいないと見える。「仕事ひとすじ」「子どもひとすじ」よりは、「仕事も子どももほどほどに楽しみたい」というのが本音なんだ、と自分でわかってきた。ところが「仕事も家庭も」という言い方には、この「ほどほどに」のニュアンスがなくて、両方ともひたすら一所懸命なかんじ。しかも自分がすごく欲張りな気にさせられてしまう。私はそんなに強欲な人間ではない。終電まで残業する生活もしんどい、24時間子どもとつきあうのもしんどい——これが最近の私の実感である。

理由その4 「家庭」ってうさん臭い

前項で思わず「仕事も子ども」と書いてしまったように、私は「家庭」というのが好きではない。中学・高校時代の成績が悪かった「家庭科」への恐怖心がそうさせている、というのは冗談だが、「家庭」はどうもうさん臭い。だって

「家庭基盤充実政策」や「家庭の日」を政府が提唱したり、「家庭がいちばんあったかい」なんて東京電力が言うんだもの。そこには家父長制のにおいがするし、家庭の外に対して排他的で閉鎖的ないやしさを感じてしまう。だから「仕事も子ども」のほうが私にはしっくりくる。

あるいは私のイメージが貧困なのかもしれない。一人暮らしの家庭、同性どうしの家庭、血のつながりのない大人と子どもの家庭……要するに結婚した男女とその子どもというワンプターン以外のかたちも家庭と呼ぶならば、「家庭」ということばへの違和感はいぶなくなるだろう。もっとも「家庭」の実態と概念が揺らいでいけばいいと思う。

そしてもうひとつの「仕事」のほうも、神聖で絶対すぎる。* まだ三年間しか生きてない子どもが「お仕事だからね」と言われると自分の欲求をあきらめる（こともある）というのは、考えてみれば恐ろしい。

というふうに理由をつけてみたけど、仕事もして、苦手な家事をサボる大義名分になっているというのが私の本当の姿。こういう場合「仕事も家庭も」選んでいると言えるのかな？

* 仕事や労働概念については『働く／働かない／フェミニズム——家事労働と賃労働の呪縛!?』（小倉利丸・大橋由香子編著、青弓社）をご参照下さい。

（おおはし ゆかこ・編集者）

今月の
読書から



半田 たつ子

深江誠子著

『家族ってなんだろう』

(明石書店 一九〇〇円)

W。が追求してきたテーマが、「家族ってなんだろう」という命題の下に見事にまとめあげられた。性別役割分業から解放たれること、学歴社会のくびきから自由になること、個人としての生き方を貫くこと、すべて「企業社会と家族」が厚い壁になっていると気付いてはいたが、この本はそこにピッタリ照準を当てた。さらに環境問題とも結んで、企業社会が、いかに私たちの心身を触むかを立証する。マコ、ダイスケ、タミと愛称でよびあう著者の家族のありのままの姿から出発しているだけに強い説得力を持つ。

板本洋子著

『現代結婚協奏曲』

(家の光協会 一二〇〇円)

結婚相談所の十年に、著者は男と女の出会いの場を設定しながら、時代を見、感じ、触ってきた。激しい経済戦争の中、追い込まれた男は、結婚に救いを求め休憩所を欲する。女は、一方の極で自立を求め、男社会に挑戦しようとするが、もう一方の極では性別役割分担型を温存している。時代の急流の中で、男も女も自らの生き方を問うことなしに、すてきな出会いはないと。

木村 栄

『迷いつつ母』

(大月書店 一四〇〇円)

おおらかな母、楽しい母、愉快な母、とこども子を信じる母、子に惚れている母、それぞれに個性的な母が二十人。ある雑誌の巻頭を飾って評判高い「母の像」という記事十年分ほど纏めてみたら、苦勞する母、耐える母、悲しい母、のオンパレードで愕然としたことがあったけれど、ここには豊かな母のイメージが広がって楽しい。フツの母が心を開き、生き生き語ったのは、著者の誠実な人柄の故であらう。

グループ「母性」解説講座 編

『母性』を解説する』

(有斐閣 一七〇〇円)

つくられた神話をこえて、と副題にある。一九八〇年代の前半から女性の妊娠・出産・中絶の問題に取組んできたグループが、出生率や障害児の出生について政府の関心が高くなっていくことを感じ、「母性解説講座」を企画した。この本は三年間、十五回にわたる「解毒講座」の記録だが、話し言葉だけに質の高い内容が易しく述べられ、ミニ座談会が四回おりこまれているのも行届いている。

谷川俊太郎詩集 佐野洋子絵

『女』

(マガジンハウス 一六〇〇円)

女が攻撃し、男が言いくるめる。そんな図式にホトホトいやになって、あらまほしい女像・男像、女と男のかかわりよう、それを詩情豊かにうたい上げたものに触れたい。あらまほしい像をイメージする力が萎えていたら私たちがそれを手にすることは絶望的にできないのだから。こう言った時、即座にこの詩集を薦めてくださった方があった。詩集を開いて私の心はみるみる潤い、この方に限りなく感謝した。

発言

思い出の国をさまよいながら

上原道子

押し入れの片すみに湯たんぼがある。前の冬、夫が使ったものだ。手術後の体に寒さがこたえるのか足が冷たいから湯たんぼがいいと言うので買ってきた。布で袋を縫い、毎晩たつぶりのお湯を入れておくと朝まで暖かくて気がいいと喜んでた。結婚して以来病氣知らずの夫の足はいつも暖かくて、冬の夜、私が遅くまで起きていて冷えた足をそおつと隣のとんとに入れるといつも暖めてくれたものだ。あの心地よいぬくもりの主はもういない。

90年六月、夫は食べたものが通りにくいと云って病院へ行き、「食道遺瘍で手術せんならんそうや」と私の職場へひきつった声で電話をかけてきた。

夫が食道ガン、それも中期だとは。毎日元気に学校で授業をし、痩せてもいない。先週は山歩きにも行ったというのに。医者の言葉が信じられなくて声も出なかった。医者は告知しないと言い、夫は医者の遺瘍という言葉を感じている。

あれこれと思い悩んだが私は言えなかった。七月末、六時間に及ぶ手術、しかし結果は心臓近くに癒着があり、完全には取りきれなかったと言う。摘出された無残な食道を見ながら心は凍りついていた。

術後三週間、水一滴飲めなかったが痛みもなく、見舞ってくれた友人が「体力勝ちやね」と言うほど順調に回復し、痺せた顔はふつと若い頃を思わせるくらい元気になった。そのあと抗ガン剤、コバルト照射と苦しい療法に夫は氣力を尽くしてがんばった。予後のためという医者の言葉をまともに信じていた。十月末、五カ月ぶりに退院した。私は婦人服のパートナー作りや裁断の仕事をしているが、小さな職場で私が休むと開店休業状態になる。しかしできるだけやりくりして夫と一緒に京都や神戸へ遊びに行き、正月は山陰の温泉へ娘たちと出かけて楽しんだ。私は夫に病名を告げてない以上、日常生活はあまり変えず、夫を「死にゆく人」ではなく、生き

ると信じて暮らすことが彼の人生を尊重することになるのではないかなど、毎日毎日迷い悩みながら必死で生きていた。

二月初めのCT検査では全く異常なしの結果なのに急に食べる量が減り、せきこみがひどくなってきた。肺炎のため点滴を受けるということで二月末再入院、たった二週間で逝ってしまった。その夜「泊ろうか」と言う。「ボクは大丈夫や、風邪ひかんように早く帰ってあした朝また来て」と言っ
て、手を振って私を見送ってくれた夫は、夜半の電話で、自転車で十分、走って駆けつけたのに、さよならも言えず、手
もにぎれずにひとりで逝ってしまった。「動脈が破れて
吐血し、施すすべがなかった。しかし苦しんでないよ」と医
者は私の肩を抱いてくれた。再入院する朝、家を出る前に夫
は突然「キスをしよう」と言う。やさしくて、甘く切なかつ
た。三十二年間共に生きた人との別れのキスになってしまっ
た。

夜ひとりしているとまた泣くからやめ、と思いつながらつい夫
のアルバムを開いてしまう。キュッと口を結んだやんちゃ坊
主らしい一年生、ゲートルを巻いた凜凜しい中学生は軍国少
年そのもの、夫は海軍兵学校の最後の生徒だったが、この時
の写真は一枚も残していない。若々しい笑顔で生徒たちと一
緒の私が初めて夫と出会った頃の写真で、多感な青春時代
の挫折を経て、中学校の教師として教育の仕事に生甲斐を見

出し、戦後の民主主義教育の担い手たらんと、精一杯人生を輝
かせ初めていた頃だ。当時の教え子だった男性が初盆に来て
くれて昔話をするうち、先生に教えてもらった忘れられない
歌だと言って、仕事の歌を歌ってくれた。勤評闘争のさなか
に結婚した私たちは、彼の仲間と一緒に議論に疲れるとよく
歌ったものだ。遠い昔のようでついこの間のようにも思える。

夫は私が食後の後片付けをする間にシャツやズボン、私の
ハンカチまできれいにアイロンをかけた。私が一段落
すると「飲もか」とうれしそうにグラスを二つ出してくる。

今もふとそこに夫がいるような気がする。彼は若い頃から
「死んだら海へ流してくれ」と言っていたので、お寺へも納骨
したが、一部を娘たちと一緒に船の上から海へ花束と一緒に
散灰した。私が夫にしてやれる最後のことが終わった。

夫は自分が自分のしたいことを広げていくのを、対等な人間
として意見は言うがいつも支えていてくれた。私はそんな中
でたくさんの友人に恵まれ、今励まされ支えられていると思
う。結婚している三人の娘たちと家族は、夫の遺してくれた
宝物。寂しいけれど孤立感はない。夫の残していった酒を毎
晩飲んで泣いて死を考えていた時もあったが、最後まで生き
ることを信じて春の訪れを楽しみにしていた夫を思い、彼と
二人の人生は終わったが、自分なりに生きていけそうな気が
してきた。

発言

私の子離れ

大沼恭子

私は子育てが楽しかった。授かった二人の男の子を夢中になって育てた。三歳までの幼児は天使の仲間だというが、本当にそんな感じだった。言葉がどんどん増え知恵がつき始めた頃は、子どもと一緒に世界が新しく見えた。悪ガキ時代には近所の母子といっしょにあちこち連れ歩いた。食べ盛りに食事やおやつを支度に追われるのも充実感があった。思春期の子の生意気な議論には本気で相手をした。転校や受験の時期には子どもとともに悩んだ。何の苦労もなかったわけではない。たぶん辛かったことはみんな忘れて、過ぎてしまったから懐かしいと言えるのだろう。でも今、子育てに苦労している人には、それはやり甲斐のある苦労ですよと言って上げたい。子どもを育てて私も育ったと思う。

ところで、子育ての仕上げは自立させることである。これを鮮やかに決められればいいのだけれど、子どもたちが大学に入って約束通り下宿へ巣立って行った時の淋しかったこと、二人が相次いで出て行ったために、その前の賑やかさ

との落差が大きかった。わが子がいないだけでなく、頻繁にかかっていた電話も、ふらりと訪ねてくる友人の姿も絶えてしまった。せまかった家が急にがらんと広く感じる。家路を急ぐのが習慣になっていて、途中でふと、ああ今帰っても誰もいないんだと気がついたりする。家に子どもがいるお母さんが羨ましい。果てはスーパーマーケットで籠いっばい買い物をしている人にヤキモチを焼くしまつ。なんだか急にがっくり歳をとった気がした。急いで手放すんじゃないか。結婚までは家に置いておけばよかった。ああもう人生の一番いい時は終わってしまった。私の周囲の友人たちは、さんざんこの嘆きを聞かされてうんざりしたはずだ。私を見るところ、男の子ばかりの母親はえてしてこういう傾向がある。女の子が一人いると母娘関係は緊密で、家を出ようが結婚しようがしゅっちゅう電話で話し合ったりしている。息子は出たら出っぱなしということもあり、結婚の時にはきっぱりしていたいということもあって、母親は一時期、かなりじたばた

する。

それでも空の巣だ、老後の始まりだと騒ぐだけ騒いだら、私もだいぶん落ち着いた。その間打ち込める仕事があったのも幸いだった（それがあってもこの体たらく、とも言える）。若い時から努力を重ねて仕事と家庭を両立させてきた女性たちを尊敬しながら、私自身は途中復帰組である。家庭に在る間英語の勉強だけは何とか続けてきて、結局次男が高校生になる頃から、非常勤ながら高校の教壇にもどった。私は高年生の年代が好きだし、英語を通じて世界を広げて行くのも好きだ。教え方をいろいろ工夫するのは楽しい苦勞である。いろいろな専門の同僚たちとの交流も久しぶりのことだ。身分は不安定だが、長かったブランクのことを思うと、それでも恵まれていると思う。もう一つの仕事である翻訳の面から見れば、子育ても夫と歩いた転勤生活も趣味も教職も、今までのすべてが役に立っている。女性の生き方も多様性の時代、これがいいというお手本はなくて、それぞれが自分に合った生き方を選び取って行かなければならない。周囲を見れば、子どもを育てながら、あるいは育て終わって仕事にもどった人も、趣味を深めて一流の力を身につけた人も、地域活動やボランティアに熱中する人も、今輝いている。私は私で今の仕事を得て、何となく人生の辻褄が合った気がしている。

さてこれから、いよいよ夫と二人で生きるのだと思う。

いつのまにか彼は仕事、私は子育てと二手に分かれてしまっていたが、私が毎日出るようになって、夫も市の広報などの「男の自立度チェック」で良い点を取れるようになった。遅ればせながら「男も女も、仕事と家庭を大切に」という理想に近づいている。よその夫婦との交流も多くなった。どこの夫君も五十歳過ぎて「仕事の鬼」でもなくなり、多少は「女房とのつきあい方」を考えるようになってきたようだ。夫の集りに妻たちが参加するのも、妻の集りに夫たちがつき合ってくるのも、なかなか楽しいものである。

一方、私には長年つちかっていたいくつかの女性の輪がある。仕事の同僚、趣味の友人、同級生や血縁や、夫や子どもを通じての仲良し、転勤で得た各地の友達も、私の財産という気がする。ようやく居を定めたから、これからは地域の友人が欲しい。また若い人たちとの交流。息子たちがそれぞれ家庭を持って、時々会うのをお互いに楽しみにするような付き合いができたらいいなと思う。多くの人が訪れるような家だったらもったいいいと思う。最近、人の集まる大きな部屋をつくったとか、外国の子をホームステイさせたという話に心を引かれる。夫君が退職して調理学校に入ったとか、夫婦で居酒屋を開いたという便りも舞い込むようになった。みんな素敵に生きていけると感心してしまう。私も自分らしい生き方をさがして行けたらと願っている。（高校講師、翻訳工房「とも」）

発言

「母」であること

佐藤友枝子

「母」は女に与えられた称号なのでしょうか。およそ母性的であることが批判されたことはなく、女たち自身も母であることに自信と満足を見出してきています。

もう十年以上も昔になりますが、五月の母の日を前にして、リブの仲間たちと繁華街の歩行者天国で、「母の日なんてぶっとばせ」というイベントを開いたことがありました。母という名のもとに個としての人生を収奪する文化装置＝母性幻想を、検証のテーブルに乗せようと試みたのです。ところが通行人の反応は極めて冷淡で、何人かの中年の男女たちからは、「いいかげんにしろよ」「あんたたちだって母親から生まれたんでしょ」と罵声を浴びせられました。

ほとんど同時期に私たちは、主体的な出産を取りもどすために「子産塾」というラマーズ法の紹介を盛り込んだ出産準備教室を開催しましたが、こちらの方は満員御礼の盛況でした。

私たちにとってはどちらも女の主体性を取りもどそうとする試みでしたが、二つの反応の違いは際立っていました。「母」は女にとって大いなる満足の源泉なので、「母」は問われてはならぬ聖域なのでしょうか。

戦後日本の女たちの大衆レベルでの基盤を持った運動として、母親運動を忘れることはできません。この運動の母親の名において命を守るといふ基本的発想は、現在でも反原発や食品公害に反対する消費者運動、時には自然保護の運動などに於いて脈々と引き継がれています。日本の男性は母性への幻想にたっぷり漬かっていますから、「母として云々」という表現は、非常に受け入れられやすく、さすがに母の実感だと、時に感激さえ示したりします。男たちはリブには嘲笑と揶揄をたっぷり浴びせましたが、母には賛美を惜しみません。そして女たちも「母として」をオールマイティの切り札とし、そこから先の思考を停止させてしまう。そこでは個と

しての視座がスッポリ欠落しています。

河野信子は既に二十年近く前に、「靖国の母」とは、国家がひとりひとりの母親に対して、まことの母親とは無縁の抽象を押し付けたものであり、母たちはそれへの論理的反駁もできぬまま、抽象に自己疎外したと洞察しました。太平の日本に生きる私が戦時の母たちを批判することの安直さは覚悟しています。覚悟しつつやはり、母たちは個としての感受性に徹底的にかかわれなかったために、抽象に身をゆだねてしまったと思わざるを得ません。

吉本隆明は、軍国少年吉本隆明へ拘り続けたところから、戦後精神の金字塔「共同幻想論」を思索しました。はたして「母として……」という主張は、個としての在り方・感受性に徹底的に拘ったのでしょうか。女たちとの共同性を求めて試行錯誤した私自身の体験を振り返っても、たとえそれがどれ程美しかろうとも、共同性という幻想に身を委ねてしまう時、集団は個人への抑圧の装置となることを確信します。そして共同性ということも、個としての在り方・感受性に拘り続けるところからこそ構築されてゆくのだと思っています。私がかつて母となることをためらい恐れたのも、母への変身で女たちが示す多湿な情感でした。自他の区別が曖昧で、個と個との関係性への問いよりも、母という存在であることが関心事となってしまう。

学生時代にキラキラ輝く感受性を示していた女友達が、幸せな母となることで失ってしまったもの。子供の話に夢中になり、産んだことで自信を得たと彼女が感じるのは自由ですが、他者にまでその自信を押し付けてはばからない。「子供っていいわよ、あなたも早く産みなさいよ」。私が感じてしまった失望は、彼女の幸せへの羨望ではなかったつもりです。

そしておそらく、母であることの過大な満足と背中合わせに、母と子の湿潤な一体感の中で、母の子への権力性・支配性が増殖してゆく陥穽があるのでしょう。しかも母たちも本質的には母への脅迫とも言えるような風土の中で、自分自身の人生を喪失して断念してきた故の空虚さから、逃走しているに過ぎないのです。子供の問題を母原病として片付ける考え方には強く反対しますが、臨床の場でも、強大な母からの分離がテーマとなる思春期危機の子供たちに、出会うことは少なくありません。

母であるということが、生命の連続体としての子への愛着や、時にその生命を守ろうとする攻撃力を持つこと自体を否定するつもりはありません。しかしその愛着や攻撃力など混沌とした情念を、「母なればこそ」と不問に終わらせるか、あるいは個である女として洞察し統合してゆくか、母なるものの文化の質は、その岐路にかかっていると思います。

発言

「父」なるもの

西崎 徹

「かわいいね。ぼくいくつ？」見知らぬおばあさんがニコニコ笑いながらうちのぼうずに声をかけます。道端の草むらで虫探しをしている手を休めて、「祥ちゃんね、二つとね、半分なんだよーだ」。またえらそうに指をピクピク二本に動かし、三本に動かしながらぼうずも答えています。

二つと半分。もうそんなになつたのか。僕も祥ちゃんもこの世に千日近くもいっしょに生きたのかあ……。

「もうすぐ生まれます」。病院からの電話に何を考えたのか、僕は突然部屋の掃除を始め、洗濯物をたたみ、おまけに風呂まで入って家を飛び出しました。おかげで着いた時には十分前に生まれていました。(あとからかあちゃんにぼろくそ言われましたが)。看護婦さんにいきなり赤ちゃんを手渡され、重いも軽いも分からずただただしわくちやの顔を見て声もなく立ちつくしていました。

十分遅刻して「父」なるものになった僕ですが、この二年七カ月、本当にいろいろなことがありました。ゴキブリのこ

とき素早い高ほいから、膝をかくんかかくんさせながらつかまり立ちしたかと思うと、見事二本の足で歩き始めました。ミルクが欲しいと言っては泣き、おむつがぬれたと言っては泣き、「あーあーうーうー」。体の要求とまさに一体となって発せられていた声が、「祥ちゃんね、アイスが食べたいんだよな」「お父さんにミカンあげるね」という風に、相手に自分の意志を伝える手段としての言葉を獲得しました。今では、うんち・おしっこも、するも我慢するももらずも彼自身の問題で、青空に旗めく不幸せの黄色いおむつ洗いからも解放された僕は、いつもいっしょにせっちんに入っては、小さい体から出る思いもよらない大物に「すごい!!」と感激しています。

どれ一つとってもある日突然できるようになったというのではありません。とぎれることなくお互いが生き続けてきたからできたことだと思えます。

ここまで何だかとても良い気持ちで書いてきましたが、自

分の中からまだまだ書きたいことが出てくるのです。この文の題―「父」なるものに、やはりこだわってしまうのです。

最近こんなことがありました。ちょうど寝る前のこと。パジャマに着替えた祥ちゃんは、今擬っているジェットマンをビデオで見たばかり。「ジェットジェットジェットマン」とか何とか連呼しながらうちのかあちゃん（いつも昭ちゃんと呼んでいます）の背中の後ろから、僕に向かってバーンバーンと光線銃を発射してきました。僕は隠れる楯もないままあつけなくやられてしまいました。この時の昭ちゃんと祥ちゃんの一体感というか、二人がひとつに見えた時の僕の何とも孤独な感じ―別にいじけている訳ではなく、僕は一人と思っただけです。

もう一つは、昭ちゃんのおなかの中にいる現在九カ月の二人目の赤ちゃん。毎日ボンボコタヌキの運動会。「また伸びしてる。あばら骨にぶつかるのよね」「祥ちゃんの時よりよく動くな」。僕もなでたりさすったりはするものの男にはどうしても味わえないその感じ。孤独という言葉がふさわしいかどうか分かりませんが、「父」なるもののどうしようもない孤独、これは受け入れて愛するしかないのではないか、そう思うのです。

この頃の祥ちゃんは、自分の意志がはっきりし、しかも心の動きが複雑になってきました。そして驚くほど僕と昭ちゃん

んを含めたまわりのことをよく見ているのです。この前夫婦喧嘩をして、落ちこんで悲しそうな顔をした昭ちゃんを見た時の祥ちゃんの顔は忘れられません。本当に心配そうで大丈夫かなあとという表情。その目が見る見る大魔神のようになり僕をにらみつけ、「お父さんが悪いんだから」。あまりにその表現がストレートすぎて何とか雰囲気明るくすべく僕も必死。そして昭ちゃんに対して言ったことを振り返り、もつと別の言い方はなかったか、甘えて言ってしまったところがあったかを考えました。

祥ちゃんとの数多くのやりとりの中から、彼は僕のことをお父さんではあっても一人の人間として見ているように思えてなりません。では僕は、祥ちゃんのことを本当に一人の人間として見ているのだろうか。僕の子どもであるということ、で、祥ちゃんが一步ふみ出し、そこでふみ出して良かった、悪かったと彼自身が判断することにまで僕は立ち入っていないか。自分の不安や怖れが先に立って祥ちゃんが何を何をしたいかにまで要らぬ配慮をしていないか。自分は自分、自分が一番大切という生き方を僕自身はしているのか……。今日も祥ちゃんは近所のガキンコ仲間と外で元気に遊んでいます。泣かされてもまたすぐに友達達の輪の中に入っていく姿を見ていると「父」なる僕もムラムラ勇氣が湧いてきて、遮二無二生きたくなるのです。

発言

子を育てるといふこと

重川 治樹

今の日本の社会、女性たちが、産み・育てることをセーブしている生きづらい男権社会で、男社会から落ちこぼれた男が、母親役まで兼ねなければならぬ父子家庭——こう書いただけで、その存在の危うさが分かるのではないかと思う。

父子三人のわが家族も、よくこれまで続いてきたと思うほど暗鬱、悲哀、消沈、錯乱の修羅場の連続だった。離婚にまつわる様々なトラブルを通過してきて、父子家庭が始まった時点で私の精神状態は相当危いところにあった。子供たちも母、妹を失い、転居・転校という環境の激変の中で似たようなものだったろう。

八年間住んだ文京区の社宅から、85年に転出するのと同時に離婚して、妻は二女を連れて別れてゆき、私は中学一年の長女、小学校三年の長男と共に国分寺の新居に移り住んだ。新居は白い壁と真新しい木の香の気持ちよい二階家だが、人間の温もりを欠いた広すぎる空間は三人の虚ろな心そのままに

廃墟じみて見えた。

私の父母はとうに他界していた。親戚らしい親戚もない。父子家庭の不安を理解してくれそうな友人知人も周辺にいない。職場でも訳を話して現状より仕事のきついセクションには回さないよう頼んでいたのだが、全く無視されて上司と大喧嘩して一時的に他部に移るといふ波乱もあった。それよりも何よりも家事や子育てにはほとんど経験がない。待ったなしで無限に続く手仕事を会社勤めと両立させ得るはずがないと思っただ。この先、どうやって生きて行ったらいいのか、途方に暮れてほとんど錯乱状態だった。子供も家も捨て会社を辞めて一人きりで何処かへ行ってしまうたい。再婚して新しい人生を始めたいと幾度思ったか知れない。子供がいれば地獄、いなければ天国という内心の囁きも絶えることがなかった。

そんな窮状の中で、曲がりなりにも父子家庭がスタートし

たのは、傷ついた子供たちを更に不幸にはできないと思う
「まともさ」が私にまだ残っていたこと、近所に住んでいる
妻の母がみかねて、老体を押し複雑な思いは胸にしまって手
伝いにきてくれたことがあった。朝早かったり昼前だったり
と家を出る時間はまちまちだが、帰宅はどんなに早くても午
後十時ごろで、午前二時、三時はざらという厳しく拘束時間
が長い私の勤務をおもんばかって、かなり長い期間、一日二
度、子供たちの朝・夕食を作りにきてくれた。私も平日、勤
務時間が許す限り、料理作りを教えてもらい、買物、洗濯、
掃除をした。休日は全て私が引き受け、子供の気持ちを引き
立てるために近所に遊びに連れて行ったり遠出もした。

「元義母」の支えがあったからフルタイムの苛酷な勤務を続
けられたので、それがなければパートの仕事を探すしかなか
ったろう。「元義母」も大変だったが、私もこれまで七年間、
休息らしい休息はほとんどないまま会社の仕事と家での仕事
に追われて、がむしゃらに生きてきた（その咎めが腰にきた
らしく、急性腰痛で入院し、この原稿も病床で書いているの
だ）。

父子家庭スタートから二、三年経て、ようやく子供たちの
表情にも明るさが出てきた頃、私も日々の手仕事に慣れ
て精神的にも安定してきた。光の閉ざされた地獄の底を這い
回るような生活の中で、私自身が鍛えられて、無意識のうち

に身につけてしまった男権社会の価値観を脱ぎ捨てて行った
ことが大きい。①価値のない女子供の仕事とみなしていた手
仕事こそ生きることの基礎であること、②無限に続く手仕事
を責任を持って（たまにする趣味的な料理を手柄顔で吹聴す
る馬鹿な男がいるが、「日々、責任を持って」でなければ家
事の範疇には入らない）こなすことで、大地に根を張るよう
な忍耐力と感性のしなやかさを獲得出来ること、③会社で働
くことと家事の手仕事の比重が等分でないで頭でっかちのい
びつな人間になること、④そうした手仕事の価値を内面化し
て自分のことは自分でする独立した人間にならなければ、女
性との間に良い関係を築くのは難しいこと等々、目から鱗が
落ちるような発見があった。

娘が大学二年、息子が高校一年になった現在、ようやく一
息ついたが、思えば薄氷を踏むような危い七年間だった。そ
れでも、心から良かったと思うのは、ともかく、子供を棄て
なかったこと。いまひとつは、全国十七万世帯の父子家庭の
父親の大方と同じ、フルタイムの過酷な労働条件の中で、会
社を辞めなかったことだ。男権社会の最低辺の被差別階層の
一員として、偏見、差別、無理解に晒され孤立無援ながら、
男権社会でぬくぬくと生きる男たちに「いまひとつの生き
方」を多少なりとも認識させることが出来たのではないかと
思う。

さらに、一部の自由業か、それに近い父子家庭の父親の
『男一人の育児家事の楽しさ礼賛』的なタワゴトとは無縁に、
最底辺から見上げた眼差しに、七年前までの無自覚だった自

分をらくちんにしてくれていた男権社会の差別の構造が、か
なり正確に見えてきたということも付け加えておきたい。
(新聞社勤務)

発言

自立とは、個を生きることと 見つけたり

石川由紀

ピンポーン、訪問の合図は速達であった。日曜朝九時、何
事かと思ひ封書の裏を見ると、大垣市のA氏からのもの。名
前に覚えはない。早速封を切る。内容は、A氏は60代半ばで
数年前に妻を亡くし、長男一家と暮らしているが、長年の心
配ごと、脳卒中の兆候が出てきたので、そのことを長男に伝
え、もしものときは頼むと言ったら、そのようになつたら別
居すると言われ、大ショックで夜も眠れなくなつた。友人は、
「だから早く後添えをもらえと言つただろう、嫁と妻とでは
見てくれる態度が違うのだから」と言つた。やはり再婚を考
へた方がいいのだろうか、というものであつた。どこへ相談
をしていいのか迷つた末に、「単身けん」の新聞記事を思い

出し、私に手紙を書いたという。
単身けん(正式名称は「ひとりで生きるために、単身者の
生活権を検証する会」)の事務局を引き受けて早一年が過ぎ
た。実質的な発会は91年二月だから、まだ九カ月目を迎えた
ばかりであるが、会員は三百人を越えている。マスコミ、ミ
ニコミの方々、が新しい世の中の動きとして度々取り上げてく
ださるおかげであることには間違いないのだが、反響のすざ
まじさに私自身おどろいているのが現状である。よく考えて
みれば当然ともいえる。89年厚生省の国民生活基礎調査によ
れば、単身世帯は全国平均で二割強、首都圏に於いては三割
を越えた。つまり三世帯に一世帯は単身世帯なのだから、家

族主義の日本にあって、単身者の不利、不安、不満が蓄積されていくに当たり前だったのである。蓄積、そう蓄積なのである。受けた電話やFAXはそれこそ数え切れないが、手紙は九カ月間で四百三十通を越えている。

一番多い反応は、「よく会を作ってくださった。やっつものを書いて行けるところができた」という声である。ひとり者というだけで変わり者、不幸な人、半端者扱いされ、親族の間でも社会でも会社でも肩身の狭い思いをしてきたというのである。次いで多いのは病時や老後、死後の不安である。これらの不利、不安、不満は単身者だけのものだろうか。前出のA氏の例を見るまでもなく、未婚、既婚、離婚、避婚など「結婚」へのかかわり方のいかんにかかわらず、ひとり一人が実は背負っている問題ではないのだろうか。

この会が発足したいきさつは、母子家族問題にかかわっている人、教育問題にかかわってきた人、高齢者問題、女性運動、障害者問題、福祉問題等々、いろいろな問題や運動にかかわって来た数人が集まって話し合っている中、今まで私たちがこんなに長く、一生懸命にやってきました、それなりに成果も出てきているが、どうしても壁がある。その壁とは何だろうというところになったとき、「家族単位」という壁が見えた。人が自立してその生を全うしようと努力しても、今の「家」あるいは「家族単位」で人を見、個人として尊重されない社

会が続く限り、「自立」はおぼつかない。そこで自立を裏付ける、個としての生活権がどこまで保証されているか検証していくことで、自立して生きられる社会を目指そうということになったのである。

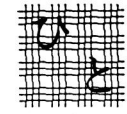
会を創る話し合いの中、事務局を私が申し出たのは、第一にはおせっかいな性格のせいであり、第二にこの会がシングル生活権を主張する会ではなく、ひとり分の生活権を検証する会だからだ。私自身、何でもあり(女兒、男児、転勤族の夫、要介護の老親があり、家制度、家族制度の枠内において、自分自身が自営業者)の人なのに、不利、不安、不満をもっているのだから、今の社会システムが単身者にとってだけ都合というのではなく、いかに「人」にとって不都合に出来ているかを主張するのに適当であろうと思ったからである。そしてそれは私が「自立」という字を知って二十五年目の今、やりたいことでもあるのである。

私が「自立」という字を知ったのは二十五年前、長女を出産したときである。どうぞこの子だけは一生幸せで生き続けられますようにと願い、思い、考えたとき、自分のこれからと二重写しになり、自分の生きる道が見えてきた。それまでの私は常識と言われているコースの上に乗っていて、何事もなければ幸せな一生が過ごせることになっていた。しかしそれは「何事もなければ」である。「何事」は社会的にも個人

的にも起こってあたり前なのであって、「何事」かが起こったとき、運命を恨んだり、他人のせいにしても幸せにはならないのである。常識と言われていたコースからははずれたけれど、今日まで私の上には「何事」も起こらなかった。しかし私のこれからに「何事」が起きるかどうかは分からない。「何事」が起こったとき、やはり私は幸せでいたい。そのためには自助努力だけでは限界がある。心身共に自立し、経済的に自立していても、人は自立して生ききれないことがわか

本誌に家庭科の実践を何度も寄せて下さっている蔵本佳子さん。『松田聖子論』を使っ

ての保育の授業はとて新鮮でした。
'60年、三宅島で生まれ、高校から東京の学校へ。「島ではトップだった成績が、東京ではビリ」それに加えて「叔母さんの家での寄宿生活」にもカルチャーショックを受ける。共働きで苦勞の多い自営業のご両親と違い、典型的なサラリーマン家庭で、「すべてのことが叔父さんの意志で決まってく」閉ざされた関係のあり方に、どちらをとるかと言われたら、自分は共に働いて対等である関係を選びたいと痛感。だからその後



に読んだ『第二の性』は、ビンビン蔵本さんの中に入ってきて行間は赤線で埋まった。

った。なぜ自立して生ききれないか。それは個として生き切る社会環境、すなわち社会的コンセンサス、法制度、社会システム、商品等々が整備されていないからである。社会は女と男で成り立っているのでも、家族が集まってできているのでもない。「個人」が集まって成り立っているのである。個が尊重される社会を創ることこそ、人権を認める社会創りになるのではないかと私は考えている。

日本女子大学家政経済学科へ。大学で影響を受けたのは、「女子労働論」の広田寿子さんと「家庭科教育法」の半田たつ子さん、生の人間の姿が見えてくるような講義が好きだ



「新しい家庭科を創るために」の蔵本佳子さん

の音がみんなの声の中に溶けていく一体感に酔った。今でも落ち込むと、当時のカセットテープをかけて、一緒に歌うのだという。最初の赴任地は八丈島で、放課後、柔道部の生徒たちと五キロの道のりを走って、八丈

小島に沈む夕日を見るのが好きだった。いま生徒の恋の悩みをわりと聞けるのは、

高校二年生のときの苦しかった初恋の経験があったからかもしれない。相手の言葉に左右される自分、好かれるためには相手に合わせなければならぬことと、自分自身でありたいことのジレンマ。今度は『智慧子抄』を使った授業をと考えているそうだが、いまでも当時を思い出すと、胸が痛くなるといって蔵本さんだからこそ、生徒と共に考える授業ができるのかもしれない。(河村)

ったと。近代経済学よりもマルクス経済学に魅かれ、『空想から科学へ』は原書で読むという惚れこみよう。部活は合唱クラブに所属、オーケストラをバックに長時間の大曲を歌う心地よさ、自分

●●●学習の主人公たち●●●

高校生が考える家族・家庭

——兵庫県立明石高等学校の生徒たち——

一、学習前の

家族・家庭観

〈三年男子〉

- ・家族はうっとおしい。とりあえずは学校を卒業するまでめんどうをみてもらう。それは親の義務である。
- ・父・母・弟は仲がよく、毎日楽しそうだが自分はさめている。だから将来は、結婚し

ないで一生遊んでくらす。家族はいらない。

一人の女で満足できるわけがない。僕は家族というグループには向いていない。

・父と母は僕の年齢のわりに高齢で、戦争体験者である。最近考え方が変わってきたので、意見がよく異なる。

・すけべな母さんと父さん、がんこなおじいちゃん、みみのとおいおばあちゃん、まじめな姉ちゃんとほく。

・父、よく働く。現在ゴルフバカ。母、家族一のしっかりもの and パチンコ好き。兄、

ただ今、車の修理屋修業中、ギャンブル弱し。おばあちゃん、まだ健在。

・父は毎日働いて、母は毎日家事して、僕は毎日学校へ行っている。よくある家族です。

・家は酒屋で、父は毎日汗水流して働いている。母は父の手助けをしている。兄は二人で、長男は大学へ行って勉強ばかりしているが、次男は大学で遊んでばかりいる。

・ギクシャクした家族
・家族のことはよう知りません。

二、映画「クレイマー・

クレイマー」をみて

〈三年女子〉

・夫は家庭や子どもの大切さがわかったと思うし、妻は家を出て、自分の人生とか自分にとって子どもがどれだけ大事かがわかったと思う。ピリーも両親を理解してあげられるようになって、結果は離婚したけれども一人一人が成長したんじゃないかと思うしこれからは幸せにくらせるんじゃないかなあと思った。

・フレンチ・トーストを二回目に作る時とは

でもうまくなっていた。今の私たちにもあり得ることだと思ふ。でも給料のいい人と結婚していい生活をしたと思つている人が多いけど、それだけ仕事も多いから、こういうケースになる場合が多いと思う。だから私は、給料が少なくとも、家族のことを考えてくれる人と結婚したいと思ふ。

・すぐステキな映画だと思つた。二人の気持ちもわかるけど、最後の場面を見てると、もう一度やり直せばいいのになと思つた。もう一度初めから続けて見たいと思つた。

・やっぱり家族で暮らすのが一番いい。テッドとビリーは、今までお互いに顔を合わせず、ただ一つの屋根の下で暮らしているという感じだったけど、二人で暮らすようになってから、お互いがわかり合い、父親一人子どもの大切さもわかりあえたのが、すごくよかつた。ビリーは一番の犠牲者だと思ふけど、テッドとジョアンナが自分の本当の姿を見つめ直した点もよかつたと思ふ。すぐ考えさせられることが多くあつたような気がします。子どもは親の愛情を、本当に敏感に感じとるものだと思います。

将来、温かい家庭を持ちたいです。

〈三年男子〉

・だれでも子どものことを考えているのがわかる映画、二人ともつらいと思うが、あまりわかつていない子どもがかわいそう。
・親が子どものことを考えないで離れるのは勝手だ。子どもがかわいそうでしかたがない。子どもは物ではないのだ。
・夫は正しい。夫を助けるのが妻の仕事だ。(ジョアンナは勝手だという意見、多い)
・ジョアンナは悪くない、夫も悪くない。誰も悪くない。ただそうなつてしまっただけだ。そういうこともあるだろう。
・家出の原因はテッドだが、彼が一方的に悪いとはいえない。彼も仕事を思うあまり、家のことに気がいかなくて、自分では妻も幸せなのだと思ひこんでいたのだろう。
・とても重要なテーマだと思ふ。会社の家庭の両立。二人がいらないとうまくいかないことがわかつた。
・いっしょに暮らせばいいのに。自分はこうはなりたくない。子どもを捨てて独身でいる。結婚してからも大変そうだ。家庭は大事にしたい。

三、Aくんの家庭像

どう思う？

・'90年三月卒業のAくんの言葉

「男は外で働いて来て、疲れようから家事はせんでええと思ふ。女もパートぐらいいえけど、家事にさしつかえるんだつたらやめさす。育児は平日はできないが、休日は少しぐらい遊んでやつてもええと思ふよ。

先生はいつもややこしいこと言うとうけど、簡単にいうたら「男と女は対等や」と言いたかつたんやろうと思ふ。オレはそれはまちがいやと思ふ。根本的には、男女は体や心のつくり方が違うと思ふ。男は力があり攻撃的で、女は力が弱く母性本能というややこしいもんもつとうから、女は家事育児をしたらええと思ふ」

〈女子の意見〉

・もう少し女の人のことも考えて：44
・それでよい：20　・人それぞれ：20
・解答なし：16
(数字は%)

・女は家事・育児をするだけという発言はま

ちがっている。それだったら、男が結婚するのは、身の回りの世話をする人がほしいから：みたいに思える。

・育児は母親まかせではなく、やっぱり父親も参加してほしい。

・男の人が多くかせいできたなら、女の人も家事に専念できると思う。

・みんながAくんみたいな考え方じゃなかったので安心した。私は「人それぞれ」タイプだけど、これからは男だから、女だからじゃなくて、まず一人の人間だと素直に考えられるような社会になっていけばすばらしいと思う。

・男子と女子の考え方が、こんなに違うと思わなかった。男子がもう少し、女子のことを考えてくれたら：、家庭だけにしづらたくな。

・私は結婚したら仕事もやめて、家に入って専業主婦になりたい。仕事が好きでやめたくないと思っても、やっぱりやめると思う。家事や育児がおろそかになるかもしれないから。

・女は夫の言うことを聞き、子どもを育てるために生きているわけではない。妻であり母親である前に、女であり個人であるの

だ。子どもをつくったことは共同責任であり、女性に育児を押しつけるのはどうかと思う。本気でやりたい仕事があるのに、自分を押し殺して、夫のいう通りの妻を演じることはまちがいだと思う。男も女も互いに協力しあい、どちらも納得のいく条件での生活が望ましい。片方だけががまんするのでなく、お互いが少しずつがまんすることで育児も仕事もできるのではないか。

〈男子の意見〉

・それでええんとちがう：31 ・古い考え
そういう考えはあかんと思う：10 ・人それぞれ：10 ・解答なし：48 (数字は%)

・この人とほかの考え方は違う。男も女もまず、家庭第一であるべきだと思う。阪神タイガースのベース選手はすばらしい。子どものために阪神をやめて、アメリカに帰って、今は野球以外の仕事をしている。こうあるべきだ。

・僕もベースの決断には感心する。男は仕事が全てではない。日本は特に仕事重視の傾向があり、僕の父もそうだ。息子の進路の問題にも全く口を出さない。仕事は一生涯命しているみたいだが、「父に何かを学ん

だ」なんて経験は無に等しい。自分が親になったら、もっと思いやりをもって、子どもに接したい。

・女が家事・育児をするのはまちがっていない。男は朝早くから深夜に至るまで、家族のために金をかせいでくるのだから、その分女は家事をするのは当たり前である。それが嫌なら、女が会社に出て働けばいい。やっぱり、男が家事・育児をするひまはない。

・みんないろいろ考えているんだなと思っただけ思った。結婚する気がなくなった。

・自分が女だったら、女子の意見と同じだ。家族や子どものために生きるのはゴメンだ。死ぬまで、自分のやりたいことをやっていきたい。僕は自分の身が一番大切だ。

だから、子どもや妻のために苦勞するのはいやだ。

・やっぱり男は30歳すぎたら、背中で生きる。これしかない。家族の絆は大切にして、あととは子どもも妻も自分も、やりたいことをやりたいようにやる。細かいことは干渉したくない。いちいち干渉していると、かえってややこしいことになりそうだ。晩めしだけでも一緒に食べたい。

新しい・家庭科を・創るために

続・「ヒトと生殖」を授業で

鈴木まき子

(東京都江東区立新田小学校)

●はじめに

八・九月号「ヒトと生殖」の授業の続きを述べます。生殖の授業は、18の課題を設定した「ヒトのからだ」の授業の中に、次の二つの到達目標を組みました。

〈到達目標〉

1. 動物には子孫を残す器官があり、精子と卵子が結合したときに新しいのちができる
 2. ヒトの子どもは、母体の中で育って生まれてくる
まず、次の言葉を教えます。精子、卵子、受精、交尾、精巣、卵巣、陰茎、膣、子宮、胎盤、へそのお、羊水、精通、月経(生理)、初潮、胚、卵白、卵黄
- ヒトも子を産んでなかまをふやす

課題順に、内容と子どもたちの感想を紹介します。

〔課題14〕私たちは、成長して大人になると、子どもを産んで子孫を残します。私たちの体には、子どもを産むどんな器官があるでしょうか

〈自分の考え〉

わからない・15人 わかる・12人

樋口 女の人は、おなかの中に子どもを育てるおへやみたいのがあって、そこで子どもをそだてると思う(関口、西田)
松浦(女には) 赤ちゃんを入れるふくろみたいのがあると思う(梶、野原)

金井 にんしんするとおなかが大きくなって、それが子どものへやとなって、おなかから出るまでそこでくらしていると思う(太民)

板垣 女の人だけ赤ちゃんのおへやがある。そこは赤ちゃん

のベッド、そのよこには卵子があると思う

〔資料〕男女の外性器、内性器のパネル

ヒトの女とニワトリのメスの排泄口の図のOHPス

ライド、「成長の話なぞぞ」アーニ出版

〈確かになったこと〉

●子孫を残す器官は、私は男の子についてなくて女の人しかついでないと思った。理由は、女の人があうむから。男の人はうまないから。女の人にはしきゅうという赤ちゃんのおへやがある。その横に、らんそうというらんしが入っているところがある。そこには赤ちゃんができるもどが入っているから、栄養たっぷり！ だけど私たちがお母さんになるのは、ずくと先だから、その卵子がちつからそとに出たってしまふ。それを、生理、月経という。生理(月経)が初めてあることを初潮という。初潮の年齢は、十二歳が一番多い。生理(月経)は四週間に一回ある。あと赤ちゃんの通り道のもつと尿の出るところと肛門があつて、女は穴が三つある。男の子は精子があつて、女の子の生理みたいながある。それを精通という。精通は女のように四週間に一回じゃないことがわかつた。精通が始まる年齢は、十三歳が一番多い。精通は、女のゆめを見ているときによく起きる。男の子には子孫を残す器官はないと思つてたけど、女の子も男の子も子孫を残す器官があることがわかつた。

た。今度、どうやって精子が卵子のところに行くか知りた
い(板垣)

ニワトリのメスとヒトの女の排泄口のちがいをOHPで見
せた時「だから、ニワトリの卵にらんちがついていたんだ」
「くそといっしょ！ きたねえ！」という反応が返つてきま
した。男の子は、自分が持つていてなにかと話題にしたがつ
ている「おちんちん」が、子孫を残す器官であることを少し
も知らないでいたのが何とも愉快。課題を「子供を生むどん
な器官があるか」としたため、男にはないと考えたようで、
ここは変えたほうがよいと思ひました。

ここまで授業すれば、板垣さんのように「どうやって、精
子が卵子のところへいくか知りたい」のは当然。子供の知的
要求に真正面から応えられるように、科学に基づいた授業を
心がけました。

また、「課題14」の授業の後で、すぐ、Nさんが初潮を迎
え、TさんとIさんと一緒にうれしそうに知らせにきました。
お母さんがお赤飯を用意してくれること、「わたしの時もそ
うだった」など、三人ともうれしそうにひとしきりおしゃべ
りをして帰っていききました。そこを通りかかった男の子がど
うしたのかときくので、初潮を迎えたことを知らせると、「ふ
ーん」と妙に納得して、何事もなかったように帰つたのがと
ても素敵でした。こんなことがあつて、私は次の授業が早く

やりたくなったりし、子どもたちも毎日理科の授業をしてほしいと言いつつようになっていました。

〔課題15〕卵で仲間をふやす動物では、どのようにして精子と卵子がむすびつくのだろうか

〈自分の考え〉

松崎 オスカメスがのっかる。さかなはメスが卵を産んでオ

スが精子をふりかける。交尾をする。

金井 交尾をする。メスとオスがおんぶみたいにしてなにかするとおもう(石川、小林、瀬戸、若奈、石塚)

涌井 魚は、メスが卵を産んだあとから、精子をかけると思う。タツノオトシゴはメスがオスの体内に卵を産んで、オスが体内で子をかえす。カマキリの卵のまわりにある皮みたいなのは、オスの精子ではないかと思う。だからだいたいは、卵の上から精子をかけるのだと私は思います。でも、ニワトリとか、とりは、交尾するかもしれない。よくわからない。

自分の考えを練る材料に、過去に見た昆虫などの交尾のことがイメージとして浮かんでくるだろうと思っていました。たが、涌井さんぐらいで、私の予想はまったく外れました。蚕や蝶の授業をしても交尾までは見せなかつたようです。低学年でも「自然のおたより」をやってきた私は、当然この子たちも交尾ぐらい常に見ていると勝手に思い込んでしまってい

たのです。それに、この日、虫博士の野原君が休んだのが痛手でした。そこで、資料をたくさん見せました。

〈資料〉精液をかける例『いとよ』福音館かがくのとも

『さけの一生』らくだ出版

交尾の例『かまきり』『みのむし』かがくのとも

『ペンギンたちの夏』福音館書店

『アニマ No.162』平凡社

スライド「生命ってふしぎだね」アーニ出版

〈確かになったこと〉

● 予想はだいたいいあたっていた。魚は、オスが、自分のなわばりとして、巣をつくってメスをよんで巣の中で卵をうんで、オスが精子をかけるのがわかった。地上にすむ動物やこんちゅうは、おしりとおしりをくっつけてメスのおしりに精子をおくるのがわかった。あとは、メスの上にオスがのっかたりするのがわかった(若奈)

● 魚は、メスが卵をうんでオスがそのうえに精液をかける。これを受精という。カマキリは、オスがメスのせなかにのってけつをくっつけて精子をおくる。交尾がおわるとオスがメスに食べられる。卵からかえった魚は、鳥や人間に食べられて百分の一ぐらいしか生き残らない(石塚)

動物が精液をかける場合と交尾する場合については、子どもたちがよく理解していました。環境条件と、種の維持のた

めに交尾をする必然性についても考えるチャンスを作っておかなければならないと思いました。

課題14の次にはヒトの場合の授業だと予想していたのにそうではなかったもので、「次の時間がたのしみなので、はやくやりたい」（石川）と請求されました。

〔課題16〕子を産む動物では、どうやって受精するのでしょうか

〈自分の考え〉

岩楯 うちで飼っているハムスターが交尾をした後に何日か

たったら子を産んだ。だから、子を産む動物も交尾をして

受精させると思う

松浦 精液を飲むと思う（一瞬、みんな「あれっ」という表

情）

塩谷 飲んだら、胃液でとけてしまう

瀬戸 オスがメスの上の上のってドドドッてふるえてせいしを

おくる

石川 交尾をする時、背中にのったりすると思う。それでど

っかからメスの卵子に精子をおくると思う（樋口）

〈資料〉『アニメ No.217』平凡社：馬の交尾の写真

『からだの歴史』農文協：ライオンなどの交尾

スライド「生命ってふしぎだね」アーニ出版

VT R NHK「人体」の性交から受精までを編集

したもの

子どもたちが一番知りたがったことでしたので、息をのむようにして資料に見入っていました。

〈確かになったこと〉

●〈自分の考え〉では、「わからない」だった）犬や、人間などの動物も虫とかと同じように交尾みたくして、男の人の精子が女の人の卵子に受精されることがわかった。三億だった精子が、けっきょく一つになってしまったのは、かわいそうだった。三億の中で一つだけが残って、それが人間になるのはすごいと思った（松崎）

●今日、じ業で、動物の交尾をスライドと、本とビデオで見ました。子どものままうむ動物は、ほとんどがオスが背中にのっていました。ライオンとかは、メスが地面にすわってオスが上の上のっていることがわかりました。今日、犬の交尾を見ました。犬は、メスのおなかの中で、育ててから産むことをはじめてしました。はじめは、犬も、ねこも卵から産まれてくるかと思っただけがいました（樋口）

●人間は、じゅぎょうのビデオでみただけあまり、いみがわからなかった。動物では、本を見たら、だいたいわかった。犬は、オスのペニスをおしりにいれて、精子をおくりこんでいぬの赤ちゃんが産まれる（上村）

ヒトの交尾については、ビデオがコンピュータグラフィ

ックで図式的な表現だったので、上村君のような感想が出てきました。「ヒトも動物と同じように、メスの膣にオスのペニスを入れて交尾すること」を確認しておく必要があります。

〔課題17〕子で産まれる動物は、メスのおなかの中で、どのように栄養を取って育つのでしょうか。

自分の考えを書く前に、卵で生まれる動物の場合、子は最初から「自前のお弁当」をもっていることを、サケとメダカの成長の資料と実物のニワトリの卵で示しました。これを参考に、自分の考えを書いてもらいました。

〈自分の考え〉

倉持 へそのおでつながっていて栄養をもらう

加藤 おなかの中で、食べ物とかで取った栄養を少し赤ちゃんにわけてあげるために、栄養を一か所に集めてそこからくだけて赤ちゃんのところに届ける。そのくだの中は、よぶんな栄養はどっかにやっけて、いい栄養だけ赤ちゃんにとどけると思う

加藤君の傍線部分については議論になりました。タバコや風邪、悪い病原菌、アルコールなどはどうか、そのまま通るかどうか子どもたちの議論ではとうてい解決できません。このあと、ビデオで受精から出産の場面まで見ました。

〈資料〉スライド「生命ってふしぎだね」アーニ出版

VTR 前掲NHK「人体」

〈確かになったこと〉

● へそのおから養分を取っていたことと、胎ばんを通過して酸素など赤ちゃんに送られる。ウィルスなどもおとてしまいうことがわかった。胎ばんは母親の血と赤ちゃんの血をまぜない役目を持っていることがわかった。ぼくの家はみんな血液がたがうんだぞー(伊藤)

● 赤ちゃんが生まれるまでおなかにいる日は二六〇〜二七〇日だった。受精した卵は、0.1mmぐらい、30日たって6mmぐらい、60日たって4cmぐらい、一五〇日たって25cmぐらい。いっとうはじめは2mmなのに一五〇日たって25cmになる。へそのおは、胎ばんにつながっている。お母さんの血液がふきだされてもうさいけっかんにくっついていてへそのおの中を通過して赤ちゃんに送られていた。ビールスきんはとらえないけど、くすりなどはとらえてしまう。赤ちゃんは産まれてくるまでうんちはしないけど、おしっこはする。でもまたのみこんでなにかしてきれいな水にする。産まれる前にごった羊水を全部出してくる。お母さんのおなかの中に羊水という水が入っていて、そこに赤ちゃんがいる。もしも、羊水を出していなければ、お医者さんが機械で取ってくれる。生まれてきてうんちが出る。緑色のうんちだそうだ。自分もこうやって産まれてきたんだなーと

思うと、お母さんもくろうしたんだなーと思った。(金井)

子どもたちはみんな一人残らずビデオの画面に釘付けになって、微動だにせず見入っていました。參觀されていた養護の先生と家庭科の先生も私も感動で胸がいっぱいでした。自分とわが子の場合が映像と重なって見えるせいかも知れませんが。

〔課題18〕では、自分の出生について記録しました。十一、十二歳の子どもたちが、親から自分の生命が産まれた時のことを聞き取ることによって、ヒトも動物と同じように産まれ育つけれど、他の動物とはちがうヒトの特殊性もあることを、実感を通して知ってほしいと考えました。

実践を終えて

四月当初とは比べものにならないぐらい、子どもたちはみんな授業に夢中になり、よく考え練りながら自分の文を書くようになりました。学級の雰囲気がすごく変わり、子どもたちの表情がとても柔らかく明るくなりました。

教師は、子どもたちの要求に合った課題を順に組み立てて提示し、その課題について子どもたち自身がよく考え、集団の中でさらに考えて高め合っていくやり方をとりました。この進め方は、子ども自ら主体的に取り組む授業になり、よくわかったという確信が持て、そして夢中になれるのだと思います。この授業のやり方は社会科の授業でも使っています

が、よくわかる子どもたちの評判もよいのです。

〔課題15〕については、一、四年までの理科の授業の仕方と考えさせられました。教科書でも蚕やチョウその他の動物を実際に扱うことはあるのですが、その場合、教科書どおりに卵から成虫になる過程のみを見せるのではなく、せっかく本物があるのだから、子孫を残す営みを実物から学ぶチャンス、教師は常に作る必要があると痛感しました。

ヒトの生殖を動物の生殖の中で扱ったのは大成功でした。生物学的に受精の方法を教えることは、私にも何の抵抗もなくやれましたし、子どもたちは興味本位に走らず、科学的な事実を真正面からしっかり学び、真剣に考え、文に書くことを続けられたからです。そして、いつの間にかみんなして授業にのめり込んでしまいました。教師も子どももおもしろくてしかたがないという授業を展開できたことが何よりの収穫でした。

男と女が実際に抱き合って性交している場面も資料として入れるべきかどうかは、江戸川理科サークルの検討会の時に論議になりました。心情的な面を含めることは、思春期に入ってから、避妊をも含めて教えるほうがよいと思います。

通算して二十時間もの授業に取り組みましたが、私自身いろいろものが見えてきて得をしました。学年の教師三人が一緒になって実践したことが、何よりも支えになりました。

新しい・家庭科を・創るために

「家庭生活」をどうとらえて

授業を組み立てるか

——一つの模索——

寺西裕子

(愛知県尾張旭市立旭中学校)

■中学校では

「家庭生活」という新領域が始まるに当たり、以前から「家庭」または、「家庭生活」というものを、自分がどうとらえていったらいいかというもやもやしたものがあつた。そこで昨年は、三名ほどの先生たちと教科書の内容比較をしてみることにした。とは言つても、教科書が手に入らないため、各出版社から出ている解説のようなものをつき合わせてみた。そこから「教科書会社としては、このような内容を考えているのか」という程度まではなんとなく分かるのだが、今までの「食物」「被服」「住居」「電気」などの一部分を集めてきて「家庭生活」という領域にまとめられている感じもある。これらの内容に多少「人間」というものが感じられる教科書

もあるが、ではそれを授業で具体的にどう取り扱っていくかとなるとそこがよく分からない。そこで、やはり教師自身が「家庭生活」「家庭」というものをどうとらえていくかが、授業を作っていく上で大きく影響することを感じた。

そのような折に、「家庭」や「家庭生活」をどう考えさせていきたいかという原稿依頼をいただいた。自分としては、まさに頭をかかえていた内容だったので、無理矢理原稿を書いていく中で、何かが見えてくるかもしれないと思い、お引き受けすることにした。よってここに書いてある内容は、一中学教師の試行錯誤の一つの過程を文字にしてみたにすぎない。

「自分自身が「家庭」「家庭生活」をどうとらえるかがある程度はつきりしないと、授業を組み立てても、自分が何をやっているのか、生徒たちと何を考えていきたいのかが分らなくなってしまう。「家庭生活」ということに多少なりとも関係のある言葉をあげてみると、

家族、生活、夫婦、親子、乳児、幼児、子ども、青少年、大人、老人、病気、けが、障害、嫁、姑、共同生活者、死、生、教育、姓、性、衣、食、住、地域、社会、安らぎ、環境、学校、サークル……。

私たちの身のまわりのことすべてが関わってくる。ここでまた頭をかかえる。様々な関連する事柄から、何をピックアップして組んでいくのか？

自分自身が育ってきた「家庭生活」を考えてみる時、今自分が最も気になることは、「家庭生活」でどのように人間を育てるか、ではないかと思った。

- ・家庭の中で人は何を学んでいくのだろうか
- ・家庭の中で人は、自分をどうやってつくっていくのだろうか
- ・家庭の中で、人がゆがめられていくとしたらどんなことがそこにはあるのだろうか

「自己形成」とは、「自己同一性の確立」とは、どういふこ

とか。またどのようになされていくのか。「自分が自分を好きである」ということが、生きていく上での基盤になるのだろうか。このようなことを手助けする場が「家庭」なのだろうか。もしそうであるのなら、核家族が大家族か、両親がいるかないか。血縁関係があるかないかなどはそれほど問題ではないのではないか？ 「家庭」を「子どもが育つ場」と見た場合、その子どもが自己形成をしていく上で、支えとなるような役割を果たしているかどうか、問題なのではないだろうか。抽象的なことばかり頭をめぐり、今一つ見えてこない。

そこで生徒や周りの人たちの考えを聞いてみることにした。次にあげるのは、三年女子40名ほどに匿名で「中学生のあなたにとって〈家庭〉とは何ですか」という問いに対して書いてもらったものである。

- ・安らぎの場(6)
- ・何でも話せる(5)
- ・いやなことがあっても一番落ちつく所(3)
- ・頼れる所(2)
- ・団らん(2)
- ・気を使わなくていい
- ・息抜き(2)
- ・自由にすごせる
- ・何も考えずにだらりと過ごせる
- ・他人の前でできないことができる
- ・会社や学校の疲れをとって安らぐ
- ・いいこの場
- ・疲れが一番落とせる
- ・本当の気持ち(2)が正直に言える
- ・信用できる仲間
- ・いつでも本当の自分でい

られる ・他人の前でできないことができる ・安らぎ休憩の場でも地獄 ・プライベートなことは話さないけれど楽な所

・悩みやうれしい事など色々な感情を分かちあう場(4) ・いつでも見ていてくれる(2) ・自分のことについて他人以上に真剣に考えてくれるもの ・家族でも少しは気を使わなくてはと思うが私にはできない ・家族と話すことによりくよくよしなくなる ・見ていてしかったりほめたりしてくれる(親戚もかな) ・けんかする時もいい時もあって友達のように ・けんかができる ・本当のことを話せないけれどいざとなると強い結びつきがある

・あたたかい雰囲気(2) ・愛で満たされている所 ・すてきなもの ・その家にともる電灯みたいなもの ・よくわからないけれどやはり大切なもの ・一生必要なもの ・人が生きていく上で重要な場所での一つの過程 ・きまっただ型がない ・結局はよくわからない ・あまりよくわからないもやもやとした感じのもの ・これがないと暮らしていけない ・こんなのいやだと思う時もあるけれどやはりいいと思える所 ・理解し合い助け合っていくもの ・家族と接する場 ・学校は集団でも本当は一人、家では一人でも家族という集団がある(んーわかかない) ・一緒に暮ら

している人(ペットも含む)

・衣食住などいっしょに生活する所(7) ・血のつながりのある所 ・親子 ・血がつながっているとただで他人である 一緒に暮らしている場所や家具

・「社会」では社会生活の基盤と習った ・人間が社会生活をする上で一番基本になる物すべて備えている場 ・色々なことを学ぶ場 ・私たちが初めてつき合っていく人、初めての人間関係 ・家族とのつり合いがとれないと、他の人とでもだめになるのではないか

・私のうちに家庭という印象は薄いからいい言葉だとは思わない ・あまり居ごちが良くない ・イヤだと思いう時もある ・悩みは家族より友達に話すし、あまり楽しい場ではない ・家族なんて大嫌い、地獄 ・親は学校のことになると親づらになる

生徒たちはこの書きにくい問いに対し、それなりに考えてくれたようだが、「このような気がする」「うだと私は思う」「うかな」「よく分からないけれど」という表現が多かった。この表現からも、本当にわかりにくい問題だと改めて感じさせられる。最初生徒たちの文を読んだ時、抽象的すぎ

て、これといったものはないなというのが第一印象だった。しかし、よく似たもので分類してみても、そこから一つ感じられてきたことは、「安らぎの場」という抽象的な言葉に代表されるような、「心の休息」「心の支え」的な言葉が多いということだった。それは、生徒たちがこういう面を求めているということの現れであり、家庭がいやだ、地獄だと書いている子たちも、心の安らぎや支えを求めつつ満たされないことの不満として表わしているように思う。

思ったより、物質的な機能や血縁関係をあげたものが少なかったということは、「家庭」にまず求めるものは「精神的な安らぎや支え」ということになってくるように思う。

家庭の中で人が、精神面で満たされるとはどういうことだろう。「ほっとする場」があるということとは、「自分が自分でいられる場」がある、生徒が書いていたように「本当の自分でいられる場」があるということでもあろう。「本当の自分でいられる」ということは、自分の全てが受け入れられながらも、かつ育ち行く方向へと援助されていること？ 育ち行く方向とは、自己形成？ 自己の確立、アイデンティティの確立？ 自分が自分を好きである人間へと成長していけること？ などなど、頭の中でぐるぐると回る。

私の場合は、両親もそろい、ごく「ふつう」の四人家族の

サラリーマン家庭であった。外から見れば何不自由ない平凡な家庭だが、自分としてはこれ以上一緒に暮らしていたら自分がつぶれると思ひ、大学時代から家を出た。結婚して初めて、ああここが自分の家庭だ、自分の帰ってこれる場所ができたよ、しみじみと感じた。結婚してからも、よほど用事がないと実家へ行こうという気にはなれない。人が大人になつていく過程で本当に必要なと思えることが、自分の子ども時代の家庭にはなかった、という感が強い。道徳的なことや、行儀作法的なこまごまとしたことは色々言われたが、かえってそれは自分を型にはめることに影響したようだ。青少年期に考えるべきこと、体験すべきことなどの手助けがなされず、「勉強」も机上の受験勉強だった。自分や周りの人々や生活などと関連付けて、自身の頭で考えるものではなかったから、当然体験するはずの学習・思考等が欠如していた。そのことが、今日の自分に大きく影響しているように思えてならない。自分の家庭にはいったい何が足りなかったのだろうか。与えてもらったものも数多くあるのだろうが、大切なものがポッカリと抜けていると強く感じる。

私の知人は、自分の家庭は反面教師的な所があり、ああはなりたくないという気持ちで、早く独立したかったと言っている。

自分の例をはじめとして、両親もそり、血縁関係があることが基本というより、子どもが育っていく上で本当に必要なとされる何かが満ざれているなら、その家庭がどういう人で構成されているかということは、あまり関係がないように思う。

「子どもが成長していく過程で、最も本質的な家庭の機能とは？」そのあたりを深めていくことが、今後の私なりの課題となる。家庭科という教科が、多少なりともこのような部分に触れていくなら、具体的にどうかかわっていくのか？その後、大きな課題になる。かかわっていく必要があるのか、という疑問もないわけではないが、私個人としては、このようなかかわりを抜きにしては、「家庭生活」という領域をやっていく意味がないような気がする。それが抜けている「家庭生活」なら、今までの「食物」「被服」「住居」等で充分のよりに思われる。

子どもが人として成長していく過程で、最も本質的な家庭の機能とは何なのか。子どもが自分をつくっていくことはどういうことなのか。新しい「家庭生活」という領域は、そこにどうかかわっていくことができるのか？もやもやと考えていたこと、書きながら、更にもやもやとしてきたことを文字にしてみた。

「We」創刊十年！ この歳月に、著者が
出会い、思い、考えてきたことの集大成
ウイ書房が贈る最新刊！

半田たつ子

木犀の 白う朝

- 目次
- I くらしの中で
 - II 人のかかわりの中で
 - III 女と男
 - IV 教育をめぐって
 - V 私、そして家族
 - VI いのちを考える

医師も驚く生命力で病魔と闘ってきた夫が、遂に力尽きたのが九月三十日。お通夜、お葬式をすませ、家に帰ろうとした時、木犀の香を聴いたのです。
夫を見送り、「We」が創刊十年を迎えるという区切りの時、まとめる本には「木犀」を名乗らせたいと思いましたが、こうして、いまに区切りをつけ、次の一步を踏み出したいと願ったのです。

(「はじめに」より)

定価一八〇〇円(税込) 千二六〇円

ご注文は最寄りの書店に。(地方小出版流通センター級)
ウイ書房に直接お申し込みの場合、単行本は、送料をお
添えの上、振替で。(書名明記)
182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14 Tel03(3326)1380

ウイ書房

振替口座 東京 6-59867

新しい・家庭科を・創るために

■高等学校では

「家族」の授業から

—新しい家族観の芽ばえ—

分校 淑子

(金沢大学教育学部附属高等学校)

●はじめに

今、私が一番興味をもち、一番やりたいと思ひ、そして一番悩んでしまふ授業、それが二年間の家庭一般の締め括りとして位置付けている「家族」の授業です。

家族は今、世界中で大きな揺らぎの時代を迎えています。日本にも確実にその波は押しよせており、「血縁と婚姻関係を軸にして、性別役割分業と家族愛によって成り立つ近代家族」はくずれ始めています。しかし、果たしてこれは憂うべきことなのでしょうか。この近代家族からはみ出している家族は悪い家族なのでしょうか。またマスコミが騒ぎ立てるよ

うに、家族そのものが危機に瀕しているのでしょうか。さらに、人々はこの家族の揺らぎをどのように受けとめ、関わってゆくのでしょうか。

家族そのものが減じるわけではありません。しかし、家族は大きく様変わりするでしょう。そして、紛れもなく生徒たち一人一人が、近い将来その新しい家族を創り出し、担ってゆくのです。私は、生徒たちにその点をはっきりと示し、一人一人に認識して欲しいと思っています。

一昨年来の「家族」の授業の取り組みは、本誌90年六月号及び91年八・九月号でも紹介させていただきました。今回は、昨年深めきれなかった「生」へのこだわりと今年初めて

教材化した家族意識（ファミリーアイデンティティ）に焦点を当てた部分について報告したいと思います。

● 産むことを通して

家族にとって、新しい命を産みだすことは大きな意味のあることでした。ところが、今、日本をはじめとする多くの先進国では、女性が、そして家族が、産まない選択をし始めています。国家にとって、これは由由しきことです。しかし逆に、アフリカ諸国や中国では、人口増加をくい止めることに国家が必死になっています。同じく生を受けて、喜ばれる子どもと疎んじられる子どもがいるのです。同様に、血縁や生が重大な意味をもつ家族もあれば、そうではない家族もあるのです。

私は、産むことにまつわる様々な国の現状を映像を通して見せることにしました。五年前BBC放送によって制作されたNHKでも放映された「愛の法則」、昨年放映されたNHKスペシャル「上野千鶴子の一九九〇年のアダムとイヴ」等から選び出しました。

子どもがいてこそ家族の幸せがあると信じられている子沢山のインド（但し現在都市部を中心に、インドでも子どもの数は減少している）。婚姻制度が崩壊しつつあるドイツでの子どもの位置。子どもより仕事を選ぶイタリアの女性。アメ

リカのステップファミリーの中の子どもたち。男女平等の確立と出生率回復を果たしたスウェーデン社会での家族。

これらの映像を視聴後の生徒たちの感想をあげてみたいと思います。

(a)子どもが欲しければ産めばよいし、産みたくないのであればそれは個人の選択であるので干渉する必要はない。ただ、子どもを産んだのなら、その子が自立するまで責任を持つべきだ

(b)世界各国で家族や子どもというものへの考え方が違うのは、その社会状況が深く関係していると思った。女性として、男性としての位置づけられ方が、その国によって大きく変えられていったのだと思った

(c)人生は何をするためにあると考えるのかによって家族や子どもに対する考え方も変わってくるのだなあと思った

(d)人間は結局自分がかわいがっているのだ。だから現代は、ある意味で素直なのかもしれない

(e)自分の将来について考えてみる時、子どものいる家族というのは絶対条件です。だから「子どもはいらぬ」という考え方が増えるのは何だか憂鬱です

(f)悩んでいるのはどこも同じなんだと思った。子どもと仕事との間にはさまれて、それぞれの夫婦は自分たちなりに考えて選択をしなければならない。だけど選択をした後も迷

うのだ

(g)色々な国があると思った。各々の歴史や慣習の違いが大きく影響していると思う。ただ、産まない人や特別な立場の人はそれなりの理由の説明を要求されるけど、一般の人はどうなのかと思う

その他、具体的には、ほとんどの生徒がスウェーデンの社会や男と女の関わり方を理想的だと評価しているようでした。ただ、女性も働ける社会とは、裏を返せば女性も働かねばならない社会であり、インドのように子沢山で、子育てに時間を費したいと考える生徒にとっては、「肩身が狭い」という意見もありました。また、アメリカのステップファミリーについては、予想以上に批判的な意見が強くありました。ふだん男女の愛を神聖化して語る彼女たちが、子どもが産まれることによって、急に男と女ではなくまず親であれ!!と激しく主張する様子は、しばし啞然とする程でした。これらの感想をもとに、以後の授業を組み立ててみました。まず、(a)(c)(f)の生徒の感想のキーワードともなっている個人の選択としての子産み、に対して、選択のできない社会や個人の事情についても知ってもらいたいと思いました。今年NHKで放映された『独生子女―中国一人っ子政策の内面をみる―』を視聴させました。生徒たちはもちろん、中国の一人っ子政策という言葉は知っていました。しかし、そ

れがどれ程女性を苦しめているのか、どれ程不合理的な政策なのかということまでは考えていなかったようでした(但し、多くの中国女性は自然に受け入れているのではないかと私は思います。自分が生きている社会を疑ってみるということは、他から見れば容易くても、当事者にとっては難しいことです。今日日本では、女性たちがそのもやの中からもがき出すようにしているのだと思います)。特に生徒たちは、二人目を身籠りおろさせられた女性と、捨てられてしまう女の子に対し、同性として心を痛めていました。そして、戦時中の産めよ殖せよに続く一人っ子政策という国の身勝手さに怒りを感じていました。日本も、同じような歴史をもっていることを、そして今また産むことを推進させようとしていることを付け加えました。

しかし、同じ選択の余地がない状況でも、不妊という事実はまだ大きく意味が違ってきます。不妊について扱ったNHKのファミリージャーナルをもとに、産めないことにも目を向けさせました。現在十組に一组は不妊といわれ、流行にもなったDINKSも実は結果DINKSがほとんどだとも聞きます。『不妊』(晶文社)や『アブナイ生殖革命』(有斐閣)などの本を資料としながら女にとっての子産みや科学の発展について考え直してみました。

そして、これら一連の産むことにまつわる授業全体からの

生徒の感想の一部をあげたいと思います。

(ア)この授業を通して、どのような生まれ方をしたにせよ、一番大切なのは生まれてきた子どもが何の束縛もなしに自由に生きていけるようにしてあげることだと思った。避妊に失敗して生まれてきた子ども、試験管から生まれてきた子ども、法律の規定外で生まれてきた子ども、みんな自分の意志をもっていて、未来もあって、そして生きる権利があるのだ。

子どもの誕生には、家族や血縁という枠組み以上の何かがあると思う。今の大人たちは生まれたばかりの赤ちゃんが、自分のものであると思いつみ、自分と同じ感情をもった人間なんだということをお忘れかけているような気がする。結局のところ、血縁など関係がないように思えてきた。要するに信頼しあえる者同士が暮らしていく単位のことを家族というのだろうと思えた。

(ウ)はつきり言って怖かった。特に産めない自分の体を傷つけてまで産もうとする執念が怖かった。このままではますます女が生きにくい世の中になりそうだ。

(エ)子どもは子どもとして見るより、個人として見るべきだと思ふ。たとえ二人の男女の間に産まれたとしても、結局個人なのだ。だから、子ども優先に生きる夫婦や、何がなんでも子どもを産まないかと考えることは何だかおかしいと思う。但し、産んでしまったら、個人としてやっていける

力を養ってやる責任はあると思う

この他、様々な意見・感想が出ました。一人一人本当によく考えてくれたことが手にとるようになりました。私も、(ア)や(エ)の感想にあるように、子どもをもっと個人として尊重する必要があると思います。それは単に夫婦が子ども優先の考え方をすることでもなく、さらには、血縁という域のみの問題でもないと思うのです。それは、血縁や子どもにとらわれ過ぎない形の家族をも示唆します。そのことを(イ)は言っているのだと思います。生徒たちに何げなく「家族って何だろうね」と問いかけた所、(イ)の生徒ばかりでなく、「互いが認めあったら家族」「最も信じあっている者同士のこと」等内面的な答えが次々返ってきました。そこで、ファミリーアイデンティティについて考えてみることを次のテーマとしました。

ファミリーアイデンティティの

変化を見て

「あなた自身が『私の家族』と思う人たちを図示してみて下さい」と生徒たちになげかけてみました。記念祭等で前の授業との間が非常にあいてしまったこともあり、やはり現実的には、同居している「家族」を思い浮かべることは当然なことでもあり、ほとんどの生徒は常識的(?)な図を示しました。亡くなったおじいちゃん、おばあちゃんやペットの犬や猫を

入れている生徒が少数ありました。

次に、変貌する家族シリーズI『家族の社会史』の中の、上野千鶴子氏の書かれた「ファミリーアイデンティティのゆくえ―新しい家族幻想」の中から、様々なファミリーアイデンティティの例を資料として見せました(資料1〜5参照)。

(資料1)

▼Eさん(女・三九歳・公務員)の場合

学生の時知りあった夫との間に小学一年の娘一人。結婚当初は公営住宅、その後マンションを購入。子どもができてから、夫婦とも仕事がだんだん忙しくなり、第一家を巻きこんで、親に家を建て替えることを持ち掛けた。建て替えの費用は全部自分たちが出した。Eさん家族と親が二世帯住宅、同じ敷地内に弟は別棟を建てる。家事は最低限。子どもはほとんど母に任せている。

(資料2)

▼Gさん(男・四二歳・市役所職員)の場合

職場結婚した妻と、高校生、中学生の子ども二人、母の五人家族。仕事の関係でフィリピン人の女性と知りあったのが、ネグロスの子の里親になったきっかけ。三年前から現在一歳の子の里親になっている。ネグロスの里子の一年度の学費は一万円。Gさんの妻はこのネグロスの里子にいたって無関心で「二人の子どもは自分のもの、里子は夫のもの」と考えている。二カ月に一度出す手紙には必ず返事がくる。この夏ネグロスま

で会いに行ってきた。

(資料3)

▼Hさん(女・五一歳・ライター)の場合

四七歳で夫と離婚。しゅうとの「あんたと列れたくない」という言葉に負けて同居するようになる。嫁として同居していた時は旧家ということもあり、古い町で親族に囲まれ、まるで殿様とそれに仕える家来の関係だった。「早く死ねばいい」と何度も思ったくらいなのに、離婚してまで一緒に暮らすとは思ってもみなかった。だから同居を始めるや「これからは自分のことは自分でする」よう言い渡した。家事もどんだん叱りとぼして仕込み、容赦しなかった。そうすれば音をあげて実の息子の所に逃げ出すだろうくらいに思っていた。ところがしゅうとはどんだん家事を覚えて、やがて「家事は楽しい」とまで言うようになった。そしていつのまにかしゅうとはなくてはならない人。家事も分業してくれるので助かるし、昼間電話番をしてくれるので秘書の役も果たしてくれる。現在成人した子ども二人はそれぞれ別居、Hさんとしゅうとの二世帯である。

(資料4)

▼Mさん(女・六五歳・元日赤看護婦)の例

第二次大戦をはさむ激動の時代を、日赤の病院で看護婦として働き通した四名は、現在四軒並ぶ住宅を建て「一番大事なのは四人」と共同生活をしながらシニアライフを存分に味わっている。九〇余坪の敷地に建てられた前庭付きの二階建住まい

は、各々別々。インターホンと非常ベル、自由往来の庭でつながらり、各戸のリビングルームは渡り廊下にもなっている。食事は四人共同、風呂は二人ずつ。あとは適当に集まってお茶を飲んだり、毎朝散歩をしたりする。四人とも趣味や研究テーマを持ち、日夜それぞれ励む生活をおくっている。「私たちは姉妹よりも親しく、強い同志的家族であり、変則的共同体である」と言う。

(資料5)

▼オリブ(大阪ミナミのスナック)の場合

オリブは大阪ミナミにあるスナック。全部カウンター席で一〇人も入れればいい。ママさんは四〇代後半で姐御肌。客は企業に勤めるサラリーマンだが、大半は常連客。カラオケで唄ったり、ママを中心に話をしたり毎晩にぎわう。バレンタインデーはもちろんのこと、パースデーにはプレゼントが用意され、客がみんな「ハッピーパースデー」の歌をうたう。時には飲んだ後、ママを中心に連れ立って近くで「外食」をして帰ることもある。また客の差し入れの寿司やお菓子などをみんなで分け合う。年に一度は温泉旅行。費用は店と客で半分ずつ出す。

クラス中で話し合ったところ、「GさんはK先生みたいね」とか、「Mさんみたいな家族もいいね」など雑談的なものから、「家族は変わりつつあるといっても、一つの方向へではなくて様々な方向があるようだ」「自分が家族と思っても相

手が思ってくれないのは寂しい」「家族ってどう定義するかによって、全く変わるものだ」等の核心をついた意見も多数ありました。

ただ前述の(a)や(エ)にもつながる意見として、「大人はどんな家族を選ぼうと勝手かもしれないが、それに振り回され、切り捨てられたりくつつけられたりする子どもはどうなるのか。そんなことを考えると、やっぱり伝統的な家族の方がよい」という意見も強くありました。伝統的家族にNOと言いだめた女性たち(だけではないかもしれませんが)。けれどその代償として子どもや老人たちが切り捨てられたり、利用されたりするならば、新しい家族も何一つ変わっていない気がします。家族は、一体どうなってゆくのでしょうか。そして、授業ではどこまでつっこんでいけばよいのでしょうか。沢山の生徒たちの言葉一つ一つが課題になってゆきます。

最後に、私自身は自分として生きることをあきらめたくはありません。同時に、家族というものに対してもあきらめたくはありません。そして生徒たちにも一人一人が、自分を犠牲にすることなく、そしてまたあっさり大家族から降りてしまふことなく、色々な模索をやって欲しいと思います。そうして創り出してゆく一人一人の生きざまが、結果として新しい家族を創ってゆくのかもしれません。

「住民票続柄裁判」交流会

〈田中須美子〉

「母親が婚姻届をしているかいないかで、法律上、子どもを「嫡出子」「嫡出でない子」と区別し、住民票の続柄欄で、差別表記するのは、おかしい。この差別表記を撤廃してほしい」と訴えた裁判を支援し、交流しようとする会です。

年十回、通信「VOICE」を発行し、年一回、パンフレットをだしています。

印刷から発送に至るまで、自分達の手でこなし、雑談に花をさかせつつ、ワイワイガヤガヤ、作業をしています。

婚外子（結婚外で生まれた子）差別は、その母親に、何てひどい母親だ、子どもがかわいそうじゃないか！との批判を集中させることによって、女性達を結婚に追いこむ役割をしています。

生き方を強制しないで、多様な生き方を認めさせよう！と通信「VOICE」の中で、事実婚のすすめ、シングルマザーやシングル女のすすめ等の実践報告をのせています。裁判傍聴や国会への請願署名運動にとりくみつつ、お墓の問題、嫁の問題等家制度の問題にも、学習会を設定しとりくんでいます。この十一月で九三年、現在二百数十名の会員がいます。

連絡先 〒180 武蔵野市桜堤1の2の54の1 田中芳

または ☎ 03-3302-3345 武田（夜のみ）

自己紹介ぶるうぐい

ナオミ保育園父母の会

「オヤジの会」

〈栗林 満〉

私たち「オヤジの会」は四年ほど前、東京・世田谷にある私立ナオミ保育園の父母の会から生まれました。もともと活動が活発な父母会でしたが、母親に比べて影の薄い存在だったオヤジの有志が「保育園はオンナ、コドモだけのものではない」を合言葉？に、定期的に集まるようになったのです。「オヤジの会」には規約や活動方針が特にあるわけではありません。月に一度の例会と、年に何回か子どもも親も楽しめるイベントを開催したり、新聞『オヤジはつらいよ』を発行して、オヤジたちの様子を知らしてもらおうなどの活動を行っています。例会（飲み会）では、職種を越えて、子育ての話から仕事や趣味、夫婦喧嘩から政治の話まで、なんでも酒の肴に延々と話し（飲み）続けるのです。母親たちはこの例会を「男の井戸端会議」と呼んでいるとか。

私たち「オヤジの会」のオヤジたちも、各家庭でなんらかの形で育児協力していますが、「役割」としての子育ての協力、補完的な部分から、新しい時代のオヤジの出席を模索しています。先日、「現代父親子育て奮戦記『オヤジの出席がやってきた』」（汐文社）を出版する機会を得ました。ぜひこちらも参考にしてください。

連絡先 〒158 世田谷区等々力4の18の12 和光マシヨン

402 代表世話人 森口 秀志

働きの中に

内なる輝きをこそ

1 働くものは美しい

民衆は、時に驚くほどの知恵や力を創造するものだ。福島大学の西内さん御夫妻に案内していただき、紅花染めや古代織りが、民衆生活の源流に根ざす姿に深く心動かされたのは九〇年夏だった。福島の家で、昔のノミ取り機を見た時はあっと驚き、笑ってしまった。板にトリモチをぬり、竹ヒゴでカバーしてふとんに入れたら安眠間違いなしというユーモラスな道具を見れば、ダニにお手上げの現代の住宅の方は笑いも出ない。

広島県府中市上山の竹籠は大変すばらしい。このめかごを六十年造ってきた小田正雄さんは、ナタ一本で驚くほど迷い

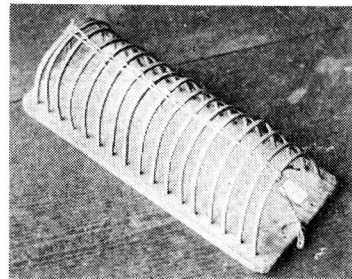
のない仕事をする。「木六竹八」といって夏に竹を切ると虫がつかない。長さ1.5mに切った破竹の両端から、内1mmほどに14本ずつ切り裂く。その竹8本で、おつれあい手がぎわよく編んでいく。この堅牢な籠は、茶碗上げや果物、野菜入れにもよく、その機能(働き)からくる構造美はすばらしい。ある人が「そんな安い値でいいのか」と聞いたたら、「それ位が買いよかろう」と彼の答えが返ったという。互いに人間の顔が見えているのがうれしい。

国の道具を見れば国の、家の道具を見れば家の文化が分かるという。

日常生活の機能から今の家庭の営みも見直すべきで、生活に根ざさない抽象的男女論から立てた家庭論では、それ自体が病んでいないか。

2 平々凡々の底力

「いい茶碗だーだが何という平凡極まりないものだ」と柳宗悦は驚きの声をあげた。そして「だがそれでよいのである。それだからよいのである。それでこそよいのである」と自答



昔の民家のノミ取り機 (福島県)



広島市府中の竹籠

の民衆の生活に使い込まれた暖かな琵琶色（ひばいろ）：これ以上つけ加える何物もない。

家元制度の企業化俗化に毒され、形骸化した華道、茶道を私は好まぬが、陶芸も例外ではない。「人間文化財」に惑わされ、目立とう、もうけよう、名を挙げよう、上手になろうとぎんぎんの欲望や作為の見えすく作家の作品ほど、高値でいや味なも

する（柳宗悦選集第六巻「茶と美」33—35頁）。私もまたその井戸茶碗の平々凡々たる姿を見て天下第一の茶碗と思う。楽も唐津も萩も、名もなき李朝の工人によって民衆の飯茶碗として生まれたこの器の無作為の存在感に圧倒されてしまう。

生活の中でさり気なく生まれ、生き、消滅していく潔さに滲む風格に比肩すべき物はないからだ。今、大井戸「喜左衛門」の銘で極付き四重箱に入れられて、国宝に指定されているが、そんな通俗的扱いはそぐわない。無名の工人の作った飯茶碗で、富裕階級の茶器でなかったところに、無作為の絶品のゆえんがある。力強い竹節高台、奔放な梅華皮（うめばな）、胴（たね）から口縁への大らかな開きとろくろ目、巧まざる貫入（かんにゅう）、そして永年



大井戸 銘喜左衛門 孤蓬庵

のである。そんなやり切れなさ
が、井戸茶碗でふっ切れる。この碗は竹田喜左衛門—本多能登守—松平不昧の手を経て今、大徳寺孤蓬庵に納まる。同系の井戸茶碗「筒井筒」「細川」等と、民衆生活文化の極致というべきであろう。

朝鮮民芸に開眼した柳なればこそ、ファシズムに抗して、三

破壊に対する擁護保存の奔走、李朝民芸の発掘、沖繩方言の擁護：と日本浪漫派には異質の活動を展開しえた（『We』89年十一月号、岡百合子さんの「私の朝鮮史」を読みたい）。ただ李朝の白に悲哀を見るのは金両基氏らの批判のように、病める日本の知識人の限界であったろう。李朝白磁はもっと大らかである。実は私も、李朝中期の白磁大壺と常に対座し、民衆の心の原点をそれに映し、清談し、学んでいるのである。

3 よい仕事は美しい心と生活を生む

津和野で和紙漉きを見た修学旅行生が、和紙に穴を開けた話は、人の生活や労働の見えなくなった象徴的事件であった。また現代の漂白酸性の洋紙が、二、三十年で劣化するの

項目	材 料	作者名	作る人の働き	使用者の動き	特 性 (長所)	
※ 民 藝 品	自 然	無名の 民 衆	手を中心と する労働	日常生活	歴史のある文化 協力のできる品 丈夫で役立つ美しさ	
1	木 製 盆	木	なし	切る、けずる、 みがく	のせる、おく、 はこぶ	丈夫、95年の年輪、 便利
2	竹 か ご	竹	なし	切る、割りさく、 けずる、 編む	入れる、まと める、盛る	軽い 姿がきれい
3	焼 物 鉢	土	なし	こねる、形を 作る、焼く	のせる、盛る	長持ちして丈夫、 デザインがいい
4	藍 染 布	ワ ア タイ	なし	つむぐ、織る、 染める、仕立	着る、はく、 まと	丈夫、汗を吸う、手 ざわりがよい、美 しい
5	和 紙	コウソウ、ミガ ンピなど	なし	はぐ、煮る、さら たたく、漉く	書く、描く、 張る、ふく、 包む、こよる	変色しにくい、いろ いろな姿やデザイン、 美しい、丈夫
6	桜皮工芸	ヤマザクラ	なし	はがす、切る、 張る	入れる、保存 する	湿気を防ぐ、乾燥を 防ぎ、つやがあり美 しい
7	草 織 り (すだれ、 ざぶとん)	ク イ ズ サ	なし	切る、刈る、 編む	かける、すわ る	軽くて丈夫、 涼しそう

項目欄以外、全部空欄だったのが授業で充当された(※欄は最後に朱書)。

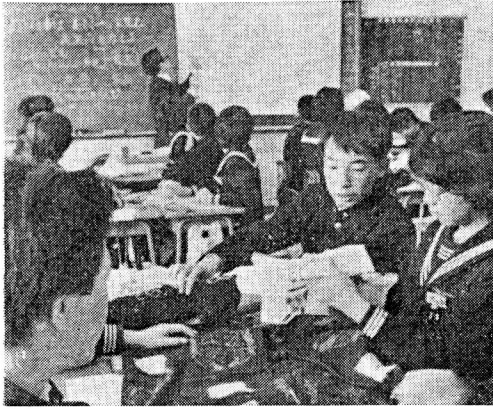
に、東大寺や正倉院の和紙が厳然と千年以上を堪えている事実も、現代の生活基盤のバブル性の象徴である。バブルは金融不正のみでなく、家庭も、教育も、政治・社会も、人々との関係を不毛にした現代の病める生産と労働と生活のバブル形態を根源から問うているはずである。

こうした背景から、八三年十一月、私は桜山中學一年生を対象に、民芸を考える授業「よい仕事は美しい心と生活を生む」を公開した。校区に国際民芸館があり、館長に倉敷民芸館長を兼ねる外村吉之介氏がいられるのでお招きし、授業にも登場していただいた。外村氏は柳宗悦直弟子の一人である。

生徒には事前に和紙に穴を開けた中学生の話と、和紙と藍染めの説明をプリント配布しておいた。「民衆とは」の問いに「私たち」の答えが出た。これはキーワードだ。七班に異なった民芸品とその観察ポイントメモを配る。その後各班での観察・討議・報告で掲示された表を充当していく形をとった。

各班の希望別に配られた各民芸品の材料・作者・作る働き・見る働き・特色が出されていた。民芸品は日本各地のものを選り、生産消費に関する動詞はカードで示し、該当班に挙手してもらい、授業は順当に進んだ。一応充当が終わった所で、各項に共通する最大公約的特色を出してもらい、赤字で記入した。材料―「自然」、作者―「無名の民衆」、生産―「手の労働」、使用―「生活の用」、特色―歴史的な文化・協力・

丈夫で役立つ美しさ……ここで民芸の規定が自動的に完成する。そこで「民」の語源(目を潰された奴隷)、「衆」(三人が集まった一血の下に人が三人一仲間)にも触れた。子供たちは日頃の商品とは全く別世界のことや価値観に触れて驚き、心動いた。最後に外村館長に登場願った。館長は籠や藍染めを示しながら、民衆の昔の麻布の生活と、木綿が日本に入り、藍が入った後の民衆の生活の変化を実証されながら、子供たちに大きな感動を呼び起こされた。



民芸の授業風景

4 内なる輝きをこそ

願わくばこうした授業が、現代のバブル幻想から、「健康な生活」への回帰への一助になればと思う。地道な生活から離れた現代では、子供の讃嘆の声は「かわいい！」に収斂する。だからその対極を異端視する。幼児のまま大人になった保護者は、七五三で子供を飾りたてる。市原市では一人一万円の料理で二百人のパーティを開いた親もいる。子供のファッション雑誌、原宿の子供のファッションビルでも子供用本毛皮コート、ブランド物装身具に事欠かない。だが重要なことは、外から put on された“decoration”と、内から発する“ornament”は、同じ装飾でも、ラテン語の本来の意味から違うということだ。人も家庭も社会も、バブルのデコレーションで人間らしさを失うが、内から、働きから発したオーナメントで輝きあう所に、再生の希望が見えてくるのではないか。

(注1) 井戸茶碗の特徴の一つ。釉(うわぐすり)の焼成が不十分のために、熔けきらないで、表面が鮫皮に似た状態のもの。

(注2) 陶磁器の釉の表面に、割目のように細かくはいったひび模様。陶器が焼き上がり、冷却する際、素地(きじ)と釉の収縮率の差から生ずる。釉の厚さ、焼成度、冷却の速度によってひび模様のはいり方に違いが生ずる。

家族と家庭科

● 酒井はるみ

小学校教科書の

新しい特徴

一九七七（S52）年の学習指導要領に準拠した教科書は'80年度より使用された。開隆堂と東京書籍（以下東書）の二種類で、いずれも'79年と'85年に新しい検定教科書を、'88年に（現在使用中の）改訂検定版を出している。

'77年要領では、'68年要領の「家庭」の領域が「住居と家族」に変わった。応接や訪問のしかたと家庭の機能がなくなり、家族領域の内容も比重もともに小さくなってしまった。

これに先立つ'75年は国際婦人年で、性差別への社会的関心が高まり、家庭科の男女共学・共修運動が一挙に盛んになった。この風潮のなかで、教科書のさし絵は差別的だという強い批判がおこった。家庭科では、他教科よりずっと敏感にかつ素早い対応がなされた。知る人ぞ知る事実である。現在の

小学校家庭科教科書のさし絵が、性別役割分業観から全く自由かと問われれば、そうとは言い切れないが、とりたてて問題となるものは確かになくなった。

では、家庭における仕事と分担についてとりあげよう。これまではいきなり家庭の仕事から文章が書き起こされていた。しかし今回は一年生の社会科で学んだ、収入を得る仕事（就労）と収入を伴わない仕事（家庭の仕事）とをおさえてから、家庭の仕事に入ったのは、評価されてよいことである（東書'80年度版、開隆堂'86年度版より導入）。

家庭の仕事は性別役割分業という観点でみると、開隆堂の'80年度版では専業主婦のいる家庭の母と父の仕事の分担は11対3で、共働き家庭では8対6（祖母が6）となる。'86年度版では仕事の分担調べの表は一つにとどめたが、母と父の分担比は10対8（祖母は10）と近接傾向を示した。母の就労の一般化が性別役割分業をくずす働きをしているようだ。東書は'86年・'89年度版とも祖母のいる共働き家庭をとりあげ、母対祖母対父は15対14対11と、現実の性別分業体制は根強いものがあるが、両社とも性別分業の不明確化へと一足先んじてみせたのである。

子どもの仕事分担については、開隆堂は子どもの現実をふまえてか、従来より減少させた。ごみ出し、夕食の用意、夕食のあとかたづけ（'89）程度だが、「自分の仕事を計画し、統

けて実行することは、わたしたちが生活する力を身につけていくうえで、必要なことである」とはじめて意義づけをした。

東書は、食事のあとかたづけ、へやのかたづけなど9種類におよび、現実よりずっと多いが、「仕事をすることは、家族のひとりとしての責任の分担でもあり、わたしたちの人間としての発達に欠かせない」と80年度版以降一貫した主張がある。母親の重い負担を軽減するための分担ではなく、積極的に生活力をつけるという新しいとらえ方がどちらにも認められる。

つぎに、家庭生活において、子どもはどう位置づけられているであろうか。

東書では「父母やその他の家族は、わたしたちが、しょうらい、りっぱに家庭生活や社会生活がおくれるようにと願っている」という位置づけ方を長い間行ってきた。そこには今父母と子どもがどうかかわるかは描かれていない。子どもはほとんどお客様扱いといってよい。しかし86年度版では「わたしたちは、家族の気持ちを考え、すすんで協力して、よりよい家庭生活が送れるように努力しよう」という一文が加えられた。まず家族の気持ちを考えろという、きわめて日本的で心情的な子ども像であった。しかし、89年度版ではこの二文はガラッと変わる。「わたしたちは……さまざまな体験を通して、ひとりだちした、たのもしい人間に成長することが

できる」と、個人の自立が述べられたのである。裏表紙には「ひとりの人間として自立する。よりよい家族の一員になる」と記し、自立した個人を重ねて強調している。

開隆堂89年度版は新しい問題を提起した。「家族は、どんなときでも、たがいに助け合い、はげまし合って、心が通じるようにすることがたいせつである」という考えに立つと「むかしに比べると便利になってきたが、家族の結びつきや、地域の人びととのつながりが弱くなっているといわれ」る現状は問題である。そこで「わたしたちは、家族と一日のできごとを話し合ったり、家庭の行事を楽しんだりするとともに、地域の人も親しくして、人と人との心のふれあいを深めるようにしよう」。家庭生活があなたかも無風地帯で営まれているようだった従来の記述と比べると、短かい文章だが、社会的現実の中で家族問題を認識し、対応しようとしているといえるだろう。また、家庭生活は地域や社会と深くかかわっているという東書の、以前からの見方も重視してゆきたい。

教科書には専ら祖母のみが登場し、現実を反映していないと批判したことがあるが、80年度版以降は祖父も姿をあらわしはじめ、たまに祖父母のそろった家族が描かれるようになった。高齢化社会の反映ではある。

以上の小学校の特徴は、高校の特徴と重なるところが多いことに気づきたいものである。

男性学への契機

魔男の宅急便

■諸橋泰樹

男はつらいか

昨秋から年末にかけて、ある自治体の社会教育講座で、10回連続の「青年講座」を受け持った。「青年講座」的なものは過去に何度も出講したことがあり、夕方から夜間にかけて行われるこれらの講座の大半は、男女とりまぜた参加者とはいえ、6対4ぐらいで男性の方が多いのが常だ。昼間の「婦人学級」などのおもむきとは大いに異なり、参加者が10代後半から20代後半と若く、未婚者や男性が多いこと、また集ってくる目的などを見ても、公民館の「昼の顔」と「夜の顔」をみるようで興味深い。

引き受けた青年講座は、「恋愛の心理学」というタイトルで、担当者は男女半々の「出合いの場」を目論んでいたようだったが、蓋をあけたら参加者は十数人にとどまり、うち女性は二人ほどで、さながら「男性講座」の様相。「男性学」とか、女性に向けて喋るよりも男性にこそ、を標榜した

手前、これはいい機会と思い、「男性改造講座」「花婿学校」風にゼミナール的な話し合い形式をとることにした。

女性学やフェミニズムに「理解」を示す男性の中には、女性学やフェミニズムに「すり寄る(媚びる)」男と、女性学やフェミニズムに「助けを求める」男との両タイプがある。彼らはフェミニストによって批判されるのだが、このような、男がフェミニズムを手段として必要とするという面を、ぼくは一概に否定はできないだろうと考えている。

が、そのことはさておき、このような「理解」を示している男たちでさえ、社会では少数派であり、青年講座にはまずやっつけないタイプである。とはいえ、ぼくが出会った今回の青年講座の、20代半ばから後半にかけての若者たちは、もとより、タイトルの「心理学」にひかれ、「彼女」をみつけるノウハウがつかめるのではないかと、「期待」を抱いての参加ではあるが、決してモテないタイプとも保守的なタイプともいえない好青年たちだった。

ぼくとしてはむしろ、女性学やフェミニズムの「洗礼」を受けられることで男ができることは、フェミニズムへの「すり寄り」や「救済を求める」ことよりもまず、女性を抑圧してきた・している存在であることを自ら認識するための男性的想像力や考察の獲得ではないかと思っている。女性たちは、抑圧され続けてきた状況をコンシャスネス・レイジング(気

づき・意識化)と称される体験・感情の分かちあいを通して自己認識し立ち上がってきた。男たちができるのは、「女性」や「女性学」を対象化したり、ア・プリオリに自らの精神や身体に取り入れてしまうのではなく、何よりも自分自身Ⅱ男が女性や社会への抑圧者であるということに気づいていくことなのではないだろうか。それはまた、自分たちが作った社会の軛によって自らも抑圧されていることに気づくことでもあり、いうまでもなくこれは(実は男/女関係なく)社会変革への礎となるものである。

講座ではまず、いまの男は優柔不断で女性に媚び、夢がなく現状満足で保守的、云々である一方、「あるべき男像」は、ロマンを持ち、リーダーシップや判断力、知識や経済力を有し、堂々としていることなどを、各自の自由連想から明らかにしていった。これらは明らかに社会的規範として男に求められ女には不要とされる二重基準のアイテムであり、その意味で彼らの発想は旧態の域を出るものではない。しかし、自分たちはこれらの項目から遠いゆえに、半分苦笑しつつ「経済力」や「判断力」について話し合ううちに、カップルが学生時代を終えて互いに就職すると途端に、食事などの支払いがワリカンから男性がおごることに変わる、いやおごらなければいけないように自他ともに思うようになる、これは何なののだということになった。男が常にリーダーシップを

(無理して)発揮し、(なけなしの)金を払わねばならないことは、けっこう「疲れる」し「不自然」だという意見も出、多くの共感を得ることもあったのである。おいしそうな店を見つけて決断し、支払いもしなければいけないと思っていことが、実は世間の「まなざし」の取り込みにすぎない点、そしてそうやって男を演ることがしんどいことである然る男ことを、彼らは自覚したのである。さらに、しんどくない自像というオルターナティブとしては、たとえばやさしい男、知的な男、自分の考えを持っている男などが挙げられ、これはなんのことはない、別の回で連想した、女性に求められていた像と同じではないか、ということになった。

男性がデート代を持つことには、男性が経済面でも行動面でも主導権を持ち、女性(との時間)を買うことで気持ちよい時間を過ごすという、買春および専業主婦を温存するありようが横たわっている。

実は、男を演ずることは、単に「つらい」のみならず、女性を金銭で買って支配することも含まれているのだ。その点についての発見は、彼らに重く響いたようだった。内なる規範としての「男らしさ」が足枷となるために、ホーキにまたがって空を翔けるにはウエイトが重過ぎることを彼らが自覚できた時はじめて、「魔男」の講座への出前は必要なくなるのかもかもしれない。

楳円の夢

夢の楳円

武田 秀夫

きのうの日曜日、ひさしぶりに妻と散歩を楽しんだ。風のない静かな秋の日に誘われたのである。

羽村の堰から福生へと、陽の暖かく照る多摩川の土手をぶらぶら歩き、帰りは上水沿いの雑木林の中の道を戻った。

黄葉が始まっていた。行き会う人はほとんどなく、小暗い水面にはかるがもが二羽、三羽。ほう、こんな所にと、道は、ひっそりと住みなした小家の裏手を行ったりした。

竹やぶを通りすぎた。そのとき、例の気分がまた私をとらえた。

「竹の林を見ると、おれは実に不思議な気持ちになる」

「竹の林ねえ」

「竹やぶのそばを通り過ぎたり、汽車の窓から、稲刈りの済んだ田圃の向こうの低い里山

の一部に竹林を見たりすると、ふうっと気持ちがそっちに流れていく」

「何かを思い出すわけ？」

「ああ。だけど、何か懐かしいものを思い出しかけているのに、もう少しのところできれいな形をなしてくれないような、なんとももどかしいような気持ちなんだ」

「小さいころ過したという浜松の田舎の竹やぶを思い出しているんじゃないの？」

「そうかもしれない。だけど、その不思議な気分には、もっとはるかな過去から立ちのぼってくる、川霧のような、言うに言われぬ一種の情緒が纏綿しているんだ」

「前世で竹取の翁であったとか」と妻は笑い。「まさか。でも、それくらいのはるかな気持ちになる。竹の林の奥をこうやって透かし見るときの気分にはほんとうに独特のもの

があるよ。これはいったい何なんだろうなあ」

福生の中学に勤めていたとき、美術の老教師Sさんからこんな話を聞いたことがある。

——ぼくは兵隊にとられて満州に行ったのだが、人も言うように、たしかに満州の夕陽は凄い。今でもよく思い出す。が、とりわけそのころのことを思い出しに胸迫るような気持ちになる、その引き金になるのは、むしろもっとささいなことなんだ。

たとえば、雨上がりの道にジープのタイヤの跡がついている。車が急カーブしたのだから、濡れた赤土がきゅうっところ露出して、そこに雑草が白い根をむき出しにして倒れている。そんなのを見ると、満州で過した若いころのことがまるごと、それこそあの思い出、この思い出と分けられない。「まるごとの満州」が、実に鮮明によみがえってくるんだ。コーヒーを片手に、少し目を細めるようにしてSさんは語ってくれたのだが、そのときSさんが言葉で語ろうとしながら、いやいや、このおれの感じは若いこの人たちにほんとうには伝えきれないなと思っていたにちがいない。まるごとの何か、それと共通するものを私は竹の林を前にしたときに感じていて、しか

も、それをうまく妻に伝えきれないのだ。

「私の場合は海かな。崖があつて、その上の陽当たりのいい斜面が畑になつていて、そんなところから崖の向こうに海を見る。すると、なんだかとても懐かしいような気持ちになる。ただ、私の場合、子どものころ四国の子供という所に住んでいたというはつきりした記憶が、その気持ちに結びついているようなんだけどね」

「でも、その記憶の向こうに、たとえば原始繩文の時代、そうした崖の上に住んで海を眺め暮らしていた無数の君ではない君の記憶が積み重ねられていたということも考えられる」「まさか。また妙なことを考え始めているな」「もしかしたら、幽けき光の漂う竹の林の中で竹を採って目を暮らしていた男と、崖の上の陽あたりのいい台地で日がな一日海を眺めながら手仕事をしていた女とが、大昔のある日、こんな秋の日に出会った、その記憶が、幾世へだてて今こうして歩いている男と女の中によみがえった——と、どうだい、こういうのは」「よくもそんなことを照れもせず考えられるね」

「ハハ。今日の秋の日の静謐に、おれの中の何が誘い出されたということさ」

二時間あまりの散歩も終わりに近づいた。腹が気持ちよくなりてきた。よし、パンのうまい行きつけのレストランに行つて食事しようかと、早くも気持ちは、そこで飲むビールに向かつている。足も少し速くなる。

「ああ、それから汽車だ」「汽車って、何が」

「古い映画などで、昔の旧式の汽車を見る。とたんに懐かしくなる。もともたすがに汽車は繩文時代には存在しなかったわけだから、その懐かしさは、竹の林を見るときほど底の深いものではないけどね。それにしても、黒々とした夜汽車に乗りこむ時の、あのタラップのあたりのえも言われぬアトモスフィア。それを思うと、眠っていた何かの記憶がまるごと自分の中で立ち上がりかけている気配を感じるよ」

「ふうん。私の場合は、ハナのあるバス」「ハナのあるバス？　なんだ、それ」「鼻のあるバス。昔あつたでしょう。今のバスのように前のところが真直ぐ切れているのではない、鼻のあるバス」

「ああ、わかった。なるほど、鼻のあるバスね。言い得て妙だな。で、それがどうした」「その鼻のあるバスをふっと思い出すことがある。すると、どういうわけか、それが、私の中で、私のお父さんと結びつくのよ」

私にはさっぱりわからない。どうして「鼻のあるバス」と「父親」とが妻の中で結びつくのか。が、しかし、妻もまた、私が「竹の林」や「夜汽車」についてうまく伝えきれないもどかしさを感じているように、「鼻のあるバス」と「父親」との無意味な意味連合を言葉では私に伝えきれないもどかしさを感じているのだろう。

「私の感じるこの不思議な感じ。わからないだろうなあ。でも、かまわないよ。私も「竹の林」がよくわからないんだから。お互い、ちがう人間どうしだからね」

そうだ、わからなくてもいいのだ。千年、二千年の後のこんな秋の日に、私たちのような男と女がふと竹の林を見る。あるいは、崖の向こうに光る海を見る。そしてこんな会話をかわす。

「あれ、なにか思い出したぞ」「ええ、私も。何だろう」「それでいいのだ。」



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

— 失敗は成功のもと —

その日の朝、私はとても緊張していました。三年生的美奈子ちゃんの初めての指導があるのです。七月に「ことばの相談」に来た時も、ことばの発達の様子をみる検査でわからないことがあると貝のように口を閉ざしてしまい、質問にも時々まポツリポツリと答えにくれただけでした。

案の定、待合室的美奈子ちゃんは固い表情でした。指導室に入って向かい合うまで一言もことばを発しません。

「今月は、七月から三カ月経っているから、ことばがどのように変わったか聞かせてね」と、五十音検査を始めました。ところが、五十音表を手持って見つめたまま全く口を開いてくれません。(困ったなあ…)

「じゃ、先生と一緒に読もうか」

と、最初声を添えると、あとはスムーズに人で読み出しましたが、再び音拗でストップ。

「美奈子ちゃんはテレビは好きかな？」

「……」(無言でうなずく)

「何を見てるの？」

「……」(首をかしげる)

「ドラゴンボール なんて見てる？」

「……」(うなずく)

「そうか、みんな好きなんだよね。先生もドラゴンボールの頃は見てただけだね。」

悟空はまだ生きてるの？」

「ウン」(やっと声が出た)

「しょっちゅう死んだり生き返ったりしない？ 先生、訳わかんなくなっちゃった。ピッコロとかいうのがいたよね？」

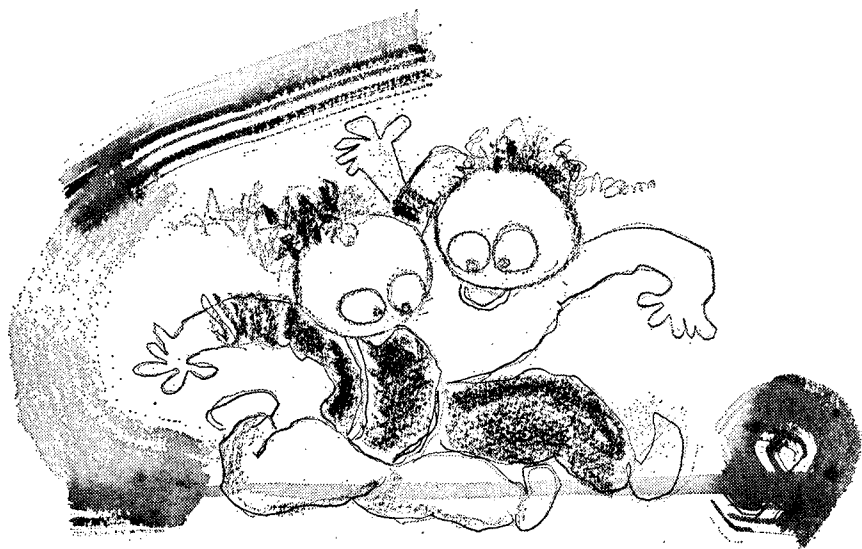
「ウン」(目が輝いてきたぞ)

「あれはイイモンなの？ ワルモンなの？」

「きのうね、ピッコロはワルモンになっちゃったの。それでね……」

この後ひとしきり美奈子ちゃんはドラゴンボールZの最近の話を語ってくれたのでした。こんな時は「知らないことは宝だ」とつくづく思います。

「じゃ、連絡帳に悟空の絵を描いてみる？」
「ウン。でもちびまるこちゃんでもいいよ」
「そっか。ちびまるこちゃんにしようか」
待合室から運んできたありったけの『ちびまるこちゃん』の中から一冊を選び、上に透明のシートをのせて写し、連絡帳になぞって色ぬりの段になりました。ところが、困ったことにポスターカラーの絵具が出ないので、
「先生、赤も出ないよ。白も出ないよ」
美奈子ちゃんは不服そうです。（失敗したなあ。ちゃんと調べておくべきだった。またふり出しに戻るのか）。もう、半分ヤケクソで、
「こら、出て来い出て来い！」
と試し紙に叩きつけたら、出ました、出ました。入口の絵具が固まっただけだったのです。美奈子ちゃんもマネをして
「出て来い、出て来い！」
とコンコン叩き始めました。そうして残りの時間は二人で手を絵の具だらけにしながら、
「出て来い、出てこい！」を楽しんだのでした。



現代生活考

むらき 数子

「ヒラヒラの呪縛(下着その二)」

「制服の下はどんな下着着てるの?」

「えっ、フツーですよ。ブラジャーにタンクトップ、タンクトップってランニングシャツのような形、レースなんてついてない。私は着てないけどスリッパ着る子もいる。下半身はパンティ+ブルマー」と、東京都北区の中二だったK少女(75年生まれ)に聞いたのが89年秋。制服のない都立高校の一年生になった彼女に、また聞いてみた。

「ブラジャー+タンクトップ+ショーツ」が基本、タンクトップの代わりにTシャツ、ブラジャーの代わりにハーフトップ、ということもある。夏だと「ビスチエ(肩ひもなしのタンクトップ)+シャツブラウス」で学校来る子もいるけど。ん?

松戸市の中一、78年生まれのN少女も、下着は「ブラジャー+タンクトップ+ショーツ」。母親Nさんがスリッパを買ってやろうとしても「いらない」。ブラジャーは小六の時、Nさんがメリヤス製を買って与えた。地域によっては「中学の入学準備の時、制服の注文取りの人が、ブラジャーの見本も揃えて持ってきてたから」買って与えた例もある。

'38年生まれのTさん、これを聞いて「今の子はそんなことしてるの!」。Tさんは宮城県築館町で育った。小学校時代は「ズロース+もんぺ」。中学は「シミーズ着るのは修学旅行など特別のとき」。高校生になっても母親手作りの「ズロース+シミーズ」。ブラジャーは、保健体育の女の先生からつけるようにと話は聞いたが、女同士でも、下着や体のことは話すものではなかった。

'57年、大学生になり、寮の隣室の友達が干してるパンティを見たTさんは「ウーンと恥ずかしくなって、持ってたズロース全部捨てたの。レースつきのスリッパも、ネグリジェもブラジャーも、大学入ってから使い始めた。ずっと清潔第一、と思ってきたけど、この頃は、見えないところで楽しもうって派手な高いのを買ったたりしてる」

Tさんの世代では十六歳の時、ブラジャーをつけていた人が五〇%、九〇%に達したのは二十歳という数字もある。

昔、下着は手作りするものだった。明治以来の小学校の裁

縫教育の最初の教材がじゅばんだった。戦後、家庭科の文部省学習指導要領も下着の製作例をあげている。'47年試案では「下ばき・シャツ・じゅばん・ねまき」、あるいは「じゅばん・下着類・コーセット」。'49年高校で「下着（スリッパ・ブラジャー・コーセット・ズロース・じゅばん）」。'51年中学（試案）でも「じゅばん・下着（スリッパ）」

だが、教材も教具も不足、新制への切り換えで混乱する現場の実施状況は、Tさんと同時期の女子大学生四八〇人についての本曾山かねの調査では、中学校で全く家庭科を受けない者が一・七%、スリッパを中学で作った者八%、高校で作った者一三%。

'60年前後の各種調査では、女子中学生のスリッパ所持率は五一%、シャツを持たない者一四%。「じゅばん十腰巻き」が主だった農村主婦に「メリヤスシャツ・メリヤスズロース・ズボン下」が一般化しつつあるが、ブラジャー・ガードル・スリッパはない。大阪府の四十代の主婦一人あたりのブラジャー所持数は〇・四校。まだ国民の衣生活は不足がちで、都市と農村の格差は大きかった。

清潔・身だしなみのためと教えられた木綿の手作り下着は、着心地もよくなく、美しさにも遠かった。この現実を直視した鳴居羊子は、'55年に下着デザインを始めた。ナイロンという新素材を駆使したヒラヒラと「美しくて機能的な下

着」「上着から自由な下着」にジャーナリズムが飛びつき、「下着ブーム」が始まった。女物下着を、男社会が商品としてとりあげ始めたのである。

ヒラヒラのスリッパを意識に刷り込まれた世代は、下着産業の教える通り、ファンデーション・アンダーウェア・ランジェリーを重ね着し、「スリッパを着ないと落ち着かない」。娘や生徒たちの薄着を不安がり、スリッパを着せたがる。'70年には衣生活は豊かになり、都市と農村も均質化が進んだ。

'48年生まれ、熊本県出身のNさんが「ブラジャー使い始めたのは高校一年か二年頃」。Nさんが高校生だった'65年、中橋美智子らの調査では、東京の高校生約一六〇人の使用率は、ブラジャー七五%、スリッパ類九〇%。シャツ八五%、

団塊の世代、Nさんたちは、既製品の着を当然として育ち、女がズボンをはくことに抵抗を感じない。アメリカのウーマンリブがブラジャーを焼き捨てた、と日本のマスコミは騒いだが、日本ではごく普通の女がブラジャーを着けるのがあたりまえになるとともに、自分の体や性について口にするようになった。

今四〇代の彼女たちは、二〇代に着たファンデーションやランジェリーの多くを着なくなり、中高生の娘との暮らしは、「娘見て ファッションまねる 親も親」（高校生おもしろ白

書」。普段着も娘と同じ「ジーパン＋Tシャツ」。

59年生生まれの横浜市のIさん「私がブラジャー使い始めたのは小学校五年か六年。たいていは中学入ってからみたい。今、ふだんはズボン。夏のワンピースのときもスリッパって着ない。裏つきだったり、付属のベチコート着たりで」。

Iさんが大学生になった80年前後には、短大生・大学生の下着省略の傾向がしきりと報告されている。一年中「ブラジャー＋パンティ」のみが多くなってきており、下半身用ファンデーション・ストッキングが簡略化され、「スリッパ・肌着の着用率は大学生は母親の二分の一」。短大生の中には、スリッパは四枚、パンティは二〇枚持っているが、シャツはゼロという例も。

86年七月、大阪の女子高校生三四一人についての調査（大阪府立高校家庭科研究報告 第一ブロック 昭和六一年度活動報告）によれば、ブラジャーの着用率は夏九三％、冬九〇％。スリッパの着用率は夏五％、冬一五％、一枚も持っていない者が二六％。ほとんどが「ブラジャー＋ショーツ」で過ごし、冬にはパンストを七九％がはく。

中橋美智子らの88年の調査によれば、女子の肌着非着用用の習慣は中学生期に確立する。

つまり、ブラジャーをつけるとシャツやスリッパを着なくなる。その理由は「なんとなく」。小学生の時に肌着を着て

いた理由も「なんとなく」、実は親に着せられていただけ。

下着の機能を意識して着ていたわけではないから、周囲が着なくなれば同調するだけ、らしい。小学生が友達と相談して一緒にブラジャーをつけ始めたり、体育の着替えの際に互いに見せあうだけでなく、K少女たち今時の高校生は仲間と雑誌を見ながら下着を選んだりしている。ブラジャーをつける理由も、エチケットや習慣だからであり、機能はあまり意識されていない。

「この先、どうなるんでしょうね」と憂える人もいる。だが、通りすがりに乳房にさわろうとする男がいる限り、ブラジャーを省略する女性はいないだろう。

スリッパの省略は、パンツ（＝ズボン）の日常化とともに、Tさんより上の年代にもひろがっている。女たちはヒラヒラの呪縛からようやく自由になりつつあるらしい。

「ブラジャー＋ショーツ」のみという着方は、セシル・サンローラン著『女の下着の歴史』によれば、すでに第二次大戦中のフランスで流行していた。下着産業がヒラヒラのランジエリー・ファンデーションを着せたのはその後のことだ。下着産業が省略されるまま撤退するはずはない。高級化路線も浮上しつつある。

ファッションの歴史から見ても、いずれまた厚着の時代がくるのだろう。

オホーツクの潮風荒く…

■江口 凡太郎

(4) 暴力以外に特効薬はないよ

本校には、初任者が自分を含めて三人います。それぞれ、授業の成立しづらいクラスをかかえて毎日が闘いです。

そんな中、地域の初任者研修で、生徒指導をテーマに初任者同士の討論がありました。

各校の実態報告では「本校の生徒は……」と生徒指導部長のような報告と、討論では「基本的生活習慣を身につかせ……」と自信に満ちあふれた発言が次々と出ていました。

本当に初任者の研修なのか？ と疑問に思いつきながら、なんだか、すっきりせずに帰ってきました。

その晩、最近知り合った小学校のベテラン先生から電話がきました。授業がうまくいっていないこと、初任研のことなどを話しました。「授業が子どもが本当に学びたい内容になっていないか」「管理され尽くした生活の中でむしろ生徒は人間性を取りもどしているのではないか」などいろいろ話してくださいました。特に「暴力以外には、授業を形式とし

て成立させる特効薬はないよ」という言葉になぜか励まされ、すっきりと、わりきった気持ちになりました。

さらに、その翌日から合同教研があり、ここでも「子どもの学習要求に合わせた授業をつくっていこう」という話がありました。他にもいろいろ刺激を受け、元気が出て帰ってきました。

そして新たな週を迎えたのですが、授業は相変わらずです。居眠り、マンガ、編み物、大声でのおしゃべり、これらが、堂々とおこなわれています。彼女たちの学びたいこととはほど遠い授業のかな、人間性を取りもどしているのかな、と思います。しかし、ガムを噛んだり、終わる前に教室から出ていったり……放っておくと私だけの問題でなくなるような気がします。

現に、音楽の同僚は、授業中ものが飛んでくるなどの大荒れが続いたことから、担任と一緒に授業につくという体制をとっています。こうなると、「教師間の共通理解」「指導の徹底」という言葉が脳裏をかすめ、本音とは違う「指導」をしなければならぬ状況が出てくるような気がします。

なにかからはじめたいのか……プリントの感想等に、返事をたくさん書いて返すこと。教科通信のようなものを書いてみることに。混沌とする中で、このあたりからはじめていこうと考えています。

「女と男の地平を拓く」

—都民会議レポート—



半田たつ子



霜月二十日おやかな小春日和、東京都庁の大会議室で、「91女性問題を考える都民会議」が開かれた。私は、十三人の企画委員の一人として、六月以来かかわってきた。大テーマは、私の発案で「女と男の地平を拓く」。昼は女性問題に関心をもち、すでに学習を積んでいる方たちを、夜は学生や勤め婦りの若い人々と対象を絞り、昼の部は『「女らしさ」』『男らしさ』のカラを脱ぐ。で、パネルディスカッション。夜の部は「自分らしさを失わずに恋愛できまますか」で、宝井琴桜さんの講

談と、内田春菊・くさのあきひろ両漫画家の対談。期待通りの刺激的な会議で、その成功がうれしかった。昼のパネルディスカッションを紙面の許す限りお伝えしたい。

パネラーは、落合恵美子（同志社大学講師）、斎藤学（都精神医学総合研究所 社会病理研究室研究員）、福沢恵子（ジャーナリスト）、守永英輔（旭リサーチセンター首席研究員）の諸氏。落合さんがコーディネーターを兼ねられた。

落合恵美子：「女らしさ」のみならず「男らしさ」のカラを脱ぐ、と題したところ、さすが東京都だ。今や、女性問題より男性問題になっている。昨年、京都大学の自主ゼミ「女性学」を担当したが、八割が男性だった。中に「自分は男らしさを獲得できなかった」という男子学生がいた。彼は小さい時から運動が駄目だったので、空手、合気道などをやっていたがうまくいかず、勉強でいくしかないと思った。一浪して京大に入ったが、浪人時代、必ずしも一流大学に入らなければならぬわけではない女子の浪人を、羨ましく思ったと言う。「でも京大に入ったからいいでしょ」と聞くと、「一番いいとされる学科に入れなかったから、男になれなかった」と。そして、

極めて男らしい男と、たおやかな女を主人公にしたマンガなど描いている。

守永英輔：団塊の世代を含む中高年と、その下の世代とで、ねじれ現象が起きているが、中高年の男性についての三点をあげたい。

1、勤労者の部分だけが肥大し、生活者の部分が萎縮している。男性固有の領域とされていた中に、女性がどんどん入ってくることによって、性差よりも個人の能力差が際立つようになっている。私たちは、仕事の場での役割を一生懸命果たしてきたが、親や先輩の定年後の生き方を見て、このままでは産業廃棄物になってしまう、と気付いた。生活者の部分を何とか回復したいと願う。ところが、そうは思っているにも、日本の男は口に出して言わない。生きていく喜びのフルーツは、すべて女性たちに握られていて、男たちはその場から外れている。

2、中高年の男が、いかにして生活者の部分を取りもどすか。日曜日、ステレオ姿テレビの前でごろ寝をしていけば、生活者としての自分をとりもどすチャンスを失う。生活は自分の手でやって初めてわかることだ。私は、骨折をして三か月家にいた時に、定年後自分がどうなるのかの疑似体験をした。妻は

生協の活動などをしており、昼間かみさんは家にいない、ということを思い知らされた。

3、高齢化のスピードが余りに速かったので日本は、その対応ができていない。高齢者を支えるのに、一家庭では、もうできない。男たちも、無関心・無責任ではいられない。男たちも地域にネットワークを持たないと困るということ、神奈川の中高年の男性五十人で、七月に「じやおの会」(おやじの逆)を旗揚げした。生活者としての体の半身を男たちが回復させることが、今後の課題だ。

斎藤学：精神科医として女性のアルコール依存症や摂食障害に日常的に接しているが、女性の自立意志が強くなるほど、その影の部分が大きくなり、その部分に症状が現れる。女は「女らしさ」アイテムで身を飾り、男も「男らしさ」行動を身につけることに極めて熱心だ。「らしさ」にこだわっているとロクなことはない。

日本の男は働き過ぎというが、男は生産性だけで評価される厳しい世界にいる。女のほうが顔の造作を含めて多面的に評価される。私もあいまいな生産性依存しかなかったが、アル中の人と付合うことによって、少し自分がよくなったと思う。

私はアル中の男の妻に「アル中の妻」の衣を脱げと言っている。夫には、飲みたければ飲め、しかし、その結果は自分で負えとつき放し、自分の時間は自分で大切にしない、

と。仕事依存者を支えているのは、その妻だ。夫の仕事依存を非難しながら、自分の子供を仕事依存者の卵にして、それを孵化して喜んでいいる。そんなことは、もう止めたらどうだろう。

福沢恵子：80年の初頭から90年まで特殊な男社会である新聞社で働いてきた。前半の5年間は、女性記者と呼ばれ、女であることがその人の特性を決めた。後半の5年間に「男性問題」という言葉が浮上してきた。80年代は「社会に出て働くのはよいこと、目指せ男社会」だったが、現実は何も変わらない。90年代に入って、社会に進出することがすべていいことではない。男が家庭に行こう(もともと家庭にはいなかったのだから「もどろう」ではない)というようになってきた。

男の生き方に疑問を持つ男性が出始めた。「ひと」といえば、かつては男が標準だったが、今は女を標準にするようになった感もある。働く上で男は事実上、独身であった。しかし例えば育児休業に見るように、働く上で

家庭の事情を引摺っている人があることが表に出てきた。こうして、今までの「男」を降りたい人が出てきたことは90年代のエポックメイキングだ。

一方「三高」希望の女がいて、それらは降りたい男など、鼻も引つ掛けない。依然として仕事依存症の男をつくるサイクルがある。仕事から降りたい男にマッチする女がいるかと言えば、また難しい。また総合職を挫折した女が増えている。仕事依存症の女にはマッチする男がいまいかといって、降りた男には興味がない。こうして「降りたい難民」がじわじわと増えてきている。

男の生き方、女の生き方にこだわらなくてよい、というが「個体差は性差を超えるか?」と問われれば、性別によって周囲の期待するものが違い、しかも強いから同じ状態におかれていると考えるのも不自然だ。

中野区に「男性の生活と意識に関する調査」があるが、男にとって大切なのは、責任感、決断力、誠実さ。女にとっては、優しさ、素直さ、気配りだと言う。女性に対して調査をしても、自分自身には責任感：を、相手には優しさ：を望むのではないか。共に暮らす相手が望むパーソナリティの持主であれば、

必ずしも異性でなくてもいいのではないか。ゲイ、レズということではなく、コミュニケーションとして考えたり実行したりしている人はいるが、住民票の関係で家族とみなされていない。

自分が自由に生きようとする時、それを阻むものが、女性だけでなく、男性にもあることが認識されて来た。社会的優先席を男性は持っているが、断固そこを守るのか、守りつつ降りたいのか、放棄して降りたいのか、そこを女性は観察して、男性を選ぶべきだ。

落合：降りたがっている男の話が出た。男も女もカラを脱ぎたがっているというが、身の周りを考えてみると、せいぜい片手で数えられる位ではないか。フェミニストからは、必ず反論が出るだろう。男がカラを脱ぐのと女がカラを脱ぐのとでは違う。男はすでにトクをしているのであって、カラを脱いでも、決してトクは捨てない、と。私は試算したのだが、性別分業がなくなれば、男も女も企業も社会全体がトクをすることがはっきりした。

守永：「降りたい男」という時の「降りる」の意味について、福沢さんに聞きたい。企業では「昇進」が一つのモチベーションになっているが、偏差値世代は、自分の位置をはやくから認めてしまっていて、昇進を目標に励むこ

とをしなくなっているのではないか。

福沢：男は、小さい時から女より達成目標が数多く設定されている。そこから自由にやりたいということだ。

守永：企業・労働組合・県人会：は車座社会で、これが日本人の生き方をよく出している。互いに顔を見合って能力プラス人格を評価しあう。男にとって、そこで評価されないことは大変なこと。中高年の男は、そこから自由になれない。

福沢：企業のプロトそのものが少なくなってきたというし、負けた時の心の機能に関するノウハウも、少しずつ生まれている。

守永：確かに企業の車座社会で忠誠を誓う帰属意識が、中年にもなくなってきた。企業そのものが一足先に転換して、企業を胎盤にしてぶら下がっている社員より、外へ出してどこでも通用するような男のほうが望ましいということを持ち出してきたからだ。

斎藤：人間はいつでも安全度を求めている。最も「降りている男」とは、死にたがっている男やおたく、族だ。性別分業論はくだらない。適材適所は当たり前だ。つまらない仕事を一方に押付けて、楽しいはずがない。安全度を求めて、われわれは生きています。それ

を比較的低いエネルギーで達成できるのがい社会だ。シングルライフはその意味からもいい。

ここでフロアとの交流に入って、35歳の都職員が「共働きで妻は年収が自分の二倍ある。収入に男らしさ・女らしさがあるわけはない」と思ってきた。妻の職場での姿を見る機会があって、以来妻を尊敬している」と口火を切った。また六十歳前後の女性が「暴君の夫に仕え、助産婦をしながら三人の子を育て憤死した母、未成熟な夫を三十年支え、離婚もできずにきた私、親を捨てて、自分のためだけに生きる娘」と女三代を語る。

男性から「シングルを志した女性が四十歳ぐらいになって、アルコール依存症や拒食症になるなど、さむざむとした姿を見ているが」との問いもあった。

守永氏は、「二世帯、三世帯住居をうたつて売り出した家が、いつのころからか、親子と限らず、きょうだいや友達であってもいい、ということになってきた。家族の形態が変わってきた証拠」と。

斎藤氏「高学歴の女性が結婚せず、親と同居している。若い子が親から離れ、社会的達成を急ぐあまり、体がおかしくなる現象があ

る一方、前者はゆうゆうとした生活のように見えるが、母娘が密着して離れられなくなる危険性がある。母―家庭、娘―職場という母娘カップセルではなくて、もっと人に惚れなければいけない。」

福沢氏「そのタイプは、以前は男に多かったが、最近女にも増えてきた。余計なことは背負わなくてよいスタイルだから、大変楽でこたえられない。本人はずっと続いてほしいと思ってしまう」。斎藤氏「彼女たちを支えてしまう『家』が問題だ。核家族は、たかだか四、五十年來のことだが、老人をどう抱えていくのか、子供を愛せない親の問題など、もうムリがきている」。

夫から85回もなぐられてきた妻を、どこも救済できないのか、という質問に対して。

斎藤氏「被虐待妻が、子供を虐待する。85回なぐられても、そこにとどまるといふことは、すでにその人は病人だ。女性のためのシェルターが極めて少ない。シェルターのネットワークも必要だ。逃げこんできた人に対しては、大学の先生の話でなく、ほんとうに自立できる手助けが必要なのに、それもできない。かつて被虐待妻で、そこを抜け出した女性と出会うことが必要。真剣に聞いて涙

して、自分はそこからどのようにして抜け出したかを語る集りに出ることが大切だ」。

「女が働くことは結構だが、家事・育児・介護をだれがするのか。それを解決しないままに働いてもいいのか。労働時間の短縮のほうが大切だ」という男性の意見に対して、落合氏は「家事・育児・介護を女だけの問題にすることに反対しながら、労働時間の短縮は、外国人労働者の問題や、給料を減らすこととともに引き受けなければならぬ」と。

守永氏は「家事専業の主婦と共働きの女性と家事時間の短縮の度合いは、主婦のほうが高い。働いている女性は、土日に一生懸命家事をしている実態もある。労働時間短縮については賛成。人出不足のために労働時間を短くしないと人が集まらない現象も起きている」。零細企業の役員を夫に持つ人の訴えや、介護・出産・育児に代替要員がないと社会が成立たないが、そこにも光が当たらないといけない、という意見も出る。

最後に守永氏は「40年間に、男女のかかわりが、目の前で変わっていった。さらに変化そのものが流動的だということ認識しなければならぬ。総論だけでは上滑りだ。各論をきちんと詰めていかなければならない。子

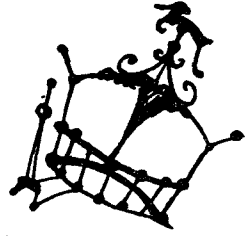
供を生み育てることも今やオプショナルになった。女性が子供を欲しくないと言った時、男性はどうするか、まだ詰められていない」。

斎藤氏「仕事からなかなか帰ってこない夫が、ちょこっと家庭的なことをやるのなど受けられないほうがいい。一生懸命やっていれば気がすむという情緒的なものでしかない」。

辛い人を支えるにも事大主義・権威主義の公的機関に期待せず、本心に志を持つ人達がポケットマネーでやっていくマイナーな会の中に解決の緒がある。ネットワークは保健所と福祉事務所と区役所をつなぐ組織ではなくて、人の心と能力を結ぶものでなくてはならない。活動の中で知合った志を同じくする人と共に暮らす楽しさ。家族を力説する人はこういう世界を持たなかったのだ」。

福沢氏「降りる」ことが議論になったが、広義の意味を持つている。精神的な一種の悟り、価値観であるとともに、企業から外れるという行為でもある。『降りる』行為は、自分の思いとともに、それを許すか、許さないかという周囲の目にも支えられる。しかし『逃げたい』という気持ちを持つことは大切。おかしいことは、おかしいと言いつづけられる関係を周りとの中に作ることを大切だ」と。

Weに
なんでも
言おう
なんでも
聞こう



◆We十二月号を拝見し、半田さんの最近のお気持ちやご決意を知り、感銘いたしました。「生と死」の問題は、科学が不当に介入し、暮らしの感覚が急変する中で、二十世紀後半の人間につきつけられた大テーマだと、私も思っていましたので、半田さんのご決意を拝見して、とても共感いたしました(臓器移植や体外授精についても、私は同じ問題意識でとり組んできたつもりです)。

(東京・青木やよひ)

◆半田さんは、Weの編集長から、今一番やりたい道を選んでゆかれるとのこと。十年という歳月は、おつれあいに支えられたものであること、そのことが大きかっただけに、失ってしまった時の空虚さは、いかばかりでしょう。半田さんの決意なさったことは、考え

て考えての末のことと思いますし、私など何も申しあげられません。ただ尾藤操先生がいらしたら、きっと半田さんのために、よきアドバイスを下さっただろうと思ひ、尾藤先生のご懐かしき思い出されました。あの先生のやさしさと判断力は、説得力がありましたから。Weは毎号ごとに皆さんのやる気が感じられますし、また視野も広く、時代の問題をいろいろな視点で取り上げ、充実していると思ひます。ここまでに至るには、いろいろと苦悩もおありだったでしょう。特に経済的な負担のことなど、これ以上個人の重荷にさせるわけにはゆかないでしょう。おつれあいのご逝去の悲しみによって開かれた道、きつとおつれあいも応援して下さいと信じています。

(花巻・押切郁)

◆Weが配達されると、まっ先に読むのが「波」なのです。十二月号を拝見し、私の心は大いに衝撃を受けました。そして、私の心は揺れ動いているのです。半田さんのやっていることに共感し、Weを愛してまいりました。Weから半田さんが離れる：寂しいことです。最近、寂しいことばかり重なり、私の心は重たい日々が続きます。We誌で、いつも半田さんにお

目にかかっているように思いましたが、今後はこの場で半田さんにお目にかかれるでしょう。でも「やりたいことが次々に生まれる」とおっしゃることや、半田さんの覚悟には頭が下がります。

(前橋・山賀ノブ)

◆「波」をまっ先に読み、ちょっと驚いても、新しい挑戦をされる半田さんのエネルギーがとてもまぶしくて、うれしく思ひました。十年間、ほんとうにありがとうございました。まだフェミニズムがウーマンリブだったころ、婦選会館で拝見した創刊のころ「購読はしなくてもずっと気になっていた「We」。直接の「運動」から離れて、子を持って、改めて親の立場で出会い直した「We」。いつも半田さんのまなざしを後ろに感じながら読んでいました。細やかなお便りがうれしくて書いた投書。でも、もうきつと、半田さんがいなくても離れられない。いつてらっしゃいますと申し上げたい思ひです。どうぞご存分に。一読者でしかない私が、えらそうな言い方ですけど。「学校なんか」と世の批判が寄せても「We」に心寄せる先生たちがある限り、学校も、その子供たちも信じられると

思います。

新たに「We」を背負って(?)。いく皆様、よろしくお願いいたします。

(藤沢・杉山百合子)

◆いつもWeをおもしろく読ませていただいております。十一月芦谷薫さんの「衣」の歴史を考える⁴を読んで、こんな先生に教えていただける生徒になりたいと思いました。中学校時代の家庭科は楽しくない科目の一つで、出来上がっても愛用できるような衣服は、何も作った覚えはありません。芦谷先生のように、何故? という好奇心を常に起こさせるような授業のすめ方は、すばらしいですね。大人がきいていても楽しい授業なのでしょう。

(小金井・彦坂童子)

◆十一月号、深く考えさせられる一冊でした。特に尹健次さんがインタビュアーの中で、「自分の国の言葉『国語』と言うのは、日本人くらいなものですよ。それをおかしいと思わないところに異常さがあります。…」と語られているところでは、はっといたしました。「昨年度まで『国語』と呼んでいた教科は、『日本語』となります。国語科を日本語

科にします。教科が目ざす教育内容には変化はありませんが、呼び方を変えることにしました」という「自由の森通信」を学園から受け取って、意識の端にひっかかっていたところでしたから、それとあわせてドキッとしたのです。

その理由は「国語ということばは国のことばであり、ことばの使い手であるひとりの人間よりも国ということが優先されていることです。第二次世界大戦で日本が敗れたあと日本の著名な人々が日本の国語を英語にしようとか、フランス語にしようとか考えたことがあります。また、戦争中、日本の軍部はアジアの諸国に国語として日本語を使うよう強要したこともありました。国語ということばにはその地域の人々の生活に根ざしたことは大切にしようにとすることよりも、国の都合のためにことばがあるという意味がつきまっています」と説明されていました。

子どもの館(福音館書店)の特集として、小学校一年国語教科書として「にはんご1・2」が出されたのは、十年以上も前のことです。その本もとりに出して来たりしながら「日本語」と「国語」のことを、ずっと考え続けています。

二月には、We十周年の記念の集いがありますとのこと、ぜひ参加したいと楽しみにしています。休みをうまくとれるかどうか?

(長岡京・金森順子)

◆こんにちは、お元気でしょうか。淡路島はここ数日、すがすがしい日が続いています。

こちらに引越して二年目、島の人たちの生活も、しだいに見えてくるようになりました。こちらでは、男性が台所に立ったり、育児に参加したりすることは、まだめづらしいことのように、息子を預かってくれる保母さんたちが家の様子に、驚いたり、うらやましがったり、興味深そうに関心を示してくれました。

三歳になった息子は、ままごと遊びで「お父さん」役や「お母さん」役を演じるようになりました。「お父さん」が料理をつくったり、「お母さん」がちょっと仕事に出かけたり、今のところ、比較的自由にやっています。その様子を見た父親が、「ボクの子どもの頃は、ままごとといえ、お父さんはお仕事ですよとほり出されていた。女の子は砂でいろいろ作って楽しそうにだけけれど、男の子はすることもなくブラブラして、ちっともおもしろくなかったんだよな」と言っていました。

◆ 私たちの「小櫃川の水を守る会」のフォーラムが、十月五、六日と開かれました。水道水源保護条例の制定をめざしていますが、なかなか壁は厚いようです。津市でも八年かかったとのこと。あせらず、少しずつでも皆の関心呼び起こしていかなくては、と思っています。高等学校教職員組合の先生方が母体(つ)となった会ですので、教育の現場での新しい取り組みも少しずつ広がっているようであれしく思っています。昨年から高教組、千葉教組の教研集会の分科会などで、「水を守る会」の報告をさせてもらったり、学校との交流は少しずつ広がっています。

何よりも、今の公教育の状況が変わらない限り、環境のこと、高齢化社会のこと、何をとりあげても空しいものがあります。とりあえず、やれることから……。でも、いろいろな立場でとりくんでいらっしやる方々と確実に交流ができてくつあるのを感じて、支えになっています。Weの皆様のご活躍に、心から敬意を表します。とともに、皆様のご健康をお祈りいたします。

(木更津・木田直子)

人間と教育を追求するウイ書房の単行本、 ぜひご購入下さい

—10周年を記念して、送料は不用です—

■見せかけの豊かさと裏腹に、人間がおとしめられているいま、生きる力を育むはずの教育が病んでいます。

みずみずしいのちを自ら絶つ子どもたちに衝撃を受けるあなた、人間が生きるに値する世を、どうしたら創ることができるかと、ためいきをつくあなた、人間に値するくらしを創る力を、どうしたら育むことができるかと、思い惑うあなた。

ウイ書房が心をこめて世に贈る下記の本に、あなたはきっと手がかりを得るでしょう。

■既刊本のご案内

著者	書名	単価	著者	書名	単価
半田 たつ子 編	家庭科新時代	2060	半田 たつ子	人間って不思議	1545
森 幸 枝	男女で学ぶ新しい家庭科	1339	半田 たつ子	木屋の匂う朝に	1800
宮坂 広 作	消費者教育の創造	2060	平井 雷 太	らくだか？ 翔んだ	1236
宮坂 広 作	共生社会への教育	2200	武田 秀 夫	私塾 復国語教室風景	1751
児玉 澄 子	教室のミニ舞台から	1350	羽生 楨 子	<詩集> 絵 Ⅲ	1030
児玉 澄 子	若いいのちの像	1339	羽生 楨 子	" 木鳥、娘たちとわたし	1030
学習の主人 松谷 孝子 編	子ども発、大人へ	1339	羽生 楨 子	" 夢運び屋	1545
長谷川 孝	子どもって不思議	1339	羽生 楨 子	花・野菜詩集	1648

わたくしから あなたに



世の中にはビワ型とキリ型の人間がいる。

ここでいうビワもキリも、植物のそれである。琵琶法師の楽器や、穴あけ道具ではない。

ビワについては、次のような迷信が知られている。「ビワの木を庭に植えてはならない。もし植えれば、死人や病人が続出して家運がおとろえる」。ビワの木は不吉なものとして、日本中で嫌われていたらしい。しかし、これはどうやら、ビワは植えてから実がなるまでがかなり長く、植えた人が死ぬ頃になってやっと実がなるため、死のイメージと結びついたようである。

一方、キリは、日本の一部に次のような知恵がある。「女の子が生まれたら、キリの木を植えるとよい」。これは、その子が成長して結婚する頃にはキリの木も大きくなっている

からそれでたんすを作って嫁入り道具にする」とよいということである。

両者とも、未来を考えるといるところは同じであるが、ビワの木は死や破壊のイメージ、キリの木は希望や喜びのイメージが、ビワ型人間、キリ型人間という二つの異なったグループによって定着させられた。ビワ型人間とキリ型人間の思考の違いをみてみよう。

ビワの実はおいしい。現代人が、ビワの季節になると心がはずむように、昔の人々もビワの実を愛していたのだろう。ビワの木を植えるな、というグループも含めて。

現代人と昔の人々の、決定的な違いは、平均寿命だ。昔の人々は、今でいう中高年くらいの年齢で死ぬ人が多かった。

子どもが成長すれば、それだけ親の死が近づくわけで、ビワもキリもそういう目で見れば不吉ということになる。だが、そうなると五十年、百年単位で考える林業は栄えなかったはずだ。記念植樹も不吉ということになっ

てしまう。ビワの木を不吉と考える、ビワ型人間の思考は「ビワの実はおいしいから食べたいが、ビワの木を植えても、自分は実を食べられないうちに死んでしまうかもしれないからやめて

おこう」なのだ。ビワ型人間は、未来のために今何かをなすことをしない。先人が植えたビワの実を食べて、自分は植えない。過去の世代が残しておいてくれたものを自分の代で使って、未来の世代には何も残さない。

キリ型人間は、自分が死んだ後の未来の世代の役に立つものを今から準備しておくタイプだ。未来の世代に残すもの、あるいは伝えていくものとは何か？ 私は「思いやり」という名のパトンドだと思っている。キリ型人間は、思いやりのリレーの走者である。

しばしば、キリ型人間はバカにされる。しかし、思いやりが笑われるような社会は恥である。これは、今はソントク勘定で物事を判断するのが一般的になっているせいである。誰かのために汗を流すことをバカげていると考えるのだ。困った風潮だ。

世の中には、いろいろな考え方の人間がいるが、どうせなら人類が幸福になれるような考え方をしよう。ビワ型人間の考え方が、人類の幸福につながると思えない。すべての人間がビワ型であったら、21世紀には資源はなくなり、ゴミの山と赤字国債しか残らないかもしれない。未来の世代にツケを押しつけてはならないのだ。

(東京・斉藤 裕)

◆ 編集室からあなたに ◆

We の編集から半田が離れることを、12月号の「波」に書きました。読者の方からお心のこもったお便りをたくさんいただきました。その一部は本号の「Weになんでも言おう、なんでも聞こう」に紹介させていただきました。皆様の熱い御支援を心から深く御礼申し上げます。

ところが、本当に申し訳なくて、言葉もないのですが、財政面の手立てができません。10年間の赤字は、七百数十万円を越します。We を引続きウイ書房から出すなら、スタッフがこの赤字を引継がなければなりません。それでは到底やっていけないところから、赤字は全て半田が背負い、We を別会社によって出す方法を考えましたが、それも難点があって、We を支える「We の会」の方たちとも話し合い、道を探っています。引続き、We を出すためには、まだまだ詰めなければならぬことが沢山あります。

We の灯を消してはならない、という熱い思いに支えられて、様々な選択肢が検討されつつありますので、暫く時間を下さい。但し、ウイ書房からWe を出すことはありませんので、'92年4月号以降の誌代を払いこんで下さっている方には、お一人ずつお便りをさしあげて、精算させていただきますので、お許し下さいませ。

なお、'92年We 夏季フォーラムの準備が、関西で着々と進んでいます。ウイ書房とWe の会共催のフォーラムは、予定通り開きたいと願っています。楽しい集いが開けるように、皆さんも知恵と力を貸して下さいませ。

来年2月初めには、小沢牧子さんの単行本『心理学は子どもの味方か？—教育の解放へ—』が出版されます。We に連載されて、反響を呼んだ内容に加筆され、他誌に執筆されたものや書き下ろしも加えて、素晴らしい内容です。この単行本は、小沢さんが経費を出してまで、ウイ書房から出版したいとお申し出されたものです。どうぞ、この新刊本を初め、ウイ書房の既刊本をお求め下さいませ。赤字を埋めるのに大変助かります。ウイ書房からのWe は2・3月号までで終わりますので、どうぞ、欠けている号、お友達に薦めたい号なども合わせて御注文下さいますよう、心からお願ひ致します。この号に挿入した振替用紙をご利用下さいませ。

なお、92年2月2日には、東京・神楽坂のエミールで、We 10周年を記念する会を開く予定です。具体的なことは次号で御案内しますが、ここにもどうぞふるって御参加下さい。

長い間、ご愛読、ご支援いただき、ほんとうにありがとうございました。

泉

この頁はあなたと私の情報交換の場
小さなスペースですが、ご利用ください。

◆アジア女性会議事務局だより

アジア女性会議が'92年四月二日〜四日に開催されます。本会議にむけて着々と準備が進んでいます。会議を成功させるために、私たちひとりひとりがアジアの歴史・現実をより深く知ろうと海外からのゲストを迎えております。ふるって御参加下さい。(チラシより)

。日時 十二月二十日(金) p.m.二時〜五時

。場所 早稲田奉仕園一〇一号室

。講師 スジンダ・ナワカノン・泉田

。問合せ アジア女性会議事務局

〒270 松戸市常盤平西窪町二十二ノ十七

☎ 0473-87-7800

◆冊子・「女子教育もんだい」実践資料集

・広島県豊田郡安浦における女子教育もんだいにとりくんで、今年で十三年目です。

教科書の分析・性差別の教材化とカリキュ

ラム化・教材づくり・男女別出席簿の混合化
・職員による性差別学習会などにとりくんで
きて集めた資料集です。

。B5版 100頁

。編集 安浦同和教育研究協議会女子教育部
会／広教組安浦支区女子教育もんだい部会

。問合せ 〒729-25 広島県豊田郡安浦町安

登三四七 和田正美

◆冊子・共学「家庭一般」(4単位)を実現する ために「家庭一般」指導事例集

。「家庭一般」4単位がぜひ必要なことを各
職場で理解してもらうために作成した「指導
事例集」です。すぐ授業に取り入れやすいよ
う、また私達のねらう教科目標に必要な学習
項目をすべて組み入れてあります。

。B5版 77頁

。編集 高教組「家庭科男女共学推進委員会」

。発行 山形県高等学校教職員組合

。問合せ 大場広子方 ☎ 0234-26-8492(夜)

◆冊子・「男子高校生に対する家庭科教育の 内容」

。'94年より高校の家庭科の「男女必修」がス
タートする。それにむけて、男子高校生に対

する新しい家庭科教育について、仙台市民の
要望を知り、男女必修家庭科のあり方を考え
るために、家庭科の男女共修をすすめる会・
宮城サークルが、一年間研究し、高校生の親、
高校教員、一般婦人を対象にアンケート調査
を行った結果をまとめたものです。

。B5版 50頁

。問合せ 家庭科の男女共修をすすめる会・
家庭科教育研究者連盟、両宮城サークル

〒981 仙台市泉区黒松二ノ十三ノ十四

西原典子方 ☎ 022-233-6445

◆冊子・あなたの街の外国人

——かけこみ外国人労働相談——

。急増する外国人労働者・彼らの声が聞こえ
ますか？ この一冊で分かる外国人労働者と
の付き合い方。

。目次 1 汝、隣人を愛せよ！(生活トラブ

ル編) 2 みんな同じ労働者だ！(労働ト

ラブル編) 3 入官は人権の墓場か！(入

官トラブル編) 4 早くアムネステイを！

(私たちの提言)

。定価 二千二百円(税込)送料 二百六十円

。問合せ 東京都中央区銀座西八ノ十

第一書林 ☎ 03-3572-1796



十字路



〈北海道〉目指せ!! “のびのび学園” (朝日10/11)

自由な教育を北の大地で実現したい。偏差値教育から振り落とされた子供に学ぶ喜びを味わせたい。こんな思いを持つ元教師や父母が十三日、中高一貫の私立学校作りを目指し、札幌市内で設立準備委員会を発足させ、教育内容の検討や用地取得に動く。

運動を進めているのは「北海道自由が丘学園(仮称)をつくる会」で、今年六月に旗揚げした。現在、百六十五人の会員がいる。

一九九四年の開校が目標で、計画では、札幌市近郊の石狩支庁当別町に中学校一学年一クラスの学校を作る。生徒は全国から募集し、寮も併設する。高校中退者や留学生、障害者も積極的に受け入れる考えだ。

問い合わせは、同会事務局(011-736-5345)。過去に光当て、鎮魂の像(朝日9/30)

昭和のはじめから戦中にかけて日本へ強制連行され、名雨線(現・JR深名線)と雨竜ダム(朱鞠内湖)の建設工事で犠牲となった朝鮮人を追悼する「生命の尊さにめざめ、民族の和解と友好を願う像」(願いの像)が、

空知支庁幌加内町の同湖近くに建立され、十月六日に除幕式が行われる。犠牲者の遺骨発掘と、韓国への返還運動に取り組んできた市民団体「空知民衆史講座」(山本良超会長)が全国に募金を呼びかけて実現させた。

「願いの像」には、「民衆レベルでの日本人の戦争責任と、今後両国民が生命と人権を基調にした新しい関係を作るための象徴」にしたいとの思いがこめられている。(高橋芳恵)

〈千葉〉介護体験で思いやりを―少年更生施設―「市原学園」(朝日10/30)

非行歴のある少年たちの更生で実績のある市原市の市原学園(渋谷和子園長)が、今年から「思いやりのある子に」と特別養護老人ホームでの介護の体験学習を取り入れている。すでに十一人の少年がお年寄りの寝起きからトイレの手伝いなどの世話をしたが、五日間の学習の最終日はお年寄りや寮母さんらと涙の別れをするなど、一度は心がすざんだ少年たちに感動を与える場となっているようだ。(木田直子)

〈神奈川〉自主性はくむ修学旅行(朝日10/16)

生徒が自分たちで計画を立て、旅行後はリポートを提出するというユニーク修学旅行を続けている横浜市の県立光陵高校。今年の旅行先は福岡、萩、金沢で生徒は3カ所に別れて出発する。いずれかに四連泊し、片道二時間以内で行ける所なら、どこでも行ける。

準備は一年のときから始まる。五月に、各学級から二人以上の生徒を出して「旅行委員会」を構成。行き先の希望をとったところ、右の三地域となった。

独り暮らしの「万一」に万全体制―藤沢市(朝日10/25)

藤沢市が進めている、独り暮らしのお年寄りからの緊急連絡用通報システムの新受信局が、二十八日、同市遠藤の特別養護老人ホーム「芭蕉苑」に開局する。初のパソコン導入受信局で、一九八七年から進めてきた市の緊急通報システム事業はこれで一応完了、全域カバー体制が整う。

このシステムは、独り暮らしや病弱者がいるお年寄り家庭に非常ボタンの付いた緊急通報用電話機を市が設置。「いざ」という時に、そのボタンを押してもらえば、受信局につな

がり、お年寄りと速やかに連絡がとれ、救援措置が素早く取れるようにしたものである。

(青木昭美)

〈東京〉上野小学校、公民館と合体して誕生
(朝日11/24)

台東区の上野小学校が社会教育センター(公民館)、温水プールなどと合体して新築され、五月からプールや、学校の体育館、運動場を地域へ積極的に開放して住民に利用されている。台東区は地価高騰などでスポーツ施設建設が進まない状態に追い込まれているが、児童数激減で「過疎化」する学校のスペースを有効利用して、地域に開かれた総合施設にしよう、との狙い。

総工費は約三十九億円。「生涯学習の拠点として、複合化によって幼児から高齢者まで幅広い利用に対応する」ことを方針として、一般開放されているプールを学校が授業で使ったり、学校のグラウンド(一三〇〇平方メートル)、体育館は夕方から地域に開放する形式で運営されている。音楽室、図工室、パソコン室など学校の特別教室も来年度から開放される。
(編集部)

〈大阪〉女性進出―教員試験合格者、高校でも半数超す(朝日10/19)

府、大阪市両教委は十八日、'92年度の公立小、中学、高校、養護教諭の教員採用試験の合格者を発表した。六千八百七十七人の受験者に対し、合格者は七百四十三人で、平均競争率は九・三倍。昨年度の十一・〇倍を大きく下回り、この五年間で最も広い門だった。また、女性の合格者が高校で半数を超えたのは初めてで、男女共修になる家庭科での採用を増やしたのが一因。

アサガオによる脱色・変色調査―酸性雨、
37都道府県で観察(朝日11/17)

アサガオの花の脱色・変色観察による酸性雨調査を続けている高槻市の環境保護運動グループ「高槻市民自主講座」(植村振作代表)は六日、全国調査の結果、観察の可能だった四十都道府県のうち、近畿二府四県を含む三十七都道府県で酸性雨によるとみられる花の脱色・変色を観察した、と発表した。うち府内では、観察した大阪府を始め衛星都市など計二十四自治体すべてで脱色・変色していた。この調査は、アサガオの花は酸に触れると

青が赤に、赤は白くなる性質を利用、酸性雨の影響を自分たちの目で確かめようと五年前から高槻市内を中心に実施しており、今年是全国に協力者を募って、種を送った。
(大江美香子)

〈鹿児島〉スミス写真集『水俣』復刊(朝日10/27)

五年前に絶版になった写真集『MINAMATA』の日本語版『水俣』が、十一月に復刊されることになった。水俣病の記録と保存の活動を続けている「水俣病センター相思社」(熊本県水俣市)が全国に呼びかけた復刊運動が実った。出版元の三一書房は「草の根の運動で復刊にこぎつけたのは、極めて異例」という。写真集は、世界的に著名な米国人の報道写真家ユージン・スミス氏(故人)が、アイリーン夫人と共に'71年から三年間、水俣に移り住んで手がけた。

新装版はA4変形判。百九十二ページ。五千百五十円。水俣病の現状を伝えるため、患者からの聞き書きや年譜を入れた十六ページの小冊子が新たに入る。
(横山雅子)

十 字 路

女子は約9万9千人が就職、史上最高の81.8%（同81.0%）になった。短大卒女子の就職者約17万7千人を加えると男子の大学・短大卒の就職者を約1万5千人上回る。（10.29日付 朝日）

★遅れる女性の職場環境整備

育児休業法の施行を'92年4月に控え、女性のための職場環境の整備について、首都圏の従業員50人以上の企業15,000社を対象に実施、11.6%に当たる1742社から回答があった（リクルートリサーチ調査）。

労働基準法の改正により'86年から、産後8週間未満の女性社員を勤務につけてはならないことになっているが、この調査では、設けている産後休暇制度について25%が、「7週間以下」と回答。また来年4月から育児休業制度が原則としてすべての企業に義務づけられるが、既に実施している企業は11%にとどまった。育児時間制度を実施しているのは20%、再雇用制度は43%だった。しかし、女性社員が企画会議に出席することがあるとしたのは33%で、女性に管理職登用の門戸を開いていない企業が76%だった。逆に「お茶くみ」が主に女性社員の仕事としたのは88%、「机の清掃」も71%だった。（11.16日付 朝日）

★がんばれ女性起業家

女性事業家の養成を支援するWWB（女性のための世界銀行）の日本支部「WWBジャパン」が発足一周年を迎え、活動内容をまとめた本『女はどんどん起業する』（アドア出版）を出版した。この1年間、問い合わせは約1500件、主催するビジネス講座への参加者も400人を数えるなど、順調な滑り出し。1979年に設立されたWWBは、女性が事業を興すため、一般の銀行から融資を受ける際に信用保証するのが主な事業。日本は39番目の支部として'90年11月発足した。（11.16日付 朝日）

★妊娠検査薬一市場へ

妊娠したかどうかを、自分で調べること

ができる妊娠検査薬の利用者が増えている。広告ができない医療用医薬品から、一般用医薬品として認可されることが決まり、来年夏、登場する。広告も解禁されることになり、新市場に向けて各社とも準備をすすめている。妊娠検査薬は、妊娠すると尿の中にでてくるホルモン（NCG）を酵素などに反応させて調べるもので、日本では'83年から店頭で販売されているが、医療用医薬品扱いのため広告宣伝は制限されているため、ロコミや女性誌で広がり、ここ数年、毎年10万枚・個ずつ増え続けている。（11.21日付 読売）

★「いのちの電話」が20周年

悩んでいる人たちの相談を受ける「いのちの電話」が日本で誕生して20年を迎える。現在全国に36のセンターを数え、さらに2カ所が準備中。全国での相談は年間36万件に上っているが、これらの相談を支えているのはすべてボランティア。「交通費まで自己負担」ということで、ここ数年応募者は減少傾向という。（11.7日付 朝日）

★尊厳死宣言が急増

死が迫ったとき、死期を延ばすためだけの延命医療はして欲しくないと「尊厳死宣言」をして、日本尊厳死協会（事務局・東京都文京区、植松正会長）に入会する人が、この1年だけで1万3千人を超えた。現在の総会員数は約2万5千人。同協会への入会者は、ここ数年、急増傾向を示していたが、一段と加速している。

同協会は1976年の設立。尊厳死の宣言書を募る形で「尊厳死」の考え方の普及啓発を目指す任意団体。同協会が受け付ける尊厳死の宣言書（生前発効の遺言書＝リビング・ウィル）では、①不治の状態での、死期を引き延ばすための延命措置の拒否 ②麻薬使用など苦痛を和らげる措置は希望 ③植物状態に陥ったときの一切の生命維持措置拒否の3点を記載している。（10.30日付 朝日）

★「単身赴任が悪い」とは言い切れない

東京理科大学訪短大の田中佑子講師らが新聞で募集した単身229家族、家族連れ180家族を調べた結果が仙台市で開かれた日本心理学会で報告された。

妻に対して、現在の生活で感じている心理的不快体験や心と体の変調、行動のみだれなどのストレス反応について聞いた。単身者の妻は家族連れで赴任している妻に比べて、寂しさを感じている傾向はあったが全体的に見ると、単身も家族連れもストレスの大きな差は見られなかった。単身の方が解放感を感じている妻もいればストレスに悩む妻もいるというように、個人差が大きかった。(11.2日付 朝日)

★母子手帳、モデルチェンジ

「母子健康手帳」が'92年4月、5年ぶりに改訂される。発育曲線のグラフ表示を改善して余計な不安や戸惑いを持たないように配慮し、新生児以降についても「育児のしおり」を新設、母と子の健康記録としてより使いやすくする。改訂のための検討委員会委員長を務めた日本総合愛育研究所、平山宗宏所長は、「核家族化などで育児不安を抱えたり、赤ちゃんの扱い方が分からない母親が増えている。女性の社会進出で父親の育児参加も求められるようになってきた。母子を取り巻く社会の変化に合わせて手直しです」という。(11.21日付 読売)

★水俣病未認定患者に国が救済

水俣病患者と認定されなかった人への国の総合救済策を検討していた中央公害対策審議会・水俣病問題専門委員会(委員長・井形昭弘鹿児島大学長)がまとめた答申案の概要によると、①有機水銀による影響が否定できない感覚障害のある人の「医療費」を負担、別に「療養手当」を支給 ②汚染地域住民の健康調査をする ③認定審査業務を促進させる——が主な内容。来月、中公審の環境保健部会の承認を得た上、環境庁に答申、手当の金額などを決め、来年度にも実施する。(10.30日付 朝日)

★湾岸帰還兵、こころの傷深く

英国オックスフォード近郊の村にある「湾岸帰還兵士の家庭内危機のための電話相談」には、今年5月に設立以来1200件以上の電話があった。相談は兵士の家族や友人からで、8割は陸軍関係者。兵士は戦場での体験を基本的には他人に話してはならず、個々の体験は定かではないが、症状は、無感動になる、うつ状態、暴力、金の浪費、家族や妻を愛せなくなるなど。ボランティアの1人であるモリスさんは、「米国の方が参加兵が多いだけ、より大きな問題を抱えているのではないか」という。ベトナム戦争の後では、帰還兵で結婚生活が破綻した率は平均の2倍、抗うつ剤の使用は平均の数十倍に達したといわれている。(10.23日付 朝日)

★女子高生が偽装結婚

大阪府内の女子高校生5人が両親に無断で婚姻届を役所に出し、日本でホストとして働いていた韓国人男性と偽装結婚する代償に戸籍代月約十万円を受け取っていたとして、大阪府警南署などは31日、公正証書原本不実記載、同行使の疑いで捜査を始めた。去年6月の出入国管理及び難民認定法(入管法)改定後、外国人の不法就労の取り締まりが強化されたため、「日本人の配偶者」としての在留資格をとって在留期間を延ばす偽装結婚が続発している。5人のほかにも金欲しさに偽って結婚している高校生がいる公算も大きく、文部省は大阪府教委を通じ調査に乗り出す。(10.31日付 朝日)

★大卒者就職率一女子が男子抜く

文部省の学校基本調査速報によると、今春の大学卒業者は男女合わせて約42万8千人。うち就職したのは34万8千人で、いずれも史上最高。就職率は好況を反映して81.3%と、'68年以来の高率だった。

とくに目立つのが女子の伸び。男子が就職者数約24万9千人で、就職率81.1%(前年81.0%)と微増にとどまったのに対し、

編集後記

◆「学校―絶望? 希望?」のシヨッキングなテーマのWe読者会は、関西方面や長野からの参加者もあって、会場はたちまち、いっぱい。授業

以前の生徒をとりまく社会状況の変化をまとめた佐々木賢さんのレジメにうなずくことばかり。状況の変化のスピードにはたじろぐ。「先生が、絶望したらおしまい」という田中裕一さんの言葉も印象に残った。(青木)

◆「ニューヨークのひとりの空間の厳しさは、クリエイティブな仕事をする者には快感だが、その徹底した合理性、個人主義はたまらなく冷たく感じた。自分を救ってくれたのは、ハーレムの浪花節的長屋のあつたかさであった」とは写真家の吉田ルイ子さん。

家庭が揺らぎつつあるいま必要なのは、それなのだろうな、周りから無くなってしまうな、と思う。(稲邑)

◆父子家庭が大変だと言ったって、母子家庭の経済的悲惨さに比べたら…、と思っただけけれど、春日さんの書かれたものを読んで初めて納得がいった。この号は夫への強力な脅しに使えそう。

ただちよつと気になったのは、父親も母親も、ひとりでは背負い込もうとしない、もつと子どもたちの力をあててにしているのではないかなという事。(河村)

♥我が子をいつまでも子どもと思っていれば、小言を言い返されて、言葉につまってしまうことがあります。自分で

は子離れできたと思っても、何かと気になり口を出してしまい反省、口は出さずに目は向けてと思っはいても……。

親はドーンと構えていなければと表むきは、でも内心はハラハラ。いつまでも親に出来ない私です。(渡辺)

★十二月号の本欄を書いてからひと月、眠れぬ夜を過ごしました。ウイ書房からWeを出し続けることは不可能と結論を下さざるを得なかったからです。その経緯は82ページに記したとおりです。人と人の関係は、人間を奈落の底につき落とし、またそこから引き上げるものであることを実感しています。「ウイ書房発あなたへ」のWeは、次号「男女共生の道を拓く」で終わりますが、次なる道が拓かれることを祈っています。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 90/夏増刊号 家庭科が変わる
—情報系のうねりの中で (¥721) | 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ (¥580) |
| 90/10 地域をよみがえらせる (¥567) | 91/5 少年・少女の現在 (¥580) |
| 90/11 高齢化会社がやってくる (¥567) | 91/6 心からからだへ (¥580) |
| 90/12 マス・メディアは何処へ (¥567) | 91/7 生と死を授業で (¥580) |
| 90/冬増刊号 出会いは歴史をつくる (¥721) | 91/8.9 ひとと生殖 (¥580) |
| 91/1 性役割の固定化は揺らいだか (¥567) | 91/10 買売春の構図 (¥580) |
| 91/2.3 新しい家庭科を創る (¥567) | 91/11 アジアの中の私たち (¥580) |
| | 91/12 地球再生へ向けて (¥580) |

新しい家庭科

Vol.10 No.11 1991年12月20日発行
定価580円(本体563円+税17円)送料共
年間購読料・定価7200円
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)若佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

「反原発」を生きる12人の女たち!

三輪妙子編著

女たちの反原発

四六判並製
240頁、1339円

現地からの報告に加え、さまざまな女たちが想いを述べ、語り合う。伊藤ルイ／千葉仁子／小木曾美和子／松浦雅代／落合誓子／伊藤至頼／堤愛子／三輪妙子／石塚友子／添野ふみ子／村田まり子／水沢靖子

女子教育もんだい

No.49特集 変わりゆく女性の労働 II 「女子労働管理の特色」 藤井治枝、「育児休業法」中野麻美、「女性の心身症」平川和子、他 永畑道子、奥山えみ子、斎藤茂男、中島通子

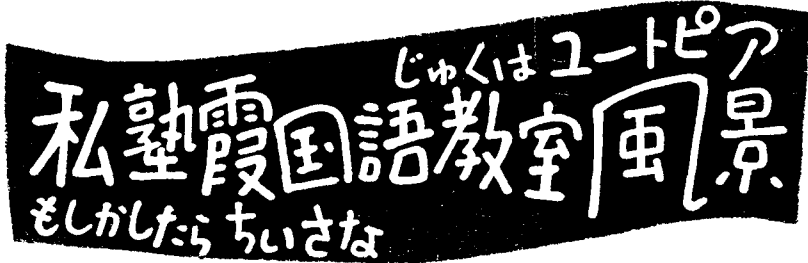
子どもと健康

No.24特集 II 「アレルギー」について II 「アレルギーとは」宮本昭正 「アレルギーの社会学」 山田真 「小児気管支喘息の現状と対策」 西野泰生 / 里見宏 / 毛利子来ほか

労働教育センター 東京都千代田区神田駿河台二一二一
〒一〇一 〇〇三 (三三五) 三三六二

3年間、あなたを魅了した「霞通信」!
あなたの座右に、お友達へのプレゼントに

武田秀夫著



目次 I 教室をめぐる三十の風景
II 日常をめぐる三つの断想

変型本 208頁
定価 1751円
送料 260円

ご注文は最寄りの書店に（地方小出版流通センター扱）。ウイ書房に直接お申し込みの場合は、送料をお添えの上 振替で。

182 調布市西つつじヶ丘2-25-14

ウイ書房

Tel 03-3326-1380
振替 東京6-59867

家庭科男女とも必修!
共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編
男女共修の家庭科の授業で、
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編
2060円 円310円



●男女で学ぶ新しい家庭科 —京都における歩みと実践—

森 幸枝
1339円 円260円

●消費者教育の創造

宮坂広作
2060円 円260円

●教室のミニ舞台から 児玉澄子 —こぼれ話20—

1350円 円260円

●子ども発、大人へ —いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」& 小沢牧子
1339円 円260円

●若いいのちの像 児玉澄子 —私のカウンセリング入門—

1339円 円260円

●らくだが翔んだ 平井雷太 —教育の常識の非常識—

1236円 円260円

●子どもって不思議 長谷川孝 —学ぶことは生きること—

1339円 円260円

<羽生槇子詩集>

●私塾霞国語教室風景

もしかしたらちいさなじゅくはユートピア

武田秀夫
1751円 円260円

●木、鳥、娘たちとわたし 1030円 円260円

●人間って不思議 —一つの視角—

半田たつ子
1545円 円310円

●絵 III 1030円 円260円

●木犀の匂う朝に 半田たつ子

1800円 円260円

●夢運び屋 1545円 円260円

●花・野菜詩集 1648円 円260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 3326-1380 振替東京 6-59867